Fate/BoogiePop

蓼野　狩人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブギーポップネタとＦＧＯネタのコラボに可能性を感じてもらう為に書き下ろした話。

ブギーポップに影響を受けた作家の誰もが好きな作者だったので「ブギーポップは笑わない」を読んで、ブギーポップが好きになったので書いた。それだけの話。

※原作を全て読めていないのでキャラが違うかも知れません

※ＦＧＯは最新までクリア済み。ネタバレ注意。

※登場する鯖は自分の持っている鯖を中心にしました。悪しからず。

※過度な期待はしないで下さい。

※感想好きです。気に入れば返信します。意見があればどうぞ。
※いつ終わるか分からない不安定な連載です。悪しからず。

目次

邂逅／ブギーポップ ―― 1
解析／ブギーポップ ―― 17
対話／ブギーポップ ―― 26
戦闘／ブギーポップ ―― 38
亜種特異点：克螺旋境界式　オガワハイム
思惑／『パンドラ』 ―― 51
戦闘／サーヴァント ―― 62
合流／サーヴァント ―― 77
予知／『パンドラ』 ―― 91
砲撃／サーヴァント ―― 103
世界は誤りで満ちている／上 ―― 116
世界は誤りで満ちている／下 ―― 128
エピローグ／更なる脅威 ―― 143
終局特異点：冠位時間神殿　パジュリー・オブ・ソロモン
夢現／イマジネーター ―― 156
夢幻／〝イマジネーター〟 ―― 169
平凡／マシュ・キリエライト ―― 182
胡蝶／マシュ・キリエライト ―― 196
番外編
藤泡対談／クラスについて ―― 207
藤泡対談／宝具について ―― 213
ステータス：ブギーポップ ―― 224

邂逅／ブギーポップ

世の中には時に奇妙かつ不可解な事件が起きることがある。
そして大抵の場合、事件に関わった人物は人類史に刻まれることとなる。
ジル・ド・レェ然り。
ジャック・ザ・リッパー然り。
アビゲイル然り。
勿論中には、人類史から外れた世界で起きた事件でも、その存在を人類史に紛れさせる者もいる。
代表的な人物を一人挙げるとすれば、やはり両儀式だろう。
モノの死を視る『直視の魔眼』を保有し、単なるナイフでも対象の〝死の線〟をなぞる事により、場合によっては吸血鬼に代表される不死の存在すら斃す可能性を持っている。運動能力も高く、唯マスターに使役され戦う存在であるサーヴァント相手に善戦する事も出来る人間。
そこまでの存在であれば、あるいは正史ではない世界だろうと英霊召喚（フェイトシステム）で呼び出されても可笑しくはない。ましてマスターと縁が出来ていれば尚更である。

ならば、彼のいる世界であればどうだろうか。
世界を守る為、人の内から表出する人でないモノ。
あたかも現代における二重人格のように、本体と切り替わり戦闘を受け持つ他者の人格（アルターエゴ）。
人類を護る為に力を振るうが、正義の味方では有り得ず、また裁定者でも有り得ない。
人から外れた邪悪を狙うが、魔術あるいは魔法を使う訳ではなく、また既存の人類史から呼び出された英霊という訳でもない。
人間の中から突如として発生する正体不明の意識。人間の身体を借りているだけでハッキリとした実体は無く、それでいて霊の類とも一線を画す。
その存在は初めて己の役割を自覚した時、死に際のある人物にこう名付けられた。
何の脈絡も無く表出し、世界の敵を屠る不気味な泡。
即ち、ブギーポップと。

〜・〜・〜・〜

その日も窓の外は氷雪に閉ざされており、廊下は召喚されたサーヴァント達の行き交いで溢れていた。

「カルデアの人材は連日の労働で疲れ気味だとマスターから聞いたので、余っていた虚栄の塵で栄養ドリンクを作成してみました。如何ですか？」
「あ、パラケルススさん……。いやその、遠慮したいのですが」
「ふーむ、それは残念ですねぇ……自信作なのですが」

「あらあら。リップったら、まーた怠けているのね。最近まで宝物庫で頑張っていたのに、こんな調子だとマスターに嫌われちゃうかも知れないわね」
「そ、そんな事ないもん！仕事だって最近入ってきた黒い鎧のバーサーカーさんに取られただけで、私が怠けてるワケじゃないもん！」
「へーえ。本当にそうかしら？私と違ってマイルームに行ったことすら無いクセに」
「それはメルトがおかしいの！なんであんなに気に入られてるの!?」
「うふふふ。理由なんて、リップに教えてあげる訳ないじゃない。自分で探しなさい？」

「よお。暇かい？若い頃の俺」
「おうとも！待ってたぜ、ちょいと歳食った俺！」
「ここは師匠もいないが、丁度いい。一度お前と戦って見たかったんだ。訓練ルームを

抑えといたから一丁鍛錬といこうや！」
「いやー流石俺！分かってんじゃねえか。まあしかし自分の方が年齢が上だからと油断していると、俺が勝っちまうかも知れねえなあ！」
「っは！舐めた口叩きやがる。俺より若いからといって調子こいてると、痛い目にあうぜ？」
「んなこたぁ分かってるよ！朱槍と翠槍、どっちが上かなんてまだ決まっちゃいねえんだからよ！」

「ど、どうだこのキュケオーンは。前より上達しただろう？」
「どれどれ……ふむ。なるほどこれは美味しくなりましたねーえ。麦粥とは思えない程の深い味わい、そしてコク。サーヴァントは成長しないという原則を突破したワザです。しかしマスターの好み的にはどうでしょう？ 私（ワタクシ）はマスターの好みを隅々まで調べ尽くしましたが、多分キュケオーンには飽きが来ているのでは？」
「そ、そんなバカな！つい昨日作った新作焼き立てバタートースト味のキュケオーンだって、笑顔で『美味しかった』と言ってくれたのに！」
「それ普通にバター塗ったトーストを焼けばよろしかったのでは？」
「私が作れる最高の料理はキュケオーンだけだ！」

「……こんな調子では主婦力アップにはまだまだ時間が掛かりそうですねぇ。カルデアのキッチンなんて赤いドンファンやもう一人の私（タマモキャット）が来たらすぐに乗っ取られると言うのに」

人類史を守る為に召喚されはしたものの、特異点を解決した後に訪れる束の間の平穏な時間を気ままに過ごすサーヴァント達。その合間を縫うようにして、緑色のマントを羽織った白い制服の男性が忍び足で駆けていた。背後にはウサギともネコとも似ていて違う、可愛らしい動物が軽やかに跳ねながらついて来ている。

息せき切った緑マントの人物は、カルデアの奥にある工房の扉に行き着くと、慎重に辺りを見回しながら扉を開いた。

「やあ、随分遅い到着じゃないかい？マスター」

様々な礼装、魔術触媒、資料で溢れている部屋の奥に一人のサーヴァントが立っていた。万能の人と呼ばれた何でも出来る系の天才、ダヴィンチちゃんである。

「すみません、遅くなってしまって。呼ばれた通りの時間に間に合うよう頑張ったんですけど、何せ廊下でみんながひしめき合っているから……」

緑のマントを脱いだ彼は、言い訳を重ねつつ〝マジでロビンありがとう〟と心の中で感謝の念を述べていた。彼が手に持つ緑のマントは、英霊ロビンフッドが所有する『顔

のない王』という宝具であり、着た人物を隠蔽する効果がある。
　そう、彼の名前は藤丸立香。カルデア唯一のマスターとして、人理修復の要である大勢の英霊を従える人物である。
「ふーん、ロビン君の宝具を借りる程こちらの事情を優先したということかな。何時もの君なら廊下の英霊たちを蔑ろにすることなんて無いし、話に捕まったら終わるまで付き合ってあげているようだからね。それ自体は偉いことだとは思うのだが、わざわざ宝具で回避するほどかね」
　自らの持つ杖をクルリと回し、謎の微笑みを浮かべるダヴィンチ。無論、数多くのサーヴァントを一人で従える立場にある彼の苦労は理解しているのだが、それはそれとして実験に遅れて来られるは嫌なのだ。
「今日は特別多かったんですよ。ロビンさんに偵察行ってもらったんですけど、『マスター、あんな中を着の身着のままで歩くってのは、オレの仕掛けた罠を正面突破するより危険ですぜ』って言われたので」
　廊下を歩く面々を思い出し、立香の頬を冷や汗が伝った。どれに捕まっても厄介事に巻き込まれていたに違いなく、もしそうなれば半日は時間に遅れていただろう。
「まあ、そこまで言うならこちらも気にしないでおくか。ところで要件は聞いてるね？」
「はい。確か新しい形式で召喚実験を行うと」

「その通りさ。具体的には今回、英霊召喚システムの一部に手を加えることで召喚の効率を上げようと思ってね」

ダヴィンチは何処からともなく、虹色に光る石を取り出した。美しい見た目だが、なんとなく現金に塗れたニオイのする石だ。

「知っての通り、召喚には色んな形式があるのだが我がカルデアでもスタンダードな方法がこの『聖晶石』を使った召喚だ。戦闘やレイシフトの際に発生する魔力を集めたもの。施設のメンテナンス時や、変則的なオーダー発生時、あるいは何らかのイベントが起きた際に多く発見される事がある。しかし詳しい発生条件は不明で、任意に生産することが極めて難しい石だ」

立香はその石のお陰でカルデアのサーヴァント達の殆どを召喚したので、多少の敬意というか、感謝の念は抱いている。しかし聖晶石を集めるのは大変な作業なので複雑な気持ちがあることも確かだ。

そんな彼の心情を読み取ったのか、ダヴィンチも複雑な顔をした。

「我々がこの石に助けられてきたのは確かだが、何せ希少な石を一回の召喚につき3個も消費するんだ。召喚されたサーヴァントのうちでも同じ霊基が六回以上出れば意味は無くなる。かといって戦闘力の高いサーヴァントは何度も出てこない。これからの戦闘を考えれば、召喚回数をもっと増やしたいのさ」

そこで一息ついたダヴィンチを見て、立香もまた心の中で同意した。何せ敵は強くなっていく一方だ。様々な状況に対応する為にも、クラスや属性を問わず一人でも多くのサーヴァントが欲しい。

しかしながら召喚は数を重ねれば重ねるほどダブりは多くなる一方。５回までならダブりが起きても初めからいるサーヴァントの宝具威力が上昇するメリットがあるが、逆に考えればそれも５回目まで。例え１００回ダブっても僅かな魔術資源を回収出来るだけで、戦闘に関する直接的な恩恵は一切ない。

つまり、カルデアは慢性的なサーヴァント不足に陥っているのだ。もちろん対応力が足りないという意味であって、数だけならむしろ多過ぎるくらいなのだが。

不意に立香が入ってきたドアが再び開いた。

「失礼します。ドクターがダヴィンチちゃんと先輩を呼んでいます」

「ああ、マシュか。召喚の準備が整ったようで何よりだ」

ダヴィンチがヨイコラセッと立ち上がり、そして立香の方を振り向く。

「今回の召喚実験は、その聖晶石の消費を減らす試みさ。システムの一部を改良して、一回あたりの消費量を3個から2個に減らせるかどうか。もし上手く行けば、これからのオーダーはグッと楽になるはずさ」

なんかフラグが立ったな。立香はふと謎電波を受信した。

～・～・～・～

「それではこれより実験を行う。召喚システムの改良により、マスターに危害を加えるような英霊は召喚できないようになっているが、今回の実験ではイレギュラーな召喚となるので、念の為私と騎士王が傍につく」

ダヴィンチが厳かな口調でモニター越しの職員に告げると、隣の騎士王であるアルトリアも頷く。召喚に用いる陣の周りには多くの機械が混みあった配線で繋がり合い、頭上のモニターには魔力や電力、マスターの健康状態などが随時グラフで記録されている。

「アルトリアさん、今日は食堂に駆け込まないんですか?」

今の時間帯は食堂が解放されており、普段であればアルトリア含む大食い英霊が我先にと突入する頃である。

「い…いえ。今日はもう十分食べましたし。それに食堂のキッチンに立っていたのがオケアノスのキャスターだったので…」

「つまりキュケオーン地獄が嫌だったと」

「そ、そういう訳ではなくてですね」

慌てる騎士王に対して、ダヴィンチが溜息をつく。
「全く。レイシフト先で食料を調達しているとはいえ、資源には限りがある事は王であるキミも理解しているんじゃないのかい？」
「しかし、召喚されても食欲はある程度ありますし、今のところ供給も間に合っています。それに資源を浪費する輩は私だけではありません」
少し拗ねた口調になるアルトリアであった。
『歓談中のところ、失礼するよ。こちらの準備は整ったし、そろそろ始めようと思うんだけど』
「やあ、ロマニ。了解したよ。マスター、心の準備は良いかい？前々から論理的には問題ないって事は確認済みだし、もし反抗的なサーヴァントが召喚されても、私と騎士王で対処出来る規模で抑えてあるから大丈夫なハズだ」
『本当に大丈夫なんですか？ドクター』
『ああ、大丈夫さ。僕もダヴィンチちゃんと一緒に確認したけど、立香君に何か起きる事はまず無いさ』
マシュの心配そうな口振りに、立香は苦笑いをした。
「僕は大丈夫だよ、マシュ。サッと済ませてマイルームでお茶でも淹れてあげるよ」
突如として、部屋中央に置かれた装置に光が点る。

「それでは実験開始だ。マスター、詠唱を」
ダヴィンチの言葉に立香は頷き、召喚サークルに向かって令呪の刻まれた右手を翳した。
「素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。
降り立つ風には壁を。
四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。
閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する。
――――告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。
誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。
汝三大の言霊を纏う七天。
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」

詠唱が部屋の隅々まで響いた直後、三重の円輪と十数個の光る虹の球体がサークルから出現した。

初めは穏やかに、次第に激しく回転していく光のパターンの中に、金色に輝く印が垣間見えた。

『これは標準クラスじゃないな…アルターエゴか？』

「――どうも妙だね。騎士王、構えた方がいい」

「ああ、分かっている」

アルトリアもダヴィンチも、召喚された霊基にただならぬ気配を感じた。これまでにも召喚例のあるエクストラクラス、アルターエゴ。複数の人格で構成されている点が特徴で、例を挙げると玉藻の前から分離したタマモナインや複数の神話エッセンスで構成されたメルトリリス、パッションリップが該当する。

しかし、今回召喚された霊基はアルターエゴであるかどうかすら怪しい。既存のクラスでアルターエゴが存在したから収まっただけ。そんな気配がしている。

円輪の回転が止まり、光が消失する。中央に浮かんだ印は下部から空間に溶けていき――。

「「……あれ？」」

そこにサーヴァントの姿は無かった。

「まさか、気配遮断!?」
「いや、普通どんなサーヴァントでも召喚直後は姿を現すものだ。それにこれは気配遮断じゃない。そもそも霊基自体がサークル内部に無いぞ!!」
　ダヴィンチとアルトリアが周囲を警戒する。
　その両名の間。立ち尽くしていた立香が不意によろめいたかと思えば、突然正面に倒れ込んだ。
『先輩っ!!』
『な、嘘だろ!?バイタルは正常だけど意識が無い!!サーヴァントの攻撃か!?』
「まさか!?私とキャスターの警戒している中で狙ったというのか!?」
「ともかく医務室だ!!実験中止!!今すぐ精密検査しよう!!」
　まさかの召喚事故に混乱する現場。その中心にいた立香は、床に手を着きユラリと立ち上がった。
『良かった！先輩無事だったんですね！』
「いや、これは違う！」
　異質な気配を立香から感じたアルトリアは剣先を立香に翳し、ダヴィンチは右手の礼装を立香に向けた。
『何が起きたんだ！立香君は立ち上がったのに、装置の一部が反応していない!!あれは

立香君であって違う存在だ!!』
「これは厄介な事になった…」
　ダヴィンチは震える声で現状から推測を導き出した。
「デミ・サーヴァントだ。恐らく召喚された霊基が、召喚直後にマスターの身体と融合したんだ!!」
「では、今現在マスターの身体を動かしているのはアルターエゴか!?」
「……ほう」
　立ち上がった立香、改めアルターエゴは溜息を零した。召喚室に緊張が走る。
「これはまた凄い状況だな。突然呼び出されるから何事かと思えば、まさか表出して直ぐに武器を向けられるとは」
　立香の全身はカルデアの制服だった筈だが、アルターエゴの影響かいつの間にか奇妙な服装に切り替わっていた。カルデアに召喚されている裏切りの魔女にも似た、縦長い帽子とマント。しかし帽子には鈍色の鎖が巻きついており、背中からは帯が二本、風もないのに靡いている。
「安心できない状況なのは分かるが、安心して欲しい。ぼくは君たちに敵対するつもりも、マスターに危害を加えるつもりもない。ぼくはこれまでだって一度も嘘を吐いたことなんてないからね」

アルターエゴは自らの口元を歪めた。それは立香が見せる純粋な表情ではなく、感情を一切表に出さない奇妙な表情だった。

「キミは……何者だ？」

ダヴィンチは問いかける。この状況で言うべき事では無かったかもしれないが、何故か問いかけてしまっていた。それは、アルターエゴの言葉に多少の誠実さを感じたからか。あるいは単なる時間稼ぎかも知れない。

その質問に、引き続き奇妙な表情でアルターエゴは答えた。

「まず最初に言っておくと、ぼくは正式なサーヴァントって訳じゃない。強いて言うなら、そうだな。ブギーポップとでも呼んでくれ」

そして両手をゆっくり上げると、引き続き言った。

「いや、本当に危害を加えるつもりはない。一先ず肉体の主導権はマスターに返すから、いくらでも精密検査してくれ。あと後ろ向きに倒れるから背中を頼む」

そしてマントは現れた時と同じように、いつの間にかカルデア制服に切り替わり、立香は仰向けに倒れていった。

マスターの身体を借りることで初めて召喚が成立する、変わり者揃いのカルデアでも一際奇妙なサーヴァント、ブギーポップ。

これはブギーポップがカルデアと共に世界の敵と戦う、ただそれだけの物語である。

解析／ブギーポップ

カルデアには多くの機能が備わっている。
それは大勢のマスター、職員、サーヴァント等が任務に当たる際、これを可能な限り支える事を想定してあった為だ。
よって医療器具に関しても、現代において考えられる限りの最新器具が揃っている。人間は勿論、サーヴァントに何らかの異常が見られた場合でも検査可能。数多くのセンサーにより心拍数、血圧、脳波のみならず魔力の量や種類、呪いの影響の有無や霊基の質まで調べる事が出来る。またカルデア設置初期からいた万能の天才（ダヴィンチ）が改良に改良を重ねた結果、英霊のステータス等の細かな計測も可能となった。
「…色々と調べてはみたが、大体は私の想定通りだ」
その医療器具から計測されたデータを見て、ダヴィンチは冷静に考察を重ねる。
「マスターは召喚直後、召喚された英霊の霊基と融合して疑似サーヴァントになった。そう見ていいだろう。いや、〝融合〟という言い方は適切では無いか。〝憑依〟とでも言えばいいのかな？似たような事例はシバに僅かな記録があったが、参考にするにはデータが足りなかった。魔術礼装でマスターへの魔術的な干渉は防いであるが、呪いの

類では無いから防げなかったと見るべきか」
「うーーん……でもダヴィンチちゃん。彼に同化したサーヴァントは、正規のサーヴァントと言えるのかい？クラスは以前にも召喚事例があったからともかく、このサーヴァントは異常だよ」
　ロマニもまた計測結果を眺めつつ、ダヴィンチに話しかけた。
「サーヴァントのステータスは一部不明な点があってもおかしくはないけど、彼の中に存在する英霊は全てのステータスが不明だ。名乗った名前も人類史に記録されていない。勿論、極度にマイナーな英霊である可能性は否定できないけどね」
「確かに、アルターエゴであること以外は詳細不明。手がかりも奇妙な見た目と名前以外ない。マスターが意識不明になることはこれまでにも何度かあったから、マスターが夢で別の世界に行っていないか調査してはみたけど……」
　ダヴィンチは計測結果の書かれた紙の一番下の数値を見た。しょっちゅう変な夢で戦闘してくるマスターがどの世界にいるか判断するため、ダヴィンチが考案した〝世界座標〟である。具体的な位置は分からずとも、大体今の世界線からどれ程離れた場所にいるかを示す数値である。因みに夢の舞台がカルデア内の場合は１～１０。正規の人類史の場合は最大でも一千万。非正規の人類史やサーヴァントの精神世界でも数値はしっかり出る。

しかし、そこに書いてあるのは数値ではなく〝計測不能〟という文字のみ。
「この数値が計測機に反応した時点でマスターが夢で別世界に行っていることは間違いない。しかし計測が不能になっているのは、このスキルの仕業かな」
ダヴィンチは計測されたスキル一覧の中でも一番上のものを指さした。

スキル：不気味の泡　ＥＸ
効果：不明

「確か、アルターエゴって人格とか霊基が複数で構成されているのが特徴だったっけ」
ふとロマニが呟く。
「このアルターエゴは、ひょっとして人格だけ英霊になったサーヴァントかも知れないね。計測結果から見ても複数の霊基で構成されている訳では無さそうだし、玉藻の前から分裂した個体という訳でも無さそうだ」
「しかし、私の知識の中には人格だけ英霊になる者なんて少数だ。二重人格の英霊は存在するが、それは表あってこその裏。実体無しに人格だけ召喚される英霊は私でも知らない」
語るだけ語った後、二人の間には沈黙が下りた。想定を外れた今回の事態では、対処

をしようにも何もできない。一応立花と連絡を取るためのパスを職員総動員で探しているが、全くつかめていない。以前エジソンが開発した霊界通信機もノイズが流れてくるだけ。万能と呼ばれたダヴィンチも、そしてカルデアの全てを見守ってきたロマニも、無力感にさいなまれていた。

ピーーー。

突然、立香に繋がれた機械からアラートが鳴った。

「ん？何があった？」

「これは……どうやら、お目覚めらしいぞ。ただ霊基の反応がマスターのそれじゃない」

ゆっくりと起き上がった立香の体は、一瞬で奇妙な服装に包み込まれていた。

「ブギーポップのお目覚めだ――取り敢えず話し合いと行こうじゃないか」

～・～・～・～

夢を見た。

夢を見た。

彼の夢だ。あるいは彼女の夢。

いや、この存在に性別なんて意味は無い。

なぜなら、世界そのものから生み出された存在だから。
彼に本当の名前は無い。
存在の理由はただ一つ。
世界の敵を殺すこと
それだけだった。

なんて救いのない存在だろう。そんなの……道具と一緒じゃないか。
突然現れ、悪を討ち、姿を消す。
ああ、カッコいいじゃないか。しびれる程に素敵だ。
でもそこに心がない。空っぽだ。
考える心は、敵を効率よく排除する為だけに付け加えられた。
……そんなの、嘘だ。自分を考える心がある時点で、そいつは人だろう？
人じゃないなんて、言わせない。
言わせたら、ダメだ。

「ほう、いい事言ってくれるじゃないか」
そこは、学校だった。

学校の屋上。平凡な街並みが見渡せて、吹く風が心地いい。
しかし、今の立花がいるべき場所では無かった。
「こういう事は、ひょっとして初めてじゃないのかな?どうにも困惑している表情ではなさそうだ。うん。召喚された時に少々情報が入ってきたけど、どうやら平凡とは程遠い日常を送っているらしい」
立花の隣には見覚えのない人物が座っていた。頭には縦長く、つばの無い真っ黒な帽子。体を裾の長い真っ黒なロングコートで包んでいて、手には包帯のようなデザインの手袋が嵌められている。
「この格好はぼくの趣味みたいなものさ。気にしないでくれるとありがたい」
立香の目線に気づいたのか、その人物は少年とも少女ともつかない声でそう言った。
「初めまして、マスター。ぼくの名前はブギーポップ。周囲の異変を解決するために出てくる、それだけの自動的な存在さ」
片手を上げて気楽に挨拶をしてくるブギーポップ。立花はその自己紹介に応じなければ、と思い声を出そうとした。
が、上手くいかない。
改めて自分の体を見てみると、どうやら手も、足も、腰も、胴体も存在していないらしい。全く感覚がない。自分はどうやら体をどこかに置いてきてしまったらしい。

「まあ、ここはマスターのいる世界から大分離れた場所だからね。体を引っ張るのは無理だった。でもマスターとはきっちり話をしたかったし、ぼくとマスターは直接会って話をすることが現状不可能だからね。致し方ない」

ブギーポップは立香に向かって座り直し、ここで夕暮れの光で陰になっていたブギーポップの顔が立香にはっきり見えた。立香はその顔を眺めて、この場所に来て初めて驚いた。その驚きは、例えるならのっぺらぼうやドッペルゲンガーに遭遇した時の驚きと似ていた。

何故なら、ブギーポップの顔は立香の顔そのものだったからである。

「やっと驚いてくれたかい?それは良かった。内心ぼくは不安だったからね。この程度のサーヴァントは前にも遭遇した経験があったのかも知れないと邪推してしまった」

そう呟いたブギーポップの唇には黒いルージュが引かれ、顔全体は白粉か何かで真っ白になっていた。

「あ、この化粧は君が嫌なら止めておくよ。なにせ君の体だからね。他人に色々いじくられたら嫌だろう?」

そう告げられた立香はふと今の状況を振り返ってみた。

確か、自分は金のアルターエゴを召喚実験で引き当てたことに成功したはずだ。隣にはコイツではなく、いつものダヴィンチちゃんとアルトリアがいた。

しかし、今。その召喚された対象らしいコイツの精神世界に居る。感覚的には他の英霊に夢で引き込まれた時のそれに近い。

そしてコイツの顔は、自分自身の顔である。

まさか――。

「そう、その通り。今の君は現実世界で気絶中。そしてぼくは君と融合して疑似サーヴァントとして現界した訳さ」

おいおいマジかよ。立香は隣で唇の端を吊り上げたブギーポップを締め上げたい気分になった。しかし体がない。殴ろうにも手がないと殴れないのだ。

「そう怒らないでくれよ。ぼくだってこんな状況をわざと作り出したかったつもりじゃない。でもぼくはそもそも正規のサーヴァントじゃない。召喚の対象になる可能性なんてゼロの筈だったのさ」

そこでブギーポップは軽く溜息を吐いた。

「まさか、ぼくが召喚に必要な資源を削ろうとした結果として召喚されるとはね」

そう、このサーヴァントは聖晶石の消費を減らす目的の召喚実験で呼び出されたのだった。

つまり配布鯖ならぬ割引鯖である。呼ばれた側からすればたまったものではない。

立香は謎電波を受信した。

「呼ばれたからにはしっかり働くし、契約を切られるのも癪だ。もしマスターのたどってきた道筋がこれからも続くなら、契約した英霊だけでは君を守り切れなくなるかも知れない」

　でも、とブギーポップは続ける。

「でももし、マスターがサーヴァントだったらどうだろう。敵だってまさか、無力なマスターが実はサーヴァントとして戦闘可能とは思わないだろう。いわば最終防衛ラインさ。敵の不意を突けること間違いなしだ」

　そう告げると、ブギーポップは左目をキュッと細め、口の右端を吊り上げた。立香であれば絶対しないような、感情が良く分からない奇妙な表情だ。だからこそ立香は、この存在が実は未来の自分自身だったとか、自覚していなかった自らの第二人格とかではなく、本当に別世界から来たサーヴァントなのだと再確認した。

「これからよろしく、マスター。僕は世界の敵ならぬ、マスターの敵を排除する自動的な存在として君に尽くそう」

　親しげに差し出された右手を見て、立香は思った。

　体が無いのに、どうやって握手すればいいのだろうか、と。

対話／ブギーポップ

ブギーポップ。
正体不明のサーヴァント。
原典は存在せず、パラメータもスキルも宝具も全て詳細不明。現時点で召喚者の体に憑依して初めて成立する擬似サーヴァントらしいこと。そして名前がブギーポップであるらしいことが辛うじて分かっている。
「ロマニ、マシュとアルトリアを連れてきてくれ。マスターが倒れたことを口止めしてある以上、情報漏洩は避けたい。ロマニが信頼しているサーヴァントや職員も二名までなら追加で連れてきてくれても構わない」
「分かった」
扉が開きロマニが出ていくと、ダヴィンチは目の前で体の計測用パッチを剥がして立ち上がるブギーポップを観察した。
まず、このサーヴァントは異様だ。何が異様かと言うと、魔力が全く感じられないのだ。普通サーヴァントは霊体で構成されていて、存在の維持には魔力が消費される。擬似サーヴァントであっても、サーヴァントとしての姿を現している時は必ず魔力を消費

している。
　しかし、このサーヴァントはどうだ。
　魔力の消費が全く感じられない。キャスターとして現界したダヴィンチが見ても、魔力の消費が感じられないのだ。動きそのものは感じるので、魔力で霊体が維持されているのは確かだが消費されている様子が無い。
（魔力を循環させているのか…？魔力を全く消費しない訳では無さそうだが）
　もしそうなら魔力パターンを読み取る計測自体が出来なかったはずだ。放出された魔力が微量でも計測出来るよう改造しておいた事がここで役に立った。
「……先程から黙りこくって、何を考えているんだい？キャスター」
「ああ、済まないねアルターエゴ。それともブギーポップと呼んだ方がいいかい？」
「そっちの方が助かるな。正直、召喚されたのは初めてだからクラス名で呼ばれるのは居心地が悪い」
　被っていた布団を丁寧に畳むと、ブギーポップは大きな伸びをした。
「うーー。流石に体を借りるのは久しぶりだからな。まだしっくり来ない部分もある。肩が妙に凝って仕方ない」
　コキッコキッと首を鳴らし、「ところでぼくにお茶を出してくれたりはしないのか？」と聞いてくるマスター顔のサーヴァント。その独特の調子にダヴィンチは少し気が抜

けてしまっていた。
　今回は非常事態とはいえ、今の所は平穏に会話が出来ている。この空気を維持したまま、情報を可能な限り得たい。
「済まないね、お茶は出せない。まだ君の素性がハッキリとしていない今、まずは君の口からこれからどうして行くかの話を聞きたいからね。場合によっては……」
　ダヴィンチはどこからともなくシンプルなデザインの短剣を取り出した。
「これはコルキスの魔女が使う宝具をオマージュして作り上げた、強制的にマスターとサーヴァントの契約を断つこと専用に特化した礼装だ。もちろん本物の刃物じゃない。先端をマスターの令呪に触れさせて、指定の呪文を唱えれば契約を強制解除できる。普段はカルデアのバックアップで対強制契約解除プロテクトがしてあるがね、それは私のお手製なのさ」
「つまり、自分で作った抜け穴をすり抜けて契約解除可能ということか」
「その通り」
　ここでブギーポップは、両の眼をスっと細めた。右手にはいつの間にか鋼糸が巻きつき、部屋の照明を反射して鈍い光を散らしている。
「なら、ぼくがここで抵抗したらどうなるのかな？」
「別に抵抗してもいいけど、抵抗した所でマスターの体に憑依した君に逃げ場はない。

ここは人理保護機関カルデアだ。今逃げ出したとしても足止めしてくれるサーヴァントはいるし、そして私が君と話している内に……」

ダヴィンチがふと黙ると、それに合わせたように部屋の扉が再び開いた。

「先輩！」

「マスター！」

「立香君！」

「えっ!?ちょ、誰よアレ!?」

「ほう…？雑種に何かあったか」

なだれ込んできたのは、先頭からマシュ、アルトリア、ロマニ、メルトリリス、そしてキャスターとして現界した英雄王ギルガメッシュである。

ロマニを覗いた全員がカルデアの中でも編成機会が特に多いサーヴァントばかりであり、カルデア独自の手法である種火強化も万全の戦闘力が高いメンツである。

「あらあら…さっきそこのチキンドクターから話を聞いた時は何事かと思ったけど、理解したわ。そこのサーヴァントを殺せばいいのね？」

メルトがカツカツと両足のヒールを鋭く鳴らした。既に加虐体質はオンになっており、いつでも痛めつける準備が出来ている。彼女の戦闘スタイルはバレエによる足技が主体であり、その踵で切り刻まれたエネミーは数知れない。

「そこな雑種が時間になっても我と鎖を集めに行かないとは、どうも妙だと思っていたところだ。成程、納得がいった。要は雑種に取り憑いた雑種を殺せば良いのだろう?」

ギルガメッシュは背後に光の波紋を展開した。

王の財宝(ゲート・オブ・バビロン)。

その無数にある波紋の一つ一つから杖の先端が出てくる。それぞれが原典として非常に強力な魔術が発動できる媒体である。英雄王として数多の財宝を所有していた彼だからこそできる力技。現代の魔術師なら誰でも腰を抜かすであろう、豪華な魔術行使である。

「ま、待ってくれ二人とも。二人の怒りも分かるが、ここは矛を収めてくれ。まだダヴィンチちゃんとブギーポップの話し合いは終わっていないんだから」

慌ててロマニが制止に入った。この二人はそれぞれマスターとの絆が高い為、立香に危害が及んでいる状況になると当然本気を出して敵を排除しようとする。ロマニが止めなければ容赦無しに戦闘を始めていただろう。

「アレは良いのかい?·ぼくは現状、マスターに取り憑いている状態だ。この状態で攻撃したらマスターの体も傷付いてしまうと思うのだが」

「いいや、あの人選は正しいさ。初め立ち会ったアルトリアやマシュは、当カルデアでも優秀な矛と盾。そしてメルトリリスはレンジが広いとはいえ、『心を溶かす宝具』を所有

している。上手く調節すれば君の心だけを溶かすことも可能さ。そして英雄王は様々な宝具の原典を所持している。その中に霊基だけを攻撃する宝具があってもおかしくは無い」

それもこれも、ロマニの冷静な判断あってこそである。まともな直接攻撃手段だけの状態であれば、ブギーポップは自らの持つ手札である立香の肉体を人質に取引するかも知れない。そうなれば交渉は意味をなさず、一方的な取引となってしまう。

加えて、ブギーポップはどうやら今すぐ何かをしでかすつもりは無いらしい。今までの態度から見てもそれは明らかである。ということはブギーポップとは話し合いの余地があるという事であり、そして話し合いには対等以上の立場になるための手札が必要である。

そして当カルデアで用意出来る最良の手札が、メルトリリスとギルガメッシュだったという訳である。

「それはまた、用意のいい事で……。これじゃあぼくが悪役みたいじゃないか。流れ的に仕方ないとはいえ、なんだか残念だ」

やれやれ、と首を左右に振り溜息を吐くブギーポップ。その首筋には一筋の汗が流れていた。新たに呼び出された二人のサーヴァントが、本当に自分を排除できる敵なのかどうか。それは現時点で不明だ。

ひょっとすればマスターを傷付けず自分だけを攻撃する手段、というのはハッタリかも知れない。

しかし自分には攻撃する意図は無いとはいえ、これ以上ヘタに刺激すれば印象が悪くなるに違いない。剪定事象の回避を目的に現界した以上、ここは穏便に済ませたい。

故にブギーポップは、自分に敵対の意思はないこと。自分がマスターの最終防衛ラインとして働く事をマスターと話し合い合意したこと。そして物騒な踵や杖に剣と盾（もちろん先輩想いの後輩や腹ペコ騎士王も警戒していたのだ）を下ろしてくれるように頼んだのだった。

～・～・～・～

「うっ…」

酷く妙な夢を見た。

人ならざる者が、人の身を借りて悪を討つ。

そんな夢だった……気がする。

「……輩、先輩、先輩！」

「……マシュ、か？」

酷く鬱々とした気分になりながら、立香は目を開けた。夢らしい夢の方は内容がよく思い出せなかったが、直前までブギーポップと交わした会話はよく覚えていた。立香は自分の中にいる別人格のことを思い返して、どうやら自分が倒れた後にカルデア全体に迷惑を掛けたらしいなと勘づいた。

「ごめん、多分だけど迷惑掛けたかな……。また夢で今日呼び出したサーヴァントと話し合っていたんだ」

「せ、先輩は悪くありません！あの召喚実験自体が今回の事態を起こしたのであって、先輩に責任はありませんよ」

その言葉にマシュの肩に乗って立香を覗き込んでいたフォウも、「そうだそうだ」とでも言いたげにフォウフォウと鳴いた。

「いや、でも僕はよく突発的に倒れちゃうからさ……」

「マシュの言う通りよ、馬鹿なマスター。相変わらずの巻き込まれ体質じゃない。普段からボケっとし過ぎじゃないかしら？私を心配させないで頂戴」

「フン、雑種ごときが思い上がるなよ？王である我ですら補佐に命を下していたのだ。貴様は貴様らしく他人に迷惑を掛けることに慣れておけ」

「……で、何でメルトにギルガメッシュが居るの？」

先程まで夢の中に居た立香は当然、何故立香が意識を失っている間にコイツらが来た

のか良く分からなかった。
「いや、今回君の体を借りて現界したサーヴァントを説得する為に僕が呼んだんだよ。立香君、体に障りは無いかい？」
　その質問に答えたのは、マシュやフォウとは反対側に居たドクター・ロマンことロマニだった。顔は微笑みを浮かべていて、どうやら立香の無事に心から安心しているようであった。
「ああ、はい。別に体に支障はありません。自分の中に……アイツが居るってことが本当なのか分からなくなる位には、なんともありません」
《そいつは良かったじゃないか》
　不意に思わぬ場所から話しかけられ、立香はビクッとして右手首の装置を見た。気絶するまでは無かった装置だ。一件タッチパネル式の腕時計の形をしているそれの、側面にあるスピーカーから声が出ているようだ。
《失礼。ぼくがキャスター……ダヴィンチに『自分はマスターと入れ替わらなければ会話出来ない』と告げたところ、急遽入れ替わらなくても話が出来る魔術礼装を作ってくれてね。あっという間に作るものだから驚いたよ》
　気楽に話しかけてくるその腕時計の声は、中性的な雰囲気だったがよく聞くとやはり立香自身の声だった。つまりはブギーポップである。

「やあ、ついさっきマスター自身の意識と入れ替わったみたいだね」
　後ろを向くと、そこにはお馴染みダヴィンチちゃんが杖に寄りかかってニヤリと笑っていた。
「いやー、こっちは大変だったよ。なんせ突然マスターが擬似サーヴァントになるという事例はカルデアのデータベースの何処を探しても無かったんだ。付け加えると、先程行った説得が上手くいくまでは良性のサーヴァントかどうかすら分からなかった。いくらマスターの命令には絶対の筈だからと言って、実際の聖杯戦争ではマスターとサーヴァントが互いを裏切ることなんて腐るほどあった。実験の異例さも踏まえて慎重にならざるを得なかったんだ」
「ダヴィンチちゃん……ありがとう」
　立香は頭を下げた。人理修復の旅をこれまで続けてきた立香には、ダヴィンチの顔色で如何に苦労を掛けたか推察することが出来た。ブギーポップ自身は謎が多いものの人理修復に肯定的なサーヴァントだ。
　しかしそんな事は話して確認しなければ分からない。
　ブギーポップの本質を見極める為にも、様々な事に警戒しながら話し合う必要があったはずだ。
「僕もブギーポップと話してみたけれど、大丈夫そうな英霊だったよ。これからの人理

修復にも手を貸してくれると思う。もし何か面倒な事になれば、それなりの対処をするよ」

その言葉を聞いて、ダヴィンチは満足そうに頷いた。

「成長したものだよ、君は。初めてあった時とは比べ物にならないくらいには成長している。しかし君に危害が及んでしまった責任は私にある。万能の天才としては恥晒しもいい所だ。この度謝るべきは私の方さ」

そしてダヴィンチもまた、立香に対して頭を下げたのであった。

「あの、少し良いでしょうか」

ふと今まで黙って控えていたアルトリアが声を上げた。

「今回からマスターの擬似サーヴァントとして加わったとの事ですが、実際の強さを確認する必要があるように思います。ロマニ殿から聞いたのですが、強さの凡そを示すパラメータが計測出来なかったとなれば……」

「ほう、我と意見が会うとは珍しいなセイバー」

ギルガメッシュも右手の石版を仕舞いこみながら同意した。

「人理修復に人手が足りぬ。そしてそこなマスターと同化した奴がマスターの保護を担うのであれば、庇いながらの戦闘も幾らか改善するに違いない」

左手に軽く握った斧の石突をコツンと鳴らす。

「しかし戦闘力が未知数のままでは、完全に任せて良いかどうか疑問が湧くというもの。ある程度はハッキリさせておかねばならんだろう」
「それなら僕も考えていたさ、英雄王」
　ロマニが手元から連絡用の端末を取り出した。
「戦闘訓練用の部屋を一つ開けておいた。立香君には申し訳ないけど、次のレイシフトまで時間が余りない。一時間程マイルームで休んでもらってから、ディナータイムが始まる前に一度ブギーポップ君の戦闘データを取らせてもらおう。いいかい？」
「僕は…構いませんよ」
《ぼくもいいだろう。何分特殊なサーヴァントだからね、計測の失敗については申し訳なかったところだ》
　立香に続いてブギーポップもロマニの提案に同意した。
「ふーん、じゃあ私も近くで見せてもらおうかしら。まだソイツが裏切らないと決まった訳じゃないのだから、監視の意味も込めてね」
「わ、私もお願いします。マスターの体調が心配なので」
　二人の言葉もあって、一時間の休憩を挟んだ後にメルトリリスとマシュの付き添いでブギーポップの模擬戦闘を行うことになった。

戦闘／ブギーポップ

カルデアにはサーヴァントの戦闘訓練用に設置された施設がある。
勿論、単なるジムとしてのトレーニングルームも存在するが（ケルトの兄貴が筋肉を見せびらかすので誰も近寄りたがらない）、実際の戦闘を忠実に再現する為に用意された部屋が幾つか設置されている。偶に一人で腕を磨く物好きサーヴァントもいるが、この手の部屋は大抵実際の戦闘の再現とあってマスターとサーヴァントが一緒に利用する。
『ようし、準備完了だ。いつでも始められるよ』
立香の手元にある通信機からロマニの合図が届く。
《マスター、入れ替わるけど心の準備は良いかい？》
その合図を受けて、右腕の礼装から確認の声がした。
「いや別に入れ替わるのは良いけど、ひょっとして前みたいに僕がぶっ倒れている状態からになるの？」
立香としては入れ替わる度に毎回ぶっ倒れるのはゴメンである。例えば火山の中での戦闘中に入れ替わってしまえば、礼装で守られているとはいえ怪我は避けられないだ

ろう。おでこや後頭部を火傷するくらいならともかく、マグマ風呂に入浴するのは非常に不味い。具体的には間違いなく死ぬ。
《そのことに関してはぼくもどうしようもない事だ。ぼくは元々自律的に表出するものじゃなく、自動的に敵が現れたら表出する存在なのさ。自分から表に出るのは慣れていない。これから慣れればマスターが倒れる事も減ると思うがね》
　よくもまあぬけぬけと語れるものだ、と立香は溜息を吐いた。
《つまり、マスターが倒れる際に誰かが支えてくれるとありがたいって事なんだけど、そこのマシュ？だったかな。頼めるかい？その盾はマスターを受け止めるのに丁度良さそうだ》
「先輩、私が支えるという事でいいでしょうか」
「じゃあ僕からも頼むね、マシュ」
　その様子をメルトリリスは羨ましそうに見つめていた。メルトリリスは立香を手で受け止めるのに向いていないのだ。本当は誰よりも自分が支えてあげたいメルトだが、目の前で
　軽くイチャつくマシュと立香を眺めることしか出来ない。
　因みにだが、メルトがうっかり手ではなく足で受け止めると立香は膝や踵の凶器に貫かれて絶命する。

「……とっとと始めましょうよ、マスター」

『よーし、じゃあ手始めに特異点Ｆの環境を再現しよう』

ムスッとしたメルトに続いたロマニの言葉と同時に、周囲の壁が景色に塗りつぶされていく。

燃える街並。日常を突如として喪った人々の声無き悲鳴を、絶え間なく瓦礫を嘗める炎が代弁する。

冬木の街を襲った始まりの悪意。その光景に立香は何かを思う間もなく気が遠くなっていった。

《……あれ？これはどういう…》

「どうもこうもないだろう、マスター。君の指示が無くなれば戦闘において混乱は必須だろう。ぼくが入れ替わった時、指揮する代わりのマスターが居なくなっては困るだろう？」

マシュの盾に背中を預けたブギーポップはしれっと告げた。

そのカルデア用制服には、上から真っ黒で襟の大きなマントが掛かっている。頭には

縦長く不思議な飾りの付いた帽子。手には包帯のような手袋……ではなく今回は短いベルトが5、6本巻き付いている。言わずと知れたブギーポップ独特の服装である。

その右手には立香であった時と変わらず起動中の礼装があった。そのスピーカーから漏れる声は、先程切り替わった立香自身のものだ。

『やぁやぁ諸君。伝達を失念していたようで済まないね』

通信機からロマニに替わってダヴィンチの声が響いてきた。

『その礼装はマスターとブギーポップ君が入れ替わる際、不便が無いように工夫したものだ。普段は礼装からブギーポップ君と会話可能にする為のものだが、ブギーポップ君が表出する際はマスターが会話できるようになっているのさ』

「へー、凄いじゃない」

珍しくメルトリリスが素直に目を見開いた。

『ふふん、これでもカルデアの顕学の片割れ。万能の天才として成すべきことを成したまで』

『はいはいエネミー接近前方三体だよー』

ダヴィンチが胸を張って自分の有能さをアピールする間に、ロマニが通信に割り込んでエネミー接近を告げた。

「ぼくの戦闘能力を計るということで、そこのお二人には控えてもらってもいいかな?」

「手は出しませんが、何かあってもサポート出来るように近くには居ます」
「まあ、私は監視役だから怪しげな行動を取らなければ手出ししないわよ」
二人の了承を得ると、ブギーポップはどこからともなく鋼糸を取り出した。
《頼むから怪我しないでくれよ?》
自分の体が傷つくからではなく、純粋にブギーポップの心配をする立香の声に彼は無表情でこう返した。
「――体を借りている身分だからね。怪我一切なく敵を排除すると約束しよう」
その言葉が終わるか終わらないかのうちに、正面の物陰からボロ布を纏ったスケルトン達が襲いかかってきた。

〜・〜・〜・〜

サーヴァントが扱う武器は多種多様である。
大抵はクラスに応じた武装――剣、槍、盾など――をしているのが普通だが、例えばアーチャーでは弓ではなく他の武装をしているサーヴァントの割合が高い。また暗殺目的というより拷問目的の器具を武器とするアサシン、乗り物を多用せず剣術をメインとするライダー、呪文を唱えると舌を噛む高位のキャスターも存在する。

つまり、サーヴァントの武装はクラスに依らず何でもアリという事だ。歴史上を辿れば数多く存在する英霊達はそれぞれが個性を持ち、自らの在り方を英霊の座に記録している。カルデアの素晴らしい点を挙げるとすれば、その英霊達をサーヴァントとして従えることでどんな戦闘にも対応出来るように工夫した事も入れる必要があるだろう。

そしてこの度新たなサーヴァントとして召喚されたブギーポップ。その武器は鋼糸である。

『なっ……』

通信の向こう側で絶句するロマニ。彼の眼前にあるモニターでは信じ難いブギーポップの戦闘が繰り広げられていた。

空を舞う鋼糸。迫るスケルトン。その首に初めからそうだったかのように自然と鋼糸が巻き付く。巻き付いた瞬間、ブギーポップは己の足を踏ん張って糸を僅かに握って引いた。

カクンッ

それだけでスケルトンが一体死んだ。

鋼糸を手元に戻すブギーポップの側面から、今度は槍を持ったスケルトンが飛び込んできた。剥き出しの歯をカチカチ鳴らしつつ、両手に握った槍の穂先を胸元に向けて飛び込んでくる。

そのスケルトンの槍を、ブギーポップは地面を蹴って宙に舞い回避。そのまま後ろを見ずに三体目のスケルトンと対峙した。背後では槍のスケルトンが一瞬で仕掛けられた鋼糸トラップに引っかかり、自身が抜け出そうと暴れた力で八つ裂きとなってしまっていた。

「弱いな」

ブギーポップは詰まらなさそうな顔で新たに取り出した鋼糸を操り、三体目の所持していた短剣を絡み取った。その勢いのままスケルトンの肩から腰骨に鋼糸を巻き、いわゆる袈裟斬りの様に体を上下に断絶させた。

《凄い……》

立香はその残酷なまでの美しさに息を呑んだ。煌めく糸が敵の悉くを刻んでいた。戦闘時間はほんの僅かな間であった筈なのに、ブギーポップが敵を殺すその所作が目に焼き付いて離れなかった。

「……敵に回ってほしくないわね。例えマスターの体を借りていなくても」

メルトリリスが薄い唇を噛み締めて呟いた。マシュもつい今しがた目にした戦闘の美しさを思い返しているのか、盾を構えたまま放心していた。

「……すまないが、これでもうデータは取れたのかい？」

流石にしんとした空気が気まずくなったのか、ブギーポップがつっけんどんに確認す

る。
『あ、いや。まだだ。戦闘データを揃えるにはもっと色々な敵との戦闘が必要だからね。すぐ切り替えるよ』
　ロマニが慌てた顔で告げると、周囲の景色が今度はフランスの草原を思わせるものに切り替わった。

〜・〜・〜・〜

「結論から言わせてもらうが、彼の――ブギーポップの戦闘力は桁違いだ」
　カルデアにおける立香のマイルーム。そこでダヴィンチ、ブギーポップから切り替わった立香、そしてロマニがテーブルに置かれたコーヒーを飲みながら話し合っていた。立香の右手にある礼装は《別にぼくが聞く必要も無い話だろう》とブギーポップが告げたので起動していない。
「戦闘を全てこちらで見させて貰い、データとして解析もしたのだがパラメータの推定値が異常だ。魔力は一切使われていない為『なし』。筋力、敏捷については考察を重ねた結果『ＥＸ』となった」
　ダヴィンチの説明に、ロマニが追加で説明した。

「『ＥＸ』に関してだけど、この値はより正確に言えば『Ｃ＋＋＋＋』といった所だ。パラメータの『＋』の数は、瞬間的な能力値の倍加を視覚的にかつ簡易的に表したもの。つまりブギーポップというサーヴァントは、瞬間的な動作あるいは攻撃力の値が異常なほど高いんだ」

立香はその説明を受けて、礼装を通じて直に見たブギーポップの戦闘を思い返した。

彼の戦術は鋼糸を武器としたヒットアンドアウェイの様なものだ。つまり敵の攻撃は徹底的に避け、ここぞという一瞬で大ダメージを与える。この戦術には優れた攻撃力と敏捷性が必要であり、ブギーポップは見事に攻撃と回避を行っていた。

ところがブギーポップの体は立香を基準としている。もちろん立香自身は日々の戦闘訓練等で体は鍛えてあるのだが、サーヴァントに比べれば微々たるものである。そしてブギーポップというサーヴァントは体を借りているだけ。切り替わった途端にサーヴァントとしての体になるのでは無く、人間としての体のままサーヴァントになるのである。

つまり戦闘力は、最も似た存在であるマシュよりも遥か下になる筈だ。少なくともダヴィンチはそう予想していた。

「ブギーポップは人格だけのサーヴァントだ。初めから体があるものの擬似サーヴァントとして人の体に憑依する訳じゃない。神霊が人の体を借りる例があるが、アレは人格

だけなんていう存在じゃないからこそサーヴァントとしての体を人の中に棲みながらにして獲得しているんだ。そして諸々のデータにより、ブギーポップがマスターから表出してもマスターの体はサーヴァントの力を得ないことは分かっていた」

　それなのに、とダヴィンチは続ける。

「それなのにブギーポップは並のサーヴァント以上の戦闘力を発揮した。これは不可解なことだ。戦闘訓練が終わった直後に本人から『自分は借りた体の身体能力を限界以上に引き出している』と説明されたが……そんな訳がないんだ！」

　ロマニが別の資料を取り出して立香に渡した。

「先程君に受けてもらった健康チェックだ。僕もブギーポップに『限界以上の力を引き出した』なんて言われたのもだから心配になってね。君の体調を診させてもらったけど、何の異常もない。筋繊維一本切れていない。敢えて言うなら霊基の質を示す値の変動が通常より多かったけど、それも誤差の範囲内になる。彼が限界突破したのに、だ」

「それはつまり……ブギーポップが僕の体を酷使した筈なのに、その形跡が無いって事ですか？」

「その通りさ」

　ダヴィンチは腕を組んで椅子に座り直した。

「私とロマニは正直慌てたさ。ブギーポップが君の体を人間の体として借りている事実

は、ブギーポップ自身も知っていた。事前に例の礼装を通じて確認を取ったし、無茶なことはしないと約束もした。にも関わらず、明らかに人間を超えた動作をするんだ。確かに君に何の異常も無かったさ。彼の言葉は嘘ではない。嘘ではないが――」

そこでダヴィンチは押し黙った。どうにも煮え切らないという顔で黙っている。

立香としてはブギーポップと話し合った時の印象に加えて今日の戦闘を見たことで、彼の事を信用できるサーヴァントだと思っている。しかしダヴィンチの様子を見るに、彼女にはまだ信じ切れない部分があるらしい。

「まあ、ダヴィンチちゃんが眉を顰めるのも無理ない。ブギーポップはそれだけ特殊なサーヴァントだ。これから絆を深めていく上でも、やはり特殊な部分が気になってしまうだろうね」

ロマニは苦笑いを浮かべながら空のコーヒーカップをソーサーに置いた。

「何にせよこれからさ。彼は立香君の最終防衛ラインとして働くと明言していた。つまりマスターである立香君に危険が及ばなければ出てこない。そして危険が及んだにしても、それはそれで心強い最後の砦になってくれるだろう。両手を広げて歓迎は出来ないけど、上手くやって行けることを祈ろう」

「それも…そうですね」

立香はロマニの穏やかな言葉に対し、自分としては彼を信じてあげたいと思いつつ頷

いた。

～・～・～・～

夕暮れ時のとある学園の屋上。

そこがブギーポップの表出していない間に待機する場所だった。

彼としては「誰かの人格として表出する前に待機する」という行為自体が実に新鮮だった。体を借りる際、本来ならば彼は自動的な存在として無機質に浮かび上がってくる。だからこその不気味の泡（ブギーポップ）。ただ悪を殺すだけの死神。任務と言うよりも、むしろ本能に近い部分で世界を何度も守ってきた。

「しかし、こういう関係性も悪くないな」

彼としては、自身の記憶に残る彼女にしょっちゅう迷惑を掛けていたことを気に病んでいた。彼女の私生活、もっと言えば彼女の人生は自分が表出することで大きく変化してしまった。彼女の家族との関係も、一時期壊れかけてしまったこともあった。

今回は奇跡のようなめぐりあわせとなったが、偶然にも堂々と能動的に世界を救う立場になれた。勿論自分のような特異なサーヴァントを召喚したマスターはさぞ迷惑がっているだろうが……。

「召喚されたからには、ぼくに充てられた役割を果たさなければ」

隣に座る男子高生、あるいは星見の魔術師を思い描きながら、彼は永遠に沈まない夕日に手を翳す。

彼の役割、それはこの世界を狂わせる本来の意味での「世界の敵」を排除することである。

亜種特異点：克螺旋境界式　オガワハイム

思惑／『パンドラ』

〝彼〟にとって、ソレは何度も嗅いだことのある匂いだった。
人がその体に流す液体、いわゆる血の匂い。もちろん脂じみたモノや老廃物のモノも一緒くたにされている、人の生々しい死を感じさせるような匂いだが。
そして匂いとは違って肌に感じるのは、底冷えのするような冷気――それも簡単に気温を下げて再現できるものでは無い精神的な冷気。しかしその冷気は、誰でも一回限定で気軽に体感できる。なぜならその冷気は、誰もが自らの人生の終わりに迎える死そのものであったからだ。
〝彼〟はこの一見整合性が取れていそうで実のところ矛盾している感覚についてしばらく思考していた。〝彼〟自身が致命傷を負って今にも天に召されそうな状況ならまだ分かる。しかし、自分は今のところ誰かに殺されかけている訳でもなければ他の理由（もう手遅れな自殺直前、重度の病を抱えている等）で死を迎えそうな訳でもない。
その条件で第三者の死と自らの死を同時に感じるというのは不自然極まりない事だ。
「……」

〝彼〟は道の先に聳え立つ奇妙な建物を見上げた。その建物は円柱状で背が高い、風変わりな見た目をしている。それでいてよくある地域のランドタワーとか大企業のビルや立体駐車場ではなく、実のところ単なるマンションだった。

――いや、単なるマンションと言うには些か奇妙な雰囲気を纏っている。通常の居住用建造物であれば内包しているような生活の気配が一切感じられないからだ。それでいて先程〝彼〟が感じ取った、内包された死と外在する死が混ざり合って建物の隅々まで濃縮されている。

そのマンションは、一言で例えれば精密に死を閉じ込めた氷の棺桶であった。

「……」

〝彼〟には分からない。自分が何者であるか。何故自分はここに居るのか分からない。しかし、その不気味なマンションを見た瞬間から、〝彼〟の当分の目標は決まっていた。

すなわち、静止した死を開放すること。

〝彼〟の寄りかかっていた塀の際に、ポール部分が錆びついたカーブミラーがある。よそ見して走る自転車一台がぶつかれば根元からポッキリ折れてしまいそうな程に古びていて、「止まれ」の小さな標識も固定する金具が外れて宙ぶらりんになっている。しかし最も肝心なミラーの部分は、多少汚れてはいるものの無事だった。

〝彼〟はそのカーブミラーに目を付けると、塀の上に素早くよじ登りミラーの首根っこを片手で捉え細かく揺らした。ポールが折れないよう慎重にミラーを自分に向けると、今度は服の裾で丁寧にミラー全体を拭っていった。そして、ミラーに映る〝彼〟自身の姿ではなくミラーそのものがテレビか何かであるように覗き込んだ。

鋭い目つきで〝彼〟がミラーと睨めっこすること数分。〝彼〟はぼそぼそと独り言を発し始めた。

「盾……淡い紫のショートカット……青い目の男……白い制服……腕時計？……」

そして一通り呟き終えると、塀から直接道路に飛び降り勢いそのままに走っていった。

夜の街並みに静寂が戻る。

後には首を傾げたのカーブミラーだけが、微風に揺られて僅かに動くばかりであった。

～・～・～・～

「現状を説明しよう」

突然呼び出された立香は眠気を抱えたまま途中で合流したマシュ、フォウと一緒にダ

ヴィンチの話を聞いていた。

「今回君たちには最終決戦である終局特異点に挑むために、準備期間を設けていたと思う。終局特異点の場所はこれまでに回収した聖杯から座標を割りだしてある。そして第七特異点を攻略した時点で、次の特異点発生まで一週間という観測結果を得ていた訳だが――」

ダヴィンチは手元の端末でカルデアの地球儀に赤い点を表示させた。

「どうやら最終決戦前にまったく別の特異点が発生したらしい。規模からすればこれまでの特異点に比べて小さめだが、放置した場合の危険が未知数だ。そして今回の特異点が発生した段階で本物の終局特異点とみられる反応を観測した。これも今から約一週間後。やはり時間がない」

「これはつまり、先に発生した特異点を急いで潰し引き続き決戦に備える必要があるという事ですか？」

立香は自分で質問しながらその内容に心底呆れた。答えは自ずと決まっているのだ。何を問う必要があるのだろう。

「君の言いたいことは分かっているし、こちらも無茶を承知で言う。一週間以内に出来るだけ早く先に発生した特異点を解決するんだ」

マシュはその言葉に驚いて反論した。

「恐れながら聞きますが、それは実現可能なプランなんですか？今までの特異点修正に費やしてきた時間の平均はおおよそ二週間です。少なく見積もっても、先輩の特異点修正に十日はかかります」

「私としては、出来るか出来ないか考える時間があればすぐにでも行動に移してほしい」

ダヴィンチは珍しくも真顔でマシュの主張に応えた。

「時間がない――本当に時間が足りないんだ。これからレイシフトするにあたって必要な準備、そしてこれまでのマスターがこなしてきた修復でのポテンシャルを考慮すると、活動に充てられる時間は想像以上に少なくなってきている」

それでも、とダヴィンチは続けた。

「何もかも足りない現状でも、やはり君の意思は尊重したい……。卑怯な質問かも知れないが、カルデアのマスターとして二つの特異点修正をオーダーしたい」

ダヴィンチは言い切った後、立香の目を真正面から見据えた。

「卑怯って言い方は、無いと思いますよ」

ダヴィンチの目を静かに見つめ返す立香の目に、一点の曇りもなかった。

「それでも僕はカルデアの職員として、マスターとして、そして魔術王に抗う最後の人類の一人として、責任を果たします」

傍らに立つマシュは、そっと立香の手を取った。立香の決意に満ちた表情とは裏腹に、テーブルに隠れた両足が細かく震えているのを見ていたからだ。マシュの心は純粋に先輩への思いやりに溢れていた。

《ぼくは今回の特異点修正で起用してもらえるのかい？》

不意を突くようにマシュの手が添えられた立香の右手首から声がした。慌ててマシュは手を放し、己の無意識に近い行動を思い出して赤面する。恥ずかしがるマシュには目をくれず、立香は右手を持ち上げて腕時計型礼装に話しかけた。

「ブギーポップって、そういえば作戦参加は初めてだっけ」

《その通りだ。散々君の体に慣れるために特訓したものだが、それを除けば初めての実戦と言えるだろう》

立香が召喚実験でブギーポップを引いたのは今から五日前の事だ。召喚したその日にはブギーポップの戦闘データを取り、取れた後は人格が切り替わる際のラグとも言える立香の気絶時間をゼロにする為、何度も戦闘訓練を行ってきた。

「ブギーポップの通常戦闘力はカルデア内部でもトップクラスだからね。その点君を信じているよ」

《――今はそれでいい。必ず君を守ると約束しよう》

ブギーポップは戦闘データを取る際に「宝具を開放してほしい」と頼まれたのだが、彼

自身自分が宝具を保有しているかどうか分からなかった。彼のマントはビックリするほどの収納力を持っているが、宝具と呼べる程の神秘は持っていない。そして彼には他に宝具と言われても思い当たる節は一切ない。どれの何が宝具かも分からないので、マシュが以前行っていた仮装展開すらままならないのだ。この理由をダヴィンチは「特殊な召喚による一時的なバグのようなもの」と推測していた。

（どのようなカタチであれ）宝具を所有していないサーヴァントは今のところいないので、イレギュラーの塊であるブギーポップでも恐らく所持していると思われる。

それでも彼のパラメータと卓越した鋼糸捌きにものを言わせた通常攻撃が強力なので、万が一の防波堤としては充分なのだが。

「今回発生した特異点を『亜種特異点·克螺旋境界式　オガワハイム』と呼称する！早期解決を目指して、魔術王の待つ終局特異点に備えられるようにすること！」

ダヴィンチの再びの宣言を受けて、慌ただしいブリーフィングは終了した。

しかし立香は、マシュは、ダヴィンチは、そしてブギーポップですら知らない。

この突如発生した特異点は、本来であれば放置していても問題なかった『変異特異点』であったことを。

その場所で何が始まろうとしているのか、誰にも分からない――

〜・〜・〜・〜

〝彼〟はつい今しがた見たものについて考えていた。現在のところ、異様な場所と化している件のマンション周辺を除き、この一帯には邪悪な気配どころかネズミ一匹の姿も見当たらない。何故そのような世界が成立しているかは別として、あの風変わりな服装の二人組がどこからやってくるのか疑問だった。

〝彼〟の見た光景は、背景の様子から推察するにあと半時も過ぎないうちに実現するはずだ。もっと長時間なら〝彼〟が感知できない程遠くからの来訪者という事も考えられたが、近隣の交通機関も動く様子がないとあれば、一体どこから来るというのか。

……いくら考えても埒が明かない。思考を切り替えた〝彼〟は己の奥底に染み付いた経験に従い、奇妙なマンションの入り口に身を這わせ、息をひそめて内部の様子を伺った。

（アアアアアア……）

（辞メロ、タノムカラ逃ゲテクレ……）

（殺ス！殺ス！殺シテヤル!!）

怨嗟。怨讐。後悔。絶叫。懇願。断末魔。

あらゆる負の感情を掻き集めて煮詰めたような声が、マンションの至る所から〝彼〟

の耳に届いてくる。その声たちは負を抱えながら機械的かつ無機質に停滞を繰り返している。こんな悪趣味な建造物が自然に建つ訳がなく、必ず何者かの手が加わっていることに間違いない。

しかし、このコレクションを集めることにどんな意味があると言うのだろうか。目的があったとして、それはこの塔を建てる際に必要とした犠牲に見合うだけの価値があったのだろうか。

これを聞いたものが真っ当な人であるならば、嫌悪感を抱かずにはいられない。これを目の当たりにすれば、自らの死がどうなるか想像せずにはいられない。これから一度逃げてしまえば、毎晩苦しみを味わい続ける彼らの夢を見ることになる。それ程のインパクトを持っていた。

〝彼〟も当然嫌悪感を抱いていたが、それと同時に何か引き寄せられるものも感じていた。〝彼〟の中にある強烈な後悔の念が、あろうことか不気味な塔に閉じ込められた死に反応していた。その誘引は甘い毒のように〝彼〟を捕らえて離さない。

その誘引に耐えながら、〝彼〟は入り口を押し開けて建物内部へと入り込んだ。〝彼〟の人格は塔の在り方に悲鳴を上げて止まなかったのだ。許してはならない。許してしまえばきっと自壊してしまうだろう。そういう確信めいた予感があった。

〝彼〟は前へ進む。嫌がる本能を、歓喜する黒い感情を抑えながら進む。

――その背後に、先程から〝彼〟が気付けずにいる一人の姿があった。

「……アイツ、見た事ない面だ。一般人でも無さそうだが」

愛用のナイフを片手で弄びながら独りごちるのは、全ての死を視る魔眼を持つ少女、両儀式(りょうぎしき)である。彼女は〝彼〟が小川マンションに近づくのを見かけてから、気配をひた隠しながら〝彼〟の背後を付けていた。

式は知っている。今の小川マンションに一人で乗り込むのは危険だと。そして今しがた入っていった〝彼〟を呼び止めなかった自分がどれ程卑怯者であるかを。

「どうして彼を止めなかったのですか?」

その声に面倒くさそうな顔を作りながら式は背後を振り返った。そこにはシスターの格好をした、式と同じくらいの年齢の少女が立っている。

「どうもこうもないさ。もしあのマンションに復活したヤツが居るとすれば、オレが入った時点で拙いことになっていたさ」

「でも彼、私たちが殺す羽目になるかも知れません」

彼女は自らの持つ「歪曲の魔眼」を細めながら困ったように微笑んだ。彼女の名前は浅上藤乃(あさがみふじの)。かつて両儀式と殺しあったことのある少女であり、現在は共通の敵がいる可能性から共同戦線を張っている。

「私としては目の前のアレを、こう、キュッっと捻ってしまいたいのですが」

「それは遠慮して欲しいが……ん？」
　ふと式は何かを思いついたような顔で藤乃に話しかけた。
「じゃあ試しに、ここからエントランスの扉だけ捻ってみてくれ」
　言われた藤乃は「え？いいんですか？」と言いながらも、少々独特なポーズを取りつつその特殊な両目を見開いた。そのままじっと扉を見つめているが、扉の方は何分経っても変化が見られない。
「おかしいですね……回転軸は左右共にクッキリ視えているのに、いくら念じても回転しません。まるで『静止』しちゃってますね」
「ふーん、やっぱりか。これは――ちょっとばかり面倒なことになったな」
　両儀式の中で、ある一つの推測が形になった瞬間だった。

戦闘／サーヴァント

カルデアのレイシフト用装置の前で、立香とマシュはレイシフト先に持っていく用具の準備をしながら話し合っていた。

「今回連れて行けるサーヴァントは、ブギーポップとマシュを除いて頑張っても6体が限界だ」

ダヴィンチからの連絡により、立香はマシュと一緒に連れて行くサーヴァントについて相談していたのだ。

連れて行く際の選考基準として考えられることは、まず多様な状況に対応できるスキルあるいは宝具を所持していること。次に同じクラスで被らないようにすること。そして連れて行くサーヴァント同士が揉め事を起こさないように配慮することが挙げられる。

「まず、魔力消費から考えるとアルトリアのような規模の大きい宝具持ちのサーヴァントはキツい。でも対応の幅は広げたいから、出来れば対人宝具だけの構成とかは避けたい」

魔術礼装や概念礼装の準備をしながら、立香は追加で考慮するべき点を挙げていく。

「役割としては、『偵察』『戦闘』『支援』が主なものになるかな。カルデアの支援枠は限られているし、僕としては玉藻さんを連れて行くべきだと思う」
「確かに、玉藻さんの宝具は支援として丁度いいと思います。魔力消費も抑えられますし、回復もこなしてくれます」
　マシュはその案に同意し、まず玉藻が行くことに決定した。
「私からも一人、いいですか？先輩」
「ああ」
「私としては偵察役として百貌さんを連れて行くべきだと思います。偵察役以外にも戦闘・支援共に精通しているサーヴァントですから、今回の特異点に向いていると思われます」
「百貌さんか……うん、いいんじゃないかな？僕はロビンを提案しようかと思っていたんだけど、今回の特異点は領域が狭いらしいし罠を活かす機会は多分無いね」
　百貌のハサン。宝具として妄想幻像を所持する多重人格のサーヴァント。人格はそれぞれ独立していると言っていい程だが、サーヴァントとしての霊基は同一である。
　特徴としては、人格を切り替えあらゆる物事に対応できるスキル『専科百般』を有していること。また宝具で抱えている多重人格を一斉に具現化、分裂が可能なことである。

「これで玉藻さんと百貌さんは決まり。戦闘役はいつもお世話になってるクーフーリンの兄貴二人はどうかな」
「どうでしょう……クーフーリンのお二人は最近どちらがより強いか競い合っているようなので、今回は別のサーヴァントを連れて行く方がいいと思います。それにお二人共ランサーで被りますから」
　二人は未だにどちらが強いか決めようとしているようで、噂では近日開催のキュケオーン大食い競争で決着を付けようとしているらしい。
「じゃあ兄貴達は今回不参加ということで。他の人で無難に考えるなら、電力と魔力を交互に変換できるフランと色々な宝具で取り回しのいいアストルフォに声をかけるか」
　フランケンシュタイン。バーサーカーのクラスで召喚された彼女は宝具で魔力と電力を相互変換できる。魔力が足りなくても自力で活動できるので、万が一立香が魔力切れになった場合の保険になる。戦闘力も敵の殲滅に向いた別の宝具が役に立つ。
　そしてアストルフォは、複数の宝具を使いこなすことで追撃、逃走、妨害、一対一から大人数相手まで対応できる。理性がいろいろアレなのが欠点ではあるが、それを除けば戦闘において見落としやすい立ち回りをこなしてくれる優秀なサーヴァントだ。
「あとはいつも偵察役を任せている静謐と、あくまで支援役としてのキャスギルを連れていこう」

静謐のハサン。滲み出る毒の体で数々の敵を葬ってきたサーヴァント。気配遮断に変装と基本的なアサシンとしてのスキルを持っている為、普段から偵察役として重宝されてきた。

そしてキャスタークラスのギルガメッシュは、戦闘力も高い部類に入るが支援能力も優れている。王としての自覚を有し民のために力を尽くした側面がある為か、尊大な態度こそ崩さないが戦闘におけるフォローは恐ろしく優秀なサーヴァントである。

「では私からダヴィンチさんにメンバーを連絡しておきます」

マシュが部屋から出ると、ブギーポップが感情の読めない声で立香を問い質す。

《ぼくの存在は未だに殆どのサーヴァントに対して伏せてあるはずだ。伝えなくていいのか？》

その声に立香は俯き、右手甲の令呪を左手の親指でなぞった。

「僕はよくマシュやダヴィンチに『サーヴァントとのコミュニケーションが抜群に上手い』って言われるんだよ。別に僕は大した事をしている訳じゃない。一人しかいないマスターとして、人類を救うために戦っているだけ。そしてそんな僕でも出来ることをしているだけだから」

立香にとって自分が契約したサーヴァントと絆を深める行動は、純粋に仲良くなりたいと思ったからだけではない。その気持ちこそ嘘ではないが、マスターとしての能力に

欠ける自分は何が出来るのか考え抜いた答えの一つでもある。
　現に彼は日々体を鍛え、種火に始まる各種素材や、余剰魔力の集積物に聖晶石の回収を欠かせた事は無い。彼にとって世界を救う旅を過ごすためには、マスターとして平均以下である自分を如何にして埋めるかが問題だったのだ。
「だからぼくには判る。一緒にいる時間が長い程、相手に対する理解度が絆と共に深まっていくから」
　その言葉に対して、ブギーポップは心象世界の夕陽に向かって片眉を釣り上げ奇妙な表情を作った。
「君は多分、僕やダヴィンチには見えない何かに気付いている。そしてそいつに抗おうとしているんだ。その抗う相手というのが誰か判らないけど……でも、君は明らかに正義の味方に近い場所にいる。もし君が敵を、〈世界の敵〉を殺すというのなら、僕は君が体を借りるのに身を任せてもいいと思っている」
《……》
　不意に立香の姿がブギーポップのそれに変わり、マントから出した右手から鋼糸がするりと伸びてブギーポップ自身の首に絡みつく。
「君には覚悟がある。きっとこの鋼糸でぼくが君自身を殺そうとしても、多分礼装の仕掛けで失敗するだろう。でも今さっきの言葉には、例えこの鋼糸が本当に首を切断出来

るとしても、ぼくがそれをしないという……そんな確信があった」
　その声に立香は、ブギーポップが今しがたまで見ていた夕陽に目を細めながら答えた。
《本当はそんな覚悟なんてないよ。僕には世界を救うという使命に対する覚悟しかない。だから君を信じる。それだけだよ》
　その声にブギーポップは目を閉じ、呆れたように首を左右に振った。
「それならいいさ。どうやらマスターはぼくの思っていた以上にとんでもない奴らしい……」
　そして再びブギーポップは心象世界に帰っていった。

～・～・～・～

「それでは健闘を祈るよ、マスター。無事に帰ってきたら何か美味しいものでも準備しておこう」
「無理は禁物だよ、立香君。こっちのことは僕とダヴィンチちゃんに任せておいてくれ」
　二人の言葉に送り出されて、立香はレイシフトした。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

寒々しい街並みの中、何も無い道のど真ん中に突然二人の影が現れた。
「レイシフト、完了ですね。先輩」
「毎回レイシフトってちょっと酔いそうになるんだよね……ところで他のみんなはどうしたのかな」
周囲を見回すも、念入りに選抜した六人のサーヴァントの姿が見当たらない。
「どうやらはぐれてしまったみたいですね。でもダヴィンチちゃんから『はぐれるかもしれない』とは聞かされていませんでした」
「確かに。レイシフト先で予測がつくようなトラブルがあったら事前に警告してくれそうなものだけど……」
「フォウフォウ」
マシュの盾から顔を出したフォウが、同じく辺りを見回す。
「あ、フォウさん。勝手に出てはダメですよ。まだ周辺にどのような危険があるか分かりませんから」
「こっちも早く行動しないと、ただでさえ時間が無いんだ……あ、連絡が繋がったかな」
立香が弄っていた礼装からダヴィンチの顔が浮かび上がった。

『やあ、無事にレイシフト出来たみたいだね。早速だけど周辺の様子はどうだい？』
「ダヴィンチちゃん、それが連れてきたみんなとはぐれてしまって……近くに居るのはマシュとフォウだけだよ」
『何だって!?ロマニ君、周辺にサーヴァントの反応は？』
『敵味方含めて無しの礫だよ。これは参ったな』
　二人の言葉にブギーポップが反応した。
《どうやら敵の妨害がこの空間に来た時から始まったらしい。ということは恐らく、ここに敵が仕込んだ何かが来るぞ。戦力をバラバラにしたのは各個撃破を狙ったに違いないからな》
「マシュ、いつでも戦えるように準備しておくんだ。ロマニ、何か目印になるような反応はない？」
『ここから北の方に小さくない魔力反応がある。恐らくそこに何かがある筈だ』
　ロマニの指示に立香は北の方角を眺めた。丁度今立っている道の延長線上に、円筒状の建物がそびえ立っている。
「では、僕達はいまからそこに向かいます。サーヴァント反応があったら敵味方関係なく教えて下さい」
　そう言うと、立香はマシュを伴って建物に向かって走った。静まり返った街並みには

他の誰かがいる気配が全くなく、この場所が今までの特異点と違った異質な場所である事を暗に示していた。
「先輩、後ろから何かが追ってきています！」
マシュの言葉に立香が振り返ると、後方に人型の影が見えた。
《ふむ、どうやら以前のシュミレーションで戦ったオートマタに似たものらしい。このままでは追い付かれるぞ》
ブギーポップが二人に忠告した途端、背後の人型が宙を飛んだ。両腕をプロペラの様に回転させているらしい。
『全部で三体か。仕方ない、このまま迎え撃とう。マシュだけでも充分戦えるはずだ』
「先輩、下がってください！」
叫んだマシュの正面に、三体のオートマタが着地した。

～・～・～・～

「マスターとはぐれてしまいましたね、百貌さん」
マシュと立香がレイシフトした場所から、小川マンションを挟んで反対側に百貌のハサンと静謐のハサンは居た。

「どうやら敵の手によって我らをバラバラの場所に分断したようだな。まあ心配は要らん。我らの内の何人かを偵察に行かせよう。上手く行けば直ぐに合流出来よう」
　百貌のハサンはすぐさま何体かに分裂し、司令塔替わりの一人を残してバラバラに電柱や屋根を伝って周囲に散っていった。
「もし敵の策略で私たちが分断されたとすれば、私たちで纏められた意味が何かあるのでは無いでしょうか」
　静謐のハサンがおずおずと周囲を見回しながら告げる。
「確かに。我らを狙って何かを差し向けるつもりであるなら、一層誰かと合流する必要があるだろう」
　百貌は懐から短刀を取り出した。静謐もそれに倣って短刀を取り出し構えた。
「……我らの内の一人が敵と遭遇した。こちらに誘導しているそうだ。来るぞ」
　前方から百貌の内の一人が塀を伝って走ってくる。その背後には白い毛並みに包まれた怪しげな生物が迫っている。
「ホムンクルスみたいですね。生物なら私の毒も効きそうです」
「なら先手は任せたぞ。このまま敵の数を減らしつつ合流を目指すとしよう」
　静謐は短刀を続いて何本か出し、全ての刃に舌を這わせてから向かってくるホムンクルス達に投擲した。

～・～・～・～

「我をマスターから引き離すとは……どうやら敵は余程我に殺されたいようだな……思い上がるなよ雑種!!」
「……こういうのも『ツンデレ』と言うんでしょうかねぇ?」
「む?何か言ったか女狐」
「女狐とは失礼なっ!?」
　小川マンションから東側、そこには分断された内の二人であるギルガメッシュと玉藻の前が周囲を警戒していた。
「分断した結果として我の怒りを買うとは考え無しにも程があろう。一先ずマスターと合流した後、我が全力で叩き潰してくれよう」
　ギルガメッシュの背後に光の波紋が浮かび上がり、その内の一つを眺めて「マスターはあちらに居るな」と南西の方角を指さした。
「早く合流したいのは山々ですが、敵さんがすぐ近くまでいらしていますわよ?」
　玉藻はギルの示した方向とは反対側を指さした。その方向には何体かのワイバーンが飛んでいた。

「神秘もほとんど残っておらぬようなこの時代にワイバーンとは、間違いなく紛い物であろうな」
「ほーんと、そうですわ。風情の欠片もありませんこと」
ギルは追加の杖を波紋から出し、玉藻は懐から呪符を十枚ほど取り出して右手に挟んだ。
ワイバーンの軍団はすぐ目の前まで迫っている。
「えーい!!」
玉藻が呪符を通して巨大な氷塊を造りワイバーンの翼を狙って飛ばす。何体かには避けられたものの、そのうち三体を地面に堕とした。
「よくやったな女狐。そのまま雑竜共を堕としておれ。トドメは我が刺してくれよう」
「女狐呼ばわりは辞めてくださいましっ」
その三体目掛け、幾筋もの光線がギルの背後から伸びて突き刺さった。

～・～・～・～

「あれー? マスターどこ行っちゃったんだろう?」
「ウー…」

小川マンション西側。バラバラに分断されたカルデアサーヴァントの内の二人であるアストルフォとフランケンシュタインが現代の街並みを彷徨っていた。
「うーん、ボクのカンだとアッチの方なんだけどー、でも合ってるかどうか判らないし……」
「ウー」
マスターが居る方向とは真反対の方角を目指そうとするアストルフォを右手でチョンチョンとつついたフランは、遠くに見える嫌な気配が漂う塔を指し示した。
「え？アッチに行きたいの？それならボクもついて行くけど」
「……ウー、アー。ウーウー」
身振り手振りを加えつつ必死に「あの場所は見るからに怪しい気配がするし、マスターなら間違いなく向かうと思う」という旨を伝えようとするフランだが、相手が相手という事もあり全く通じない。
「えー、でもマスターがいるのは絶対アッチだと思うんだけどなー。いいのかなソッチに行っても」
それでも迷うアストルフォだったが、上空に気配を感じて空を見上げる。よく見れば丁度例のマンションがある方向からゴーストが何体も宙を滑るように飛びながら近づいてきていた。

「ほほう。ナルホド！ボク分かっちゃったよ。マスターはトラブル体質だからトラブルの飛んでくる方向に居る。そういう事だね？」
「……ウー」
「言いたかった事と違うんだけど結論は同じだから別にいいか」という意味合いを込めてフランは溜め息を吐き、両手に持っていた『乙女の貞節（ブライダルチェスト）』を構え直した。
「それならいいや！張り切ってやっつけちゃおう！」
　そして理性こそ蒸発しているものの戦闘力に関しては本物のアストルフォも両手に『触れれば転倒（トラップ・オブ・アルガリア）！』を取り出した。

～・～・～・～

「式さん、気づきましたか？先程から戦闘の音が聞こえてきます」
「ああ。しかも何やら知らないが敵が増えたな。四方八方に散っている」
　式と藤乃が眺めていた小川マンションの屋上辺りから、何体もの影が四つの方角に向かって次々に飛び出していくのが見えた。宙を飛ぶものもあれば地を駆けるものもあり、全てが式と藤乃を無視している。
「無視されるのも癪だし、オレは取り敢えず倒した方がいいと思うんだけどな。お前は

どうする？」

「私も同じ意見です。アレらは倒しても損は無いと思いますよ」

二人の意見が合ったことで、両者の魔眼が同時に発動した。

まず式の『直死の魔眼』により実体のないゴーストや骨格の柔軟性が高いホムンクルスの「死の線」がナイフで切られては死んでいく。

そして高空を飛ぶワイバーンや行動パターンが読めないオートマタは藤乃の『歪曲の魔眼』により鱗や機構の硬度を無視して次々と捻じ曲げられて死んでいく。

二人が生み出す死は大量に溢れるマンションの魔物を確実に出現直後から減らしていた。

四方向に散らばる魔物が次々に死ぬことにより、この亜種特異点全体に死が満ちていく。確かに己の道を遮るものは倒すしかなく、そして倒された敵はその死を積み上げて消滅していく。

その積み上げられた死は、着実に特異点の奥で潜む者に力を蓄えさせていた。

合流／サーヴァント

小川マンションは特別な建物だ。そもそもの成り立ちから現代において最高峰の魔術師である証『封印指定』を受けたとある人形師が関わったこともあり、内部に住んだ人間は複雑怪奇なマンションの構造に〝死〟を意識するようになる。そして誘導された〝死〟を迎えた人々はその在り方を人形として記録され、そのままマンション内部で記録された〝死〟を演じ続ける。

その〝死〟はカタチだけではない。魔術として洗練された手法を踏んだ保存された〝死〟である。記録された〝死〟が何度も何度も積み上がり続ける小川マンション内部は現実とは異なる世界となっており、一つの目的に向かって最小限に絞られた六十四通りの〝死〟を巡らせ続けていた。

その小川マンションが新たな〝死〟を求める理由。それは単なる人の〝死〟だけでは足りなくなったからだ。

この建物の主であった結界の魔術師の思惑を越えて、自我を確立したソレは〝――――〟に成ろうとしていた。

～・～・～・～

小川マンション正面入り口。引き続き出現するワイバーンをまとめて三体ほど捻じ曲げていた藤乃は、もう一つの能力である透視で遠くからこちらに向かってくる人影に気が付いた。

「式さん、こちらに人が近づいてきています。人数は二人。風体は……奇妙ですね。真っ白な制服の男と大きな盾を構えた少女です。何か小動物を連れています」

「そいつらは敵と戦っているのか？」

「ええ。今もオートマタを相手にしていますが、苦戦しているようです。助けてきましょうか？」

その言葉に一瞬だけ逡巡した式は、しかし続けて言った。

「敵の敵は味方って奴だ。顔を合わせるついでに倒しておくのもいいだろ」

その言葉に藤乃は視線を伸ばし、今まさに白い制服の背後を取ったオートマタを魔眼で捻じ曲げつつ走って二人に迫っていった。

「……やれやれ、行動が早いのはいいケドさ。これってお転婆娘って言うんだっけ？」

小さい声で小言を言う式だったが、その直後に培ってきた戦闘経験で何者かの接近に気付いた。

「!!」
　振り向きざまに飛来してきた短刀を躱す。背後の塀に刀身を半分程めり込ませた短刀からは透明な液が滴っている。
「ほう、静謐の短刀を躱すとは余程戦い慣れしてると見える」
　電柱の物陰から、背後に何体かの影を連れたポニーテールを揺らした仮面の女性が現れる。
「私はしっかり狙いました。この人、多分普通の人間ではありませんね」
　反対側の屋根からは小柄な少女が一人、やはり仮面を被った状態で大気から溶け出すように現れた。
「へえ。アンタら出来るじゃないか。オレの相手をしようってんなら、コッチも遠慮しないぜ」
　ナイフを構え直し、式は前傾姿勢を取った。この特異点に呼び出されて暫くしたが、まだ式は本当の人間体を殺してはいない。もとから殺人嗜好のある式という人格には、誰かを殺すという行為で腹の中を満たす必要があった。例え自らと同じサーヴァントでもいい。むしろ敵のサーヴァントであれば好都合。容赦なく殺してやれる。
「コイツは特殊な技か何かを持っているな。偵察した様子では直接相手を切らずに殺していた。注意しなければ我らも危ういぞ」

ポニーテール仮面――百貌のハサンは更に何体かへ分裂してそれぞれが武器を構えた。そして小柄な仮面――静謐のハサンは逆に短刀を仕舞い、何時でも相手を直に触れるよう徒手空拳の構えを取る。

そして戦闘が始まろうとした瞬間、今度は空遠くから光の筋が三人目掛けて差し込んできた。

「な!?これはギルガメッシュか!!」

「乱暴な!!」

「お前達の仲間の仕業か!?」

何とか事前に察知してギリギリで攻撃を避ける三人。その上空では空中に仁王立ちする斧を持ったターバンの男が高笑いしていた。言わずと知れたキャスターのギルガメッシュである。

「フハハハハハハ!!恐れ入ったか雑種共!!我の財宝をその一端だけでも己の身に浴びた事を誇りに思うがいい!!感謝してあの世へ散れ!!」

「ちょっ、まだワイバーンが残っているのですが!?すみませんが百貌さんに静謐さんはそこの金ピカ王をどうにか抑えて下さいませんこと!?こちらはこちらで手一杯ですので!!」

変わらずフハハハハハハと高笑いを続けるギルの背後で、炎の柱と鎌鼬のような烈風

が地面から伸びては次々にワイバーンを叩き落としている。
「さて、貴様らの処遇はマスターの来る前に我が決めておこう!!」
　そして上空から徐々に降りてくるギルを呆然と眺めていた三人は、ヒソヒソと会話を始めた。
「オレにはあんな知り合いは居ないんだけど、アンタらの知り合いか?」
「恥ずかしながら……我らと志を同じくする者だ。今は少々興が乗りすぎて暴走しているが」
「ああなった王様は私達だけでは止められません。申し訳ありませんが、ここは共闘しませんか?」
　静謐の提案に妙な気分になりながらも、見るからに強者の気配がする魔術師のサーヴァントに対する警戒心は本物だったので式は「ああ、分かった」と二つ返事で了解した。
「ほう、我と戦おうとは思い上がったな雑種!!——もうどれでも良いか。貴様らを我が財宝で消し炭にしてくれよう!!」
　ギルの背後で揺蕩う波紋の数が倍増し、およそ二十の杖がその先端を覗かせて光を放ち始めた。
（おいおい、流石にアレはヤバいぞ）

改めて眼前の脅威に瞠目した式は、自らの頬に冷や汗が一筋垂れるのを感じた。
「はいはいそこ待ったーー!!味方同士で喧嘩しちゃダメだよーー!!」
するとまた別の方角から能天気な声が響いてきた。
「今度は何だ?」
いちいち確認するのが面倒くさくなってきた式は手近にいた静謐に誰何する。
「……考え得る中でも最悪の援軍が来てしまいました」
静謐は頭を抱えて苦悶している。隣では百貌も同じく頭を押さえている。
「やっほーー!!マスターはそこに居る?居ないの?」
「ウー!アー!ウ!!」
ギルガメッシュが立つ空の更に向こう側から、この世のものとは思えないような半鷹半馬の獣に乗ったピンク髪の少女と大きな棍を抱えた花嫁衣裳の少女が飛んできていた。
「マスターったらダメだねー。肝心な時にトラブルが起きている場に居ないでどうするのさ」
「ウ、ウー!」
ピンク髪の理性蒸発英霊アストルフォの後ろで必死になって何かを伝えようとしているフラン。その必死なジェスチャーを見た人間であれば「降ろしてほしそう」とか「こ

の場に首を突っ込むのを止めてほしそう」とか言いたそうだと気づくが、誠に残念ながらその意思は一切伝わっていない。
「そこの金ピカ王は喧嘩しちゃダメ！マスターが居ないのに何勝手に暴れているのさ！」
　叫びながら徐々に迫るアストルフォに対して、ギルは新たな波紋を生み出して向ける。
「マスターが居ないのであれば我が先ず行動すべきであろう！貴様らだけで人理修復は叶わん！もたもた別のサーヴァント相手に戦う余裕があれば偵察して参れ、そこの雑種共もそうだ！」
　不意に水を向けられた百貌はついカッとなりギルに対し口火を切った。
「な、何を言うか!!我らは我らで何よりも優先してマスターと合流すべきだと判断したのだ!!それをさも臆病者のように非難するとは、貴様はそれでも王か!?」
　その場に集結したサーヴァント同士の苛立ち、呆れ、動揺をのみ込み一つの争いが人理修復とは全く関係のないところで発生しようとした直後、場違いな青年の声が藤乃の向かった道の先から聞こえてきた。
「おーい！みんな何をしているんだよ。また口喧嘩？ひとまず殺気を押さえて武器を仕舞ってよ」

その声を聞いた各サーヴァントの反応に式は何度目かの驚きの声を漏らした。
百貌のハサンが分身を解いて一人の身に再集結し
静謐のハサンは構えを緩めて短刀の毒を拭い取り
アストルフォは「あ、マスターだ！」と喜びつつヒポグリフを着地させ
フランケンシュタインは「ウー」と安堵しながら地面に両足を着き
玉藻の前は手にしていた呪符を全て懐に仕舞い
最後にギルガメッシュが不満そうに波紋を全て納めた
「……すげえな。この癖の強そうな奴ら全員従えているのか。アンタ何者だ？」
息を切らせて隣に座り込む青年と念には念を入れてバイタルチェックを行う盾の少女に代わり、二人を連れて来た藤乃が式の疑問に答えた。
「人理保障機関カルデア。そこに所属して人類史を守る唯一のマスター、藤丸立香というそうですよ」

～・～・～・～

「マシュ、後方にバックして一度体制を立て直して！腕を受け流したら一度タイミングを合わせなおす！」

「了解です！」

立香曰く、マスターがサーヴァントに攻撃させる際の指示は主に三つに分けられると言う。

即ち『火力重視（バスター）』『技巧重視（アーツ）』『速度重視（クイック）』。

それらの指示を使い分けることにより、同時に三体ものサーヴァントをそれぞれの攻撃が邪魔にならないタイミングで発動させることが出来る。またこれら三通りの指示を上手に組み立てることで敵の弱点を的確に突いたり、本来は測りにくい宝具発動やスキル発動のタイミングを読んだりする。そして組み合わせた戦術に再使用時間こそ長いが頼りになる魔術礼装のスキルや効果の限定的な概念礼装で埋めることにより、より隙の無い戦術を完成させた。

その戦術を見た幼い征服王は一言、「完成された凡人が不合理に抗うための戦術」と評した。

複雑な指示を簡略化し、日常生活における絆を深めてコミュニケーションの短縮を図り、多種多様な礼装で理想の結果に足りない道筋を補う。どんな凡人でも人類を救うための手段。それ故に彼は凡才を極めた天才足り得る。

「次はスキルで防御！何とか耐えてくれ……」

しかし、その立香をしてこの状況は不利の極みだった。何しろ己の手足たるサーヴァ

ントがマシュ一人だけなのだ。それも敵は三体だけではなく、際限なく増えている。体力も魔力も有限であり、それ故に限界が近づいていた。

（クソッ、こんな時の為に玉藻の前やフランケンシュタインに声を掛けたのに……）

魔力切れが刻々と近づいている。数々の旅を経ることにより、立香の魔力回復速度は順調に鍛えられていた。だが魔力保持や魔力放出等にかけては依然人の域を出ない。三体同時の使役は出来ても一体だけの戦闘に魔力をかき集められない。

どこかでブレイクできれば、あるいは……。必死に打開策を探し始めた立香の耳に、声が届いた。

《まったく、自分だけで解決しようというのは自惚れすぎているんじゃないのか？》

右手の礼装から語り掛けてくるブギーポップ。呆れたような口調でこちらに話しかけて来る。

《ぼくが何とかしよう。まあ問題無いさ、マシュ君はぼくの事を知っているのだろう。手早く済ませてしまえばいいさ》

「いいや、それは出来ない」

ブギーポップの助太刀を即座に断る立香。目の前では盾で攻撃をいなしたマシュがオートマタを数体まとめて押し返そうとしている。

《何故だ。早くしないと君は魔力切れになって取り返しのつかないことになる》

ブギーポップの説得に、しかし立香は耳を貸さなかった。
「いいか、僕はお前に『最終防衛ライン』として働いてくれって言ったんだ。それでお前を連れてでた初めての人理修復、初めての実践でお前に助けを乞うなんてさ」
立香はマシュに「攻撃強化」の礼装スキルを使用した。
「そんなの、マスターとして情けないにも程があるだろうが!!」
「ウアアアアアッ!!!」
押され気味だったマシュの四肢に力が宿り、盾にへばりついていたオートマタは押し返されて数体まとめて塀と盾に挟まれてひしゃげた。
「先輩！なんとかブレイクできまし……後ろです先輩！」
一息つきながら振り返ったマシュは咄嗟に叫びながら盾を構えて走った。
（なっ……）
立香が振り返るとそこには、眼前まで別のオートマタの腕が迫っていた。戦闘中にマスターを狙って背後から忍び寄っていたのだろうか。
（ブギーポップも、間に合わないか）
喉元に迫った指先が今にも立香の喉を裂こうとした寸前。
不意に目の前の光景がブレた。
ガキュン。ギリッ。ギシャン。

眼前まで迫っていたオートマタの右手は、見えない何かに捻じ曲げられるように変形していた。続けて顔がひしゃげ、脚が壊れ、立香の命を今にも奪わんとしていたオートマタは一瞬でスクラップと化していた。

「先輩！大丈夫ですか？」

声を掛けてくるマシュの盾に寄りかかりながら、恐らくはこの不可解な現象を引き起こした本人と思われるサーヴァントの接近を待った。

「えーと、そこの人。怪我はありませんか？」

シスターの服を上下に着た、一見すると淑やかな女性である。しかしその目は異質な何かが宿っている事が一目で分かる。並の魔術師ですら背筋が凍るような悪寒を感じられる魔眼だ。

「た、助けてくれてありがとう」

まず立香が頭を下げ、続いてマシュも頭を下げた。

「怪我が無いようでしたら良かったですね。私は浅上藤乃。初めての召喚ですからよく分かりませんが、恐らくはマスターのいないサーヴァントというものです」

「僕は人理保障機関カルデア所属のマスター、藤丸立香です」

「サーヴァントシールダー、マシュ・キリエライトです」

そして自己紹介をしてから、改めて現状について話し合った。

「助けて頂いたのですが、貴女のことは味方と見ていいですか？」
「ええ、まあ。私にもよく現状が分かっていないのですが、アレを何とかしようとしているんですよね？」
　藤乃は遠方のマンションを指さした。
「その通りです。僕らはこの『特異点』を修正して正常な人類史に戻すために来ました」
『……よしっ!!やっと通信が安定したぞう!!』
　三人の会話に割り込むような形で通信が入り、一瞬でシリアスに会話していた雰囲気が霧散してしまった。
『あ、ごめん。邪魔したかな？現地のサーヴァントと接触出来たのかい？』
「はい、ロマニ教授。今まさに私達のことについて説明していた所です」
『それなら私が引き受けようじゃないか』
　通信に今度はダヴィンチが割り込み、その一声でダヴィンチが説明を行うことになった。
　ダヴィンチの詳細な説明に相槌を返しつつ、藤乃はチラリと捻じ曲がったオートマタを見やる。藤乃は自らの魔眼で捻じ曲げる寸前、煌めく糸のようなモノがオートマタを寸断している場面を目撃していた。
（アレは一体、何だったのでしょうか）

首を捻る藤乃の視界から外れた所、立香の右腕にはいつからか短いベルトが何本も巻き付き鈍く光る鋼糸が指先から伸びていたが、それも一瞬の事。藤乃の視界に入る寸前、腕は立香本人のものに戻っていた。

《……世話の焼けるマスターだ》

「ん？何か言った？」

《いや、何でも》

予知／『パンドラ』

〝死〟の定義とは、果たして何なのだろうか。

例えば、とある日本の一般家庭で殺人事件が起こり一人娘が死亡したとする。

脈拍は止まり、脳波は観測出来ず、失った血は致死量。医師は死亡認定を下し、遺体は火葬された。

家族も親類も恋人も犯人も親友も知り合いも警察も報道陣もニュースを見た人々も、皆「死んだ」と認識した。

果たして、この娘は死んだのだろうか。

あるいは娘が誰かを身代わりにしたのかも知れない。隠し子として双子の姉妹が存在していて、殺されたのはその子供かも知れない。

あるいは娘の死は世界の滅亡を意味していたのかも知れない。娘を守ることで世界を守るべく、権力者が情報操作したのかも知れない。

あるいは、あるいは、あるいは。

「死んだ」という条件はイフを加え続けることで、幾らでも薄く引き伸ばすことが出来る。無論、詭弁ではある。実際に上記の条件に該当する殺人事件が起きたところで、本

人が死んでいない可能性は限りなく零に近い。

しかし、零ではない。死んでいない可能性は零に出来はしない。そして死んでいない可能性の中に、生きてもいない可能性もまた存在してもいいのではないか。

すなわち、亡霊、精霊の類いである。

「私は生を否定しない。私は死を否定しない。私は人間を、人類を、それらが持つ可能性を否定しない。だからこそ私は死の瞬間を捉えて『静止』させる。生と死の概念を棄てた生命を手の内で生み出したいからこそ。それこそが、『根源』に至る道である故に」

〝――〟は語る。自らの在り方を肯定し、『根源』を求め続けた魔術師の意思を変質させ且つ受け継ぎ、生と死の境を彷徨う微かな痕跡を像と成すために。

『静止』させた死の瞬間、それは何者にも変え難い私が求める真なる人類の素となるモノだ。私の求める可能性は、人類全てを救済する人類のユメだ。私を否定する者は、すなわち人類のユメを否定する者――」

その言葉を、〝――〟の正面に立つ〝彼〟は片手を振って否定した。

〝彼〟は両の腕から命を奪うための液を垂らし続けながら、ただ冷徹に己の抹殺対象を見つめている。

曰く、〝彼〟の観た未来は何者にも変えられず、〝彼〟が観測し得ない以上は〝――〟のユメも潰えるだろうと。

曰く、〝――〟の掲げるユメは人類の幸福を求めるものでは無いと。そのユメは天国でもなければ地獄でもない、ただ今以上に面白くない世界を生み出すだけだと。
曰く、〝彼〟にこの世界の命運は関係ないと。自らの贖罪を済ませるために現れた自分は、ただ〝――〟を殺害するだけだと。
「そうか」
〝――〟はそう呟いて、そっと扉を閉めた。
「ならば仕方がない。私は人類のユメを叶えるために生まれた存在。貴様が人類を守らず私を殺そうとするのであれば、それは人類のユメを否定するという事。出自が何処であろうと関係ない。人類を否定する貴様をも、私は生と死を放棄するためのサンプルとして『静止』させてやろうではないか」
生も死も存在しない命を創造する者。
己の罪を為に
そうして始まった戦いの火蓋は、誰にも聞き取れないほどに小さなものだった。

～・～・～・～

鶴の一声、という言葉がある。集団の中でも発言力のある人物は、たった一言で周囲

を従えたり意見をまとめたり出来る喩えのことだ。実際に鶴の鳴き声は空気を裂くように響き、聴いた者の心を震わせてくる。

そして立香の声には声量こそ及ばないものの、確かに周囲のサーヴァントが耳を傾けるような不思議な力があった。この声は単なるカリスマのスキルとして片付けられるようなものでは無い。あくまでも立香自身の培ってきた、立香自身に宿る経験から滲み出てくるような説得力だった。

『立香君の声には助けられたよ。このままサーヴァント同士が争っていたのでは拉致が開かないからね』

通信機からダヴィンチが苦笑いに近い微笑を浮かべながら、杖に体重を預ける。

『ひとまず両名に対する説明も済んだからね。これからの作戦について話し合っておこうかな』

通信機を囲むようにして路上に立つマスターとサーヴァント達。その中で一人が手を挙げた。

「あの、ところで私と式さんは初めて召喚された身でよく分からないのですが、取り敢えず元凶らしいあのマンションを壊せばいいのでは?」

『察しがいいね、えー……浅上藤乃嬢』

「嬢はお恥ずかしい……浅上で結構です」

『ふむ。では浅上嬢、確かに私が今から提案する作戦の大筋というか最終目的はそれなのだが、それがどうしたのだね?』
「いえ、私も式さんも何だか気に食わない建物だなーってことで、一度壊してみようと試みたんですよ。でも、私の『歪曲の魔眼』も式さんの『直死の魔眼』も通じませんでした」
『な……そうか。それはまた随分と壊れにくそうな建物だな』
　藤乃の言葉を聞いて少し唖然とした様子のダヴィンチ。その絶句具合を見て不思議に感じた立香は質問する。
「そんなにヤバいんですか?その魔眼…が通じなかった事が」
『ああ、その通りさ。本来魔眼というのは魔術と超能力の中間にあるような固有の能力なんだが、この両名は物理的な破壊力という点を見ればトップクラスの『歪曲の魔眼』とあらゆるモノの死を視るという、使い手に襲われれば絶命は免れない『直死の魔眼』を持っている。簡単に言えば『歪曲の魔眼』は視界にあるモノを物理的な法則一切を無視して捻じ曲げ、『直死の魔眼』は生物・無生物に限らないどころか概念的なモノすら〝死〟を直に視て出てきたモノを刃物で斬りつけることにより文字通り殺す。どちらも魔眼としては非常に高性能な代物なんだ』
「なるほど……メドゥーサのキュベレイもそうですか」

『魔眼全体のランクとしては上位者にも通じる事があるキュベレイの方が高いけど、性能としては見劣りしない。むしろこの二人が敵だったらこちらの損害は免れなかっただろう』

その重々しい口調に、立香は眉を顰めた。

「という事は、その凄い魔眼二種類でも潰せないあの塔は――」

「異常な存在、ということだ。もっともアレは元から良くない存在だがな」

立香との間にマシュを挟んで座る式が不機嫌そうに答える。

「そもそもあのマンションは、ある魔術師が根源に到達する為に作り上げた大規模な結界だ。マンション全体が当時ヤツの肉体そのものだった。実際のところ、オレも一度してやられたことがある」

「目的……って？」

立香の問いに、式が赤いジャンパーを着込んだ腕に顔を埋めて答えた。

「ヤツの求めていた根源への到達には、どうしても〝死〟が必要だった。それも純度の高く、厳選された〝死〟を保存しなければならなかったのさ」

「〝死〟の保存……って何なの？」

黙って聞いていたアストルフォが恐る恐るといった調子で尋ねた。他のサーヴァントも聞きたそうな者が多かったが、キャスター組のギルガメッシュと玉藻の前はある程

度の察しがついているようで、ギルは無関心を装って不機嫌そうに石版を弄り、玉藻は尻尾が落ち着きなく揺らめいている。

その空気の中で、式は言った。

「人間の魂が何処に宿っているのか、ということだ。ヤツの答えは頭脳を司る脳味噌。極限して脳髄のみを保存することで人々の意識、死の苦しみを保存していた」

その答えにフランケンシュタインは僅かに唸り声を上げ、両手を固く握りしめた。彼女を造った科学者は人の死を冒涜したのだ。何か思う所が有るのだろう。

アストルフォは目を見開き、ハサン達も仮面で表情こそ見えないが動揺している。

「人々の死の瞬間を、脳髄だけの状態で……じゃあ…」

立香は想像する。死の瞬間を迎える寸前に、脳髄だけの状態で生かされ苦しみを何度でも味あわされる地獄を。人生のうちでたったの一回で終わるはずのソレを、幾千回幾万回も刻みつけられる恐怖を。もちろん自分が想像する以上に凄絶な絶望に違いはなく、想像しても補いきれないものではあるはずだ。しかし……しかし。

「あのマンション、禍々しいと思ったんじゃないか?それは恐らく、オレが止めた後でまた何者かが同じように死を積み重ねているからだ。今も、苦しみ続けている人が中に居る」

その言葉に、立香は今までの特異点で自分がどのように行動したのか思い出した。自分が選んだ選択は、あるいは自己満足の類だったのかもしれない。今回の件で立香は、脳髄だけで生きている人々を救う事なんて出来やしない。苦しみを終わらせてやることしかできない。

「僕は……」

立香は悲痛な表情を浮かべて顔を上げた。

「僕は、もう起こってしまったことを変えることが出来ない。レイシフトは疑似的な時間旅行ではあるけど、歴史を変えることは出来ない。今回苦しんでいる人たちを、本当の意味で救う事も出来ない。そういう意味では、僕等は無力だ」

唐突な自分語りだった。その話をあるいは下らない、些末な事だとして一刻も早く特異点を解消するべきだとも思われた。しかし、立香の表情を見た誰もが――通信越しのダヴィンチですら――立香の言葉に耳を傾けていた。

「人類史は何も輝かしいことばかりじゃなくて、汚れた部分もあるって事を僕は見て来た。だから僕は、マンションに置いてある脳髄があれば、破壊すべきだと思う。例えその中で人の魂が死なずにいるとしても、彼らはその状態を望んでいる訳じゃないんだ」

《本当にそれでいいのかい?》

立香は瞬きをした瞬間に、自分がまたブギーポップの印象世界にいることに気づいた。

背後ではブギーポップが例の奇妙な表情を浮かべ、左右の帯を揺らめかせながら立っている。

「告白すると、ぼくはどうやら他人の精神を引き込む宝具を持っているらしくてね。詳しいことは僕にも分からないから、まだ説明できないが……それは置いておくとしよう。君には本当に救う為に殺す覚悟があるのかい？」

ブギーポップの声はやはり立香のそれにそっくりで、それでいて立香とは違う無機質で合理的で冷徹な何かを秘めていた。その声が立香の脳裏を包んで思考を冷やす。

「君は確かに英雄だ。少なくとも、人類を救う為にここまで頑張った人物なんて英霊でもそういないだろう。でも君と彼らは違う。君はまだ今を生きていて、自分の人生を捧げて他人を救っているんだ。それだけでじゅうぶんじゃないのか？何故、特異点を解決すれば自然と無くなるモノを殺す必要がある？」

その問いに、立香は空を見上げた。夕暮れ時という事もあって星はたった一つしかない。宵の明星。しかも太陽の光が強すぎて目を凝らさなければよく見えないような明るさだ。

「僕は、後悔したくないんだ。人類を守るって使命にはとても重いものが付きまとって

くるけど、それらとは関係ない。これは藤丸立香が、藤丸立香自身として向き合う事だ」
だからね、と立香は笑う。
「だから僕は、苦しみ続けるあの人たちを、救ってあげたい。世界を救うとか関係なしで」
そうかい、とブギーポップは呆れたような、安心したような表情になっていった。
「ならば、せっかく居候している身だ。ぼくが汚れ役を被ろうじゃないか」
え、と立香が振り返ろうとした瞬間に、夕暮れ時の屋上は暗転した。

「……先輩、ボーっとしてどうしたのですか?」
マシュの声で我に返った立香は、右手の礼装を見つめなおした。汚れ役を被るとは、一体どういうことなのだろうか。本人の言とはいえ、彼に任せてしまっていいのだろうか。
色々な考えが立香の頭をよぎった。そのどれもが今分かることでもなく、また今分かる必要もないことだった。
しかし、一つだけ言えることがある。
ブギーポップなら大丈夫だ、という確信が立香の心の内に存在することだ。

『それでは、私とロマニがサポートするからマンションの中に突入して片っ端から攻撃していこう。マンションの主も破壊行動に対して妨害せざるを得ないから、何らかのアクションを仕掛けてくるだろう』

ダヴィンチは続けて作戦の概要を全員に伝える。その中に例の脳髄があった場合は破壊するという指示は無かったが、これは否定されない以上、黙認されたと取るのが正しいだろう。

「これから始まる戦闘は、これまでの特異点と勝手が違ってくるだろうと思う。それでも僕等は前に進む。これから特異点の解決に向けてグランド・オーダーを執行する！」

立香の決意がこもった宣言により、サーヴァント達は一斉に動き始めた。

〜・〜・〜・〜

「結果は分かり切っていただろうに」

〝――――〟は無数にある己の腕を集約させた一撃を〝彼〟に叩き込んだ。一点にダメージを叩き込まれた〝彼〟は脱力した四肢を宙に舞い上がらせてから壁に背中から激突する。

「私の邪魔は誰にもさせん。そもそも勝てるとでも思ったのか？今外に居る連中にも劣

るお前があがいたところで、結局のところ無価値だ」
そして床で力なく横たわる〝彼〟を、新たに生やした腕で拘束した。
「ふん、傷ついた体が勝手に治るのは驚かされたが、それだけか。貴様の足掻きは外の連中の足を引っ張るだけだ」
せせら笑いを浮かべる〝――〟の淀んだ瞳を、〝彼〟は覗き込んだ。
「――いいや、お前は死ぬ」
〝彼〟の一言に〝――〟の動きが止まる。
「僕が宝具を通して見た未来は正確だ。今まで一度も外した事がない。そしてお前はどうやら一番逢ってはならない人物と遭遇するらしいな」
〝彼〟はその整った顔をニヤリと歪めてせせら笑った。
〝彼〟の宝具は体そのものに組み込まれたものだ。その宝具は未来における出来事を察知し、〝彼〟が抑止の守護者として活動する際にはより良い未来への道しるべとなってくれる。
その彼の宝具は、一人の人物を〝――〟の瞳に見出した。
鎖の巻き付いた縦長い帽子。帯が揺らめく大きなマント。特徴的で奇妙な表情。
それは不気味の泡〈世界の敵〉を狩る自動的な存在。
その名も、ブギーポップ。

砲撃／サーヴァント

ダヴィンチの立てた作戦は単純明快。敵は初めから各個撃破を狙った罠を張り、戦力の低下を狙うと同時にあわよくばマスターの命を奪おうとしていた。立香の背後を狙って近づいたオートマタは、確かに立香の命を確実に奪うために配置されていた。つまり敵からすればやはり大勢のサーヴァントが押しかけてくる状況は好ましくないのだろう。

だからこその戦力一点集中。マスター完全防御陣営を行う。

まず中心に立香が立ち、そのすぐ前方にマシュが構える。下方に玉藻の前、右方に両儀式、左方に浅上藤乃が陣取る。そして陣全体を見回す上空で、ギルガメッシュがやや後方、アストルフォがやや前方を飛行する。

陣全体が向かう場所は百貌のハサンが常に十数名で偵察と敵の殲滅を行い、陣から離れた後方は静謐のハサンが主に偵察、フランケンシュタインが主に殲滅を担う。

『メンバー構成がちょうど良かったようだ。なかなかに面白い陣形ができたよ』

「いや、その。僕は中心に居たくないのですが」

自らの考案した陣形を見て満足気に微笑むダヴィンチ。

一方で立香は居心地悪そうな顔で身をよじらせた。
何せマシュと玉藻に前後でサンドイッチされ（しかも明らかに故意に）、左右で怖い目（魔眼）をした美少女が歩いているのだ。リア充爆発スイッチがあったなら立香はスイッチの犠牲としてあの世に行っていただろう。非リア民恐るべし。
「フン、せいぜい雑種どもはマスターの肉壁として地を這いつくばっるがいい！」
ギルは上空からいつもの調子でＡＵＯ風を吹かせている。
「……そもそも何故にギルは空飛んでるの？いつもは飛ばないよね」
説明しよう。キャスタークラスのギルはアーチャー状態のギルより大人しい冥界帰りの王様なので、やんちゃに空を飛ぶのも控えているのだ。
「それは恐らく、頼りない対空要員を補うためだと思いますよ、先輩」
警戒を続けながらマシュは前方を見上げる。
「フンフンフフーン♪」
そこには鼻歌を唄いながらゆっくりとピポグリフに乗って旋回するアストルフォの姿があった。
「いや、アストルフォもああ見えて頼りになる時はなるんだけど」
「いつもの調子がアレでは疑われるのも仕方がないのでは？」
立香の反論に後ろから色々と押し付けてくる玉藻がマシュ同様に空を指す。

そこにはヒポグリフでめっちゃ曲芸飛行しているアストルフォがいた。
「……幻獣召喚の魔力消費は足りてるし……まあ特異点って戦闘ないと退屈だし……」
立香は色々と諦めた目をした。

〜・〜・〜・〜

マンションから湧いてくる敵性エネミー達は一見限りがないように見えたが、陣形を維持してしばらく後、それらを全て排除することに成功した。
「これは恐らく罠だ」
百貌のハサンが報告する。
「我らの内、何人かがかあらゆる視点でマンションを外部から観察したが、中の様子が全く把握出来ない。何らかの魔術的な隠蔽を行っているのだろう。よくは知らんが、ここの主であった魔術師とやらは相当な使い手だったのだろうな」
その言葉を式は少し苦々しい表情で受け止めた。
「アイツは結界専門の魔術師だった。工房の覗き見防止なんて朝飯前じゃないのか？仮にアイツが敵だとすれば厄介だぜ」
その言葉に玉藻の前が小川マンション全体を眺めて、ふと首を傾げた。

「私(ワタクシ)、こういう造られた場所というのは色々見たことがありますケド、単なる魔術師程度が造れるとは思えませんけどねぇ」

『ああ、確か玉藻の前は呪術に詳しかったね。どうだい？君の目から見てこの建物はどんな感じかな？』

通信機からロマニが尋ねる。

「うーーん……なんと言えばいいでしょう。人間が造ったものに別の存在が手を加えたような、と言えば良いでしょうか。死を保存し積み重ねる儀式場の上に、更にもう一段階重ねているようですねぇ」

玉藻はおもむろに自らの宝具を取り出した。

『水天日光天照八野鎮石(すいてんにっこうあまてらすやのしずめいし)』。

魔力や体力その他諸々を回復させる鏡の形をした宝具である。陰では「タマモタンD」と呼ばれているとかいないとか。

「マスターの負担を軽減するため、この私が一肌脱ぎましょう。あ、金ピカ王呼んでくださいまし」

「おーい、王様。一つ頼み「我を呼んだか無礼者!!」

玉藻の要請に応えギルを読んだ立香。その呼び掛けにノータイムで駆けつける英雄王。尊大な態度を維持したまま嬉しそうなオーラを出すその様子は周囲にいた他の

サーヴァント達を怯えさせた。
これが新しい王様風ツンデレである。需要は恐らくない。
「私(ワタクシ)のしたい事、王様ならお分かりですわね？」
「フン、貴様の事は気に食わんが…良いだろう。手を貸してやる」
そして二人は一度陣から抜け出し、マンション入口正面に立った。まず石版を抱えた英雄王が反対の手で掴んだ斧の石突を地面に叩きつける。
「我が声を聞け!!
全砲門、解錠!!
矢を構えよ、我が許す!!
至高の財を持ってウルクの守りを見せるがいい！　！
大地を濡らすは我が決意……！
『王の号砲(メラム・ディンギル)』！　！」
宝具の真名解放と同時に、遥か彼方に展開されたウルクの城塞から多数の砲撃が小川マンションに向かって降り注ぐ。
その第一陣が到着すると同時に、今度は玉藻が宝具を宙に浮かべて足をたおやかに踏み出した。
「出雲に神在り。

是自在にして禊の証。
神宝・宇迦之鏡也。
『水天日光天照八野鎮石(すいてんにっこうあまてらすやのしずめいし)』……!!」
うっすらと周囲に張り巡らされた小さな鳥居と言霊の刻まれた札。中央では玉藻の前が宝具を空に向かって掲げている。
本来であれば冥界の死者すら蘇らせて従わせるという伝説の鏡。そろから供給される魔力で砲撃の勢いがさらに増す。
「ほう……駄狐にしては気が利いておるではないか」
砲撃を続けながらギルは涼しそうに笑った。砲撃の衝撃波でマンションの地面の尽くが裂け、砂埃で視界がすっかり奪われる。攻撃の余波はマシュが咄嗟に展開した魔力障壁で軽く防いでいるが、防がれていない攻撃はマンションを囲んでいた残りの建物を揺るがし、地面は絶えず振動している。
「……これ、やり過ぎじゃないかな」
「そのセリフは今更ではないでしょうか」
いくら魔眼で破壊できなかったとはいえ、過剰な攻撃ではないだろうか。
立香の若干引き気味な表情に、後ろから追いついた静謐が呆れ顔で応じる。
「そもそもマンション自体の正体が未だ掴めていませんが、特異点の原因になっている

ことは確かです。突入すれば罠がある事には変わりありません。ならば罠ごと全て吹き飛ばしてしまえばいい……ということでしょう」

……それはあくまでも建前だ。

これは玉藻の前とギルガメッシュが独断で行った攻撃。中に生きた人々がいて、それ等を殺す以外に救う術がないのであればマスターが直に手を下すという意識を薄いままに殺してしまえばいい。元を辿れば人類悪に近い性質を持った玉藻の前と、ウルクの王として以前の特異点で協力しあったギルガメッシュであるからこそ行った一方通行の暴力である。

それを察していたダヴィンチも、ロマニも、口出しはしなかった。

「……ま、こんなものか」

数にして三万は打ちっ放しだっただろうか。ギルガメッシュは展開していたウルクの城壁を閉じ、玉藻の前も札を回収した。

舞い上がった砂埃は一種の天候と化しており、視界は未だ晴れない。マンションの姿もそのシルエットすらよく見えなくなっている。

「これだけ破壊すれば吹き飛んでいそうなものだけど……そもそも吹き飛んでるよね？」

「さてな。万が一我がアーチャーとして現界しておれば確実に消し飛ばしておったのだ

が、今の霊基では封印している故にアレが使えぬ故に断言は出来ぬ」
「私(ワタクシ)の見立て通りであれば、あの程度の攻撃で傷が付くとも思えませんねぇ。強化こそしましたが、敵が見えなくなった時にはフラグが立つと言いますし?」
立香は二人の言葉を聞いて信じられない気持ちになった。第七特異点でも見たキャスター・ギルガメッシュの活躍。ウルクからの砲撃はギルの財宝の一部を『壊れた幻想』として使用したもので、その威力は並のサーヴァントが出せる火力を遥かに超えている。その火力を更に大量の魔力で補ったのだ。無傷である方がおかしい。
だが、マンションの姿はその場にいるほとんどが予想だにしない状態で存在を維持していた。
「な……」
砂埃が徐々に晴れていくと、直径３００メートル程の穴が露わになった。マンションを中心に形成された穴は砲撃によりかなり掘り下げられている。
そしてマンションはその姿どころか位置さえ変わらずに存在していた。具体的にいうなら基礎や土台ごと浮いていた。あれ程の攻撃を受けていたにも拘らず、汚れ一つ付いていない。あたかもその場所一帯だけ時が止まっているかのようだ。
『……砲撃をしている間にあら方解析できた。恐らくはマンション全体の性質を変化させている。特異点を解決する為にはマンションそのものを壊さなければ話にならない

が、このままでは難しいだろう。性質の変化自体はマンションの中心部に相当する場所で行われている何らかの儀式的な魔術によって維持されているようだ』

ダヴィンチは解析結果を淡々と告げた。

「これは、もう中に乗り込むしかないって事だね。マスター」

浮かぶマンションを見たアストルフォは、決意を固めた顔で右手の槍を握りしめた。

「これが例え罠だったとしても、誘い込まれたのならこちらから受けて立つしかないと思うよ」

「正論だな、オレも同意見だ。多分オレの知っているヤツより上の存在が何か手を加えている。これ以上遠回りしても仕方ない」

式は砲撃の間中ずっと細めていた目を開いた。

「さて、我が地面を吹き飛ばしたのだ。少しばかり手を貸そう」

ギルは『王の財宝』から大量の鎖を取り出すと、浮いたマンションを周囲から雁字搦めにした上で、鎖の先端を穴の壁や周囲の建物に埋め込ませた。ついでとばかりに鎖同士を繋いでマンションまでの足場も用意した。恐らく中に入った瞬間にマンションごと落とされる可能性も考えたのだろう。

「それでは我らが先行偵察しよう。我らが罠にかかるかもしれぬが、我らを使い捨てにするのは聖杯戦争に呼び出される度に常道であった。例え消滅しても気にするなよ、マ

スター」

形成された鎖の足場を通って、百貌のハサン達が六名が入っていった。

「――この建物、なんだろう。さっきまでよりも禍々しくなってない？」

ハサン達の報告を待つ間、立香は先程から感じていた寒気が一層強くなるのを感じていた。その寒気には何となく見覚えがあったし、そしてあのマンションがそういう類いであることは容易に想像出来た。

『大方君の想像している通りさ、マスター。これまでに遭遇した魔神柱にも似た反応がある。あの中には魔神柱に成ろうとしている人ならざる者がいると考えていい』

通信機越しにダヴィンチが断言する。

『しかも今回の敵は相当強い。あれだけの攻撃を加えても動じないという事は、これまでに出会ってきた魔神柱とは比べ物にならない力を有していると考えていい。今は成長途中で未完成な部分が内部にあるが、完成してしまえばカルデアのサーヴァント全員まとめてかかっても苦戦する恐れがあるだろう。流石にティアマト程では無いと見たいがね』

魔神柱とは、グランドキャスターの皮を被った存在たるソロモンが使途する存在。それぞれが巨大な力を有しているが、先程放った砲撃を無防備に浴びて全く動じない程ではない。一方でこれまでの旅で出会った中でも最強の敵は、神の権能を有した母なる大

地、ティアマトだった。
「卵の殻、という可能性もあるだろう。生まれてしまえばこちらの攻撃も効くかも知れないが、賭けるには少々薄い可能性だ……くそ」
　百貌が仮面を脱いで顰め面を晒した。程なくしてマンション内部に侵入していた百貌の分身達が帰ってくる。六人が侵入した筈だが、帰ってきたのは三名。その内一人は片腕を負傷している。
「三体やられた。気配を遮断して接近した一人がまず霊核を貫かれ、それに反応した三人が戦闘に加わったが、話にもならなかった。死角から投擲しても生えてきた腕に防がれ、為す術もなく二人倒された」
「しかし、防いだという事は外側に較べると頑丈さでは劣りそうですね」
　マシュはシールダーとしての経験上、そのまま受けてはならない攻撃だからこそ躱したり防いだりと反応することを身に染みて知っていた。百貌の攻撃を軽いものでもわざわざ防ぐということは、こちら側のサーヴァントがしっかり攻撃すれば倒せるレベルだろう。
『敵のこれまでの行動は時間稼ぎが目的なのだろう。そしてマスターの命を狙っていることに代わりはないし、これからも狙ってくる。エネミーの放出も単に意味が無いと判断したから止めただけだ。一度入れば再び放出するだろうな』

ダヴィンチは冷静に分析した上で作戦を建て直した。

『マスターにアストルフォ、フラン、マシュ、静謐のハサン、両儀式が同行。百貌のハサンは引き続き偵察と殲滅をマンション内部で行い、外側でギルガメッシュ、玉藻の前、浅上藤乃が外部からの挟み撃ちを狙う敵を殲滅する。うち漏らせばマスターが不利になる。出来れば一体も逃さないようにするんだ』

内部の敵の強さは不明。しかしマンション内部は戦うのに狭いため、立香に同行して本体を相手できるサーヴァントは限られてくる。立香を守るマシュ、範囲一体への攻撃を担えるフラン、狭い場所にて短時間で敵を仕留められる式と静謐、緊急脱出用のアストルフォは必須だ。

そして大規模な攻撃が可能なギル、マスターが距離的に離れていても魔力を追加で供給できる玉藻、視界に入った敵を問答無用で捻じ曲げる藤乃は開けた場所で溢れる敵を殲滅するのに向いている。

『この作戦でなら何とかなるだろう。マスターもこれでいいかい？』

《いいや、ダメだ。今回はぼくに行かせてくれ》

ダヴィンチの声に反応したのは、立香自身ではなく礼装越しに宣言したブギーポップだった。

《ぼくには『啓司』に似たスキルがあってね。このままでは間違いなくマスターが傷つ

く。ぼくが直接相手するのが一番だ》

その声にギルとマシュを覗いた他のサーヴァント全員が驚いた。ブギーポップの存在を知っているのは、召喚時に立ち会った者達とブギーポップ対策に呼ばれた二名のサーヴァントのみである。知らないのも当然だった。

立香の白い制服が黒いマントに包まれる。頭には長い筒に鈍く光るメダルと鎖がついた帽子。マントの止め金部分には陰陽を表す白と黒が混じった模様が描かれている。

肩から伸びた帯が夜の風にそよぐ。先程まで立香自身のものだった瞼を開いて、ブギーポップは口の片方を吊り上げた。

「ぼくの出番だ。どうやら〈世界の敵〉を止めないとダメらしい」

世界は誤りで満ちている／上

誰かを救う方法は山ほどある。
でも、方法があまりにも多すぎて、しかもどれが本当の救いとなるのか分からなくて。だから人は迷うのだろう。自分の成してきた救いは間違っているのだろうかと。誰かの成している救いは間違っていたのではないかと。
現実は答えの無い問で溢れている。真の正解を決めてくれる誰かなんて自分自身を含めてもいない。世界はいつも不定形で絶えず変化し、変化についていけない人々ばかりが救いを求めて手を伸ばす。
ならば、誰かを救うという行動は変化の波に抗う人のみが為せる技なのだろう。
今、人類史を滅ぼそうとする彼らにその権利があるように。
自動的な存在に成り果てていた彼にもその権利がある。
変化を望む彼らは果たして悪なのか、敵なのか。
答えを持つ者が遺した言葉は、今なお世界を揺るがしている。

〜・〜・〜・〜

「――まずは落ち着け」

突然のブギーポップの登場に混乱していた場に、黄泉帰りの王が一言投げかけた。同時に無言で自らのカリスマを表出させる。本来ならばマスターである立香自身の持つ統率力を邪魔しないように使用を控えているスキルだ。

その凛として威厳のある声に、武器を取り出した者も、声を張り上げようとした者も、そして事態を飲み込めずにいた者も自然と静まり返った。

《……助かったよ、ギル》

ブギーポップが胸の前に水平に構えた右手から立香の声がした。例の特殊魔術礼装である。ブギーポップが左手で小さなパネルを押すと、カルデア本部との通信時に似たホログラム映像が表示された。

《ごめん。この場に居るみんなには謝らなくちゃいけないことがある。先日僕はダヴィンチやロマニ、マシュとアルトリアの立ち合いの元で召喚実験を行ったんだ。それで召喚自体は成功しちゃったんだけど、それが歪な形になってしまって――》

『待った』

立香が緊張した面持ちで喋りだす様子を見かねて、マシュの持つ通信礼装からダヴィンチが静止を掛けた。

『この件については私の責任が大きい。サーヴァント達に対する機密情報として口止めをしたのも私だ。幾ら黙っていた張本人とはいえマスターが説明するに及ばないだろう』

ダヴィンチの言は正論だ。事態の説明および謝罪は責任者が行う事であり、例え当事者だとしても責任を預かっていたダヴィンチに説明を任せるべきであり、立香が説明してはならない。

《でも……》

「口を出すでない、マスター」

ギルガメッシュが止めに入る。

「恐らく貴様は自らの過ちだと思い気にしたのだろうが、それは不要だ。マスターとしてサーヴァントに隠し事をするべきでは無いと思うのは正しいが、せずとも良い隠し事とせねばならない隠し事の分別がついておらん」

ギルの言葉にまだ物言いたげな顔ではあるが、立香は一度口を閉ざした。

『じゃあ、説明しよう……このサーヴァントは私が責任者となって何人かの立会の元で行われた召喚実験で召喚された。しかし、どのような因果でそうなったのか依然として詳しいことはわかっていないが、

マスターの霊基と召喚されたサーヴァントの霊基が融合して疑似サーヴァントに

なってしまったんだ――』

　ダヴィンチの説明は分かりやすく、その場にいた一同は部外者でもある浅上藤乃や両儀式も含めてブギーポップがどのような立ち位置に居るのかを理解した。藤乃はあまり興味がなさそうな顔をしているが、一方で式は黙って目を光らせていた。

「……説明ありがとう。ぼくだって自分から望んでこちらに召喚された訳では無いのだが、その事も言ってくれて助かった」

　ブギーポップはそう言って縦長い帽子を目深に被り直した。

「ぼくは元の世界で〈世界の敵〉を排除していた存在だ。こちらで言うところの、抑止力のような立ち位置だ。ある少女の裏の人格として生まれたのが最初で、ぼく自身ぼくがどのように生まれてきたのか分かっていない。ある意味では二重人格そのものとも言える、そんなサーヴァントだ」

　ブギーポップは両手をマントの中から出し、右手を僅かに振るった。

「……信用していないのか、それともぼくが戦えるかどうかのテストかな?」

　聞こえるか聞こえないかという風切り音と共に、ブギーポップの右手に鋼糸が巻きついた短剣が三本握られていた。背後では百貌のハサンの分身体が驚愕の表情で固まっている。

「ああ、別に動いてくれても構わないのだが……そういえば動けないのだったな」

そう言ったブギーポップは嘲笑ともとれる奇妙な表情を浮かべて左手の人差し指を数ミリずらした。その動きと同時に、分身の首筋から血が一筋垂れる。
「そんな…あの一瞬で？」
静謐が僅かに後ずさると、仮面がプツリと切断されて青ざめた顔が晒された。ブギーポップが握っていた三本の短剣の内、二本は百貌のハサン、一本は静謐のハサンが仕掛けたものだったのだ。
「頬を掠めるだけで留めるつもりだったようだが、確かに静謐とやらの毒を少量でも食らえば倒れていただろう。今のぼくに対毒体質は発揮されていないからな。随分と手際が良いものだ」
ブギーポップが手元の短剣を放り投げ、鋼糸を瞬きするよりも速く仕舞った。その動きを見て、両儀式は更に目を細めた。獲物を見るような目付きだった。
「……なるほど、それだけ強いなら一人で突入しようという意見に頷けなくはありませんわ。しかしアナタの信頼度は　ひ・く・す・ぎ　です。この場にいる面子を全員納得させられるとでも思っているんですかぁ？」
玉藻の前が尻尾を立てて凄むと、ブギーポップはやれやれと首を振りながら言った。
「確かに君たち程の力を持つサーヴァントであれば、アレの中に居座るやつに勝てるかもしれない。しかし今回はぼくの世界からやって来た奴が関わっているみたいでね。

ぼくが直接確認しなければならない」

ブギーポップはもう一度鋼糸を出して縦横無尽に揺らめかせる。

「ぼくの世界においてぼく自身はかなり強い立ち位置にいた、と思う。しかしその世界で苦戦されられた事は一度や二度じゃない。そしてそういう奴らがこちらに来ているとすれば、ぼくはそいつを見極めて場合によっては倒さなければならない」

そして例の冷たい無表情を顔の奥から表出される。

「ぼくはいつだって自動的だったからね。だからこその不気味な泡だ」

その発言にダヴィンチは思考を深めた。ブギーポップという存在はやはり知れば知るほど抑止力のような性質がある。しかしながらこちらの世界における抑止力の行動はサーヴァントの召喚や強化に充てられる。しかし、そもそも英霊という概念のない世界において抑止力が活動する時、その代替となる者が必要だったはずだ。

ひょっとすれば、このブギーポップというサーヴァントは抑止力の新たなカタチの一つなのではないか？世界全体の事象に介入する際ギリギリで許されるラインが二重人格だったのではないだろうか……。あるいは考え過ぎかもしれないが。

『――そうか、それなら仕方ないな。只でさえ強大と予測される魔神柱モドキに加えて実力が未知数な別の世界の人物がいるのは厄介極まる。もし君が『こちらで助けの必要性があると思われた場合、勝手に介入する』という条件を付けてくれるのであれば構わ

ないだろう。それでいいかなマスター？』

《はい、それでお願いします》

　そのダヴィンチからの空気を読んだ案に、アストルフォは不満げな顔をして言った。

「ちょっと待ってよ。いくら強いとはいえ一人で行かせるのはどうなの？信頼とかそういう問題じゃなくて、ボクからすればマスターの身体一つで戦わせるってこと事態が心配だよ」

「確かに、ぼくだけでは心配だというのも頷けるな」

　アストルフォの単純なようでいてこの場のサーヴァント全員が抱えていた心情の核心を突いた言葉に、ブギーポップは同意した。同意した上で初めから考えていた提案を持ち出した。

「それなら一人だけ同行を認めよう。味方陣営に属していて、敵の死ににくさに関わらず必殺を狙えて、戦い慣れしているような――そうだ、両儀式はどうだ？彼女ならぼくの要求も満たせそうだ」

　その誘いに先程から黙していた両儀式は、

　とても女性的かつ蠱惑的な笑みを浮かべた。

～・～・～・～

『――こちらから干渉しないでくれとは、また随分な要求だな』

不満げなダヴィンチの声が玄関ホールに満ちた。

結局あの後に追加ですったもんだがあった末に、ブギーポップの提案通りに両儀式がサポートとして付くことになった。しかし両儀式側からの条件としてカルデア側からの音声傍受停止を要求した。つまり両儀式の許可がなければブギーポップ達の会話を聞くことが出来ないのだ。

「これは随分と都合のいい条件だな。もう察しているのか？」

ブギーポップが問うと、両儀式はほっそりとして白い腕を腰にいつの間にかあった刀の柄に伸ばした。それを目視したブギーポップは、よりマンションの深い方へ逃げるように移動してから振り返り対峙した。

「察しがいいようね……余程敵を殺したのね、貴方」

クスクスと笑った両儀式の着物は、先程までの紺色のそれとは異なり華やかな白基調の立派なものになっていた。百合のような植物をあしらった模様が嫋やかな表情をより際立たせている。

「やっぱりか、そんな気はしていたんだよ。ぼくにはどうやら二重人格者に対する嗅覚みたいなモノがあるらしいな」

「……それ、本当かしら」
「疑われるのは心外だな」
　相変わらず女性的な笑みを浮かべ続ける両儀式と、憮然とした表情のブギーポップ。暫く対峙していた両者はどちらからともなく歩き始め、長く歪んだ階段を上り、偶に現れる敵を糸で切断する一方で刀で視えた死を殺して排除していく。
「君が恐らくこの世界でも特別製である事は確信していた。君は恐らく、尋常じゃない場所から表出しているな。元から比較的自由な存在だったと見るが、違うのか？」
「貴方に比べれば自由だった、かも知れないわね。少なくとも意思は自由だったけれど、外に出る機会がなかなか無かったの。その点で言えば貴方の方が自由だったのではなくて？」
「まるでぼくの事を以前から知っていたような口調だな」
「それはお互い様よ。でも私が何処から来ているか知っているなら、不思議にも思わないでしょう？」
　クスクスと袖を口元に近づけ笑う両儀式に向かって、やはり憮然とした表情のままでブギーポップは唐突に糸を振るった。
　プツン。
　伸びた鋼糸はあっけなく日本刀で殺された。

「危ないわ……でも、やっぱり貴方は強い。私ですら糸を直視出来なかった……まあ、直死なら出来ましたけど」
「……」
　ブギーポップは一瞬でバラバラになった鋼糸を回収して、新たな鋼糸を懐から取り出した。
「それで、何故私を呼んだの？敵の排除は私抜きでも出来ることでは無くて？」
「それはそうだ。此方としても舐めてもらっては困るな。ただ今回は目撃者を減らしたかっただけだ」
　ブギーポップは何も無い背後の空間を後ろ手に示した。
「あの浅上藤乃とかいう女性、恐らく透視能力を持っているな。今はぼくが割り込んで妨害しているが戦闘中はそうはいかない。君なら透視能力だけを一時的に殺すくらい訳ないだろう」
　その頼みを聞いた両儀式は、目を丸くした。
「それだけ？それだけの理由で私を呼んだの……？呆れた人ね。昔にも私が何でも叶えてあげるって言ったのに、心から何も望まない唯の人がいて驚いたけど。あの人程では無いにせよ驚かされたわ」
「そうかい、そいつは光栄だ」

ちっとも光栄だと思っていなさそうなブギーポップの返事と同時に、歩き続けていた二人の周囲が空間ごと軋み始めた。
「どうやらここからが本番らしいな」
真正面から走ってきた精巧なオートマタを見ずにブギーポップは両手を構えた。目標を捕らえ損ねたオートマタは、首を置き土産にして慣性に任せて背後へ走り去って行った。誰にも認識できないような速度で空間を切り裂いた鋼糸が、ついでとばかりにオートマタの制御部分と胴体を切り離したのだった。
「私は手を出しませんから、あとはよろしく頼むわね」
逆に背後から襲いかかってきた醜悪な見た目のホムンクルスは突如として発生した脳天まで突き抜ける快楽に戸惑った。その快楽の源を辿れば、日本刀が胸の正面から侵入して神経、血管、骨格を心臓そのものを除いて全てすり抜け刺さっていた。その快楽は、あまりにも見事な殺人術から発するものだった。
歯車が弾け飛び、血の雫が馳せる空間を横目に二人は扉を開けた。
「――――お待ちしていましたよ。境界を司り、「???　　」そのものである根源の主よ。そして私を遂には殺すという、遠い世界から来た死神よ」
そこにはシルクハットを被り、目を爛々と輝かせた茶髪の紳士がいた。もし心情その他を考慮して連絡を一時とらないようにした立香や、そもそも連絡していないダヴィン

チやロマニ、そしてこの場にいないマシュがその姿を見れば間違いなく動揺するだろう。

二人の前に立ち塞がった男は、カルデアのマスター達を一人残して全員殺害した裏切り者。オルガマリー・アニムスフィアの信頼を背負いながら自ら突き放し、絶望の末に炎上する観測機に沈めたレフ・ライノール教授の姿そのものだった。

世界は誤りで満ちている／下

死が、怖かった。
死が、嫌だった。
死が、冷たかった。
死が、恐ろしかった。
死が、認められなかった。
死が、逃れられなかった。
でも生きる意味もない。自分という存在は、死んだ時点で役割を果たしたのだ。死んだらそこで終わり。ゴールを迎えた私は、華やかに盛大に嬉しげに死を受け入れなければならないのだ。
そう、死ぬと分かっていた。死ぬと理解していて自分はこの道を選んだのに。
どうして？どうして？
どうしてこんなに寂しいの？
どうしてこんなに冷たいの？
死が恐ろしいだけじゃない。それなら死を否定するだけで充分だったはずだ。

でも、でも、でも。
死が否定できなくて死を否定したくなくて死を迎えたくなくて死を迎えなくてはならなくて死が死が死が死が死死死死死――――

イヤダ。

ワたしハ死ンでいナい。
ソうｄａ。
わｔａシは死ト生ノさｋａイに生キテいるンだ。

――――そうだ、そうだ。そうだ！そうだ!!
私はまだ死んでいない！しかし生きてもいない！
私は死と生の間に存在しているだけだ!!!!
しかし、だめだな。私以外にそのような存在が少ないのは頂けない。この素晴らしい世界をもっと拡げなくては。もっと広めなくては。
まずは研究だ。この世界に強引にでも足を入れたまま世界を確立する術を探さなくては。同胞もきっといるだろう。そいつらと一先ず世界に最も影響を与えている人間

から住民を探さなくては。サンプルが要るな。専門の知識も要るな……それならあの時代が丁度いい。アレを取り込んでしまえば話も早いだろう。

そして哀しい精神体の集合が産声を上げた。

彼らの目的は新世界たる死と生の境に出来た存在の拡張――。

ではない。それは目的に対する手段に過ぎない。

それは、ヒトリが寂しかったから。

死も生も受け入れられない彼らの卑しくも純粋な願いだったから――――。

～・～・～・～

「改めまして、自己紹介させて頂こう。私の名はレフ・ライノール。人理を修復しているであろうカルデアという名の機関に務めていたこともある、カルデアの裏切り者だ」

そう言ったレフはその場で優雅に一礼した。その瞳孔は小さく収縮していて、口元から覗く牙は部屋の照明を反射して獣のソレよりも危険に輝いている。

「私の計画をまたもや邪魔しに来るとは、なかなかに骨のある連中だ。正直私は驚いている。そう言えばもう次のレイシフトで我が主たる魔術王ソロモンの元へ行くのだったか？勝ち目のない戦いがお得意のようだな。こちらとしては貴様らの無駄な悪足掻

きに吐き気を催しているところだ」
　両手を広げ胸を張り堂々とカルデアを侮辱するレフ。しかし両者の反応はレフの期待したそれではなかった。
　一方の両儀式は我関せずと興味なさげに毛先を弄り、
　一方のブギーポップは奇妙な表情を維持したままだった。
「――？まさか貴様らはカルデアの事情を知らんのか？ふん、わざわざ私が説明しなければ分からないのか。全く、私を殺す者だと言うから多少は話の通じる輩だと思ったのだがな。あの哀れなマリスビリーなら――」
　プッ。
　マリスビリーの名前をレフが言った瞬間に、レフの両腕が一瞬にして切断された。
「な……」
「すまないな、レフとやら。ぼくの宿主が本気で怒っているらしい。まさか身体の主導権をうっかり返してしまうとは思わなかった。失礼をしたな」
　ブギーポップはぬけぬけと言って伸びた二本の鋼糸を仕舞った。実際には心象世界で映像だけ見ていた立香の憤りが激しく、またその感情を割り込んで読み取ったブギーポップが意を汲み、意趣返しとして先手を打ったのだった。
「――よく気を付けておけ。飼い犬はよく飼い慣らさなければ、いつ手を噛んでくるか

分かったものでは無い」
「いや、ぼくとマスターの関係は対等だ。生憎と飼い飼われる関係ではない」
「ふむ、そうか」
ブギーポップの否定に考え込んだレフの両腕からは、血が全く滴っていない。傷口は生々しい断面を晒しているが、それだけだ。まるで今しがた両腕が取れていることに気づいたような目付きでソレを見たレフは、一瞬力を込めるだけで腕を再生させてしまった。
「勘違いをしながら過ごすサーヴァントというのも悪くないな。見ていて滑稽だ。完全に対等なマスターとサーヴァントなぞコミカルなショーの題材には打って付けだな。ところでそこの根源に繋がる少女よ。ここまで自分で来たということは我が研究の生贄になってくれるということか?」
両儀式を生贄にするという発言に反応して鋼糸が動きレフの両足が根元から切断されたが、今度は一瞬で元通りの肉体となっていた。
「いいえ。私は貴方の目的を知っていますから。そんな目的に手を貸す理由はないわ」
「そうか……やはり、力づくになるということか。手間のかかるヤツらだな」
クツクツと嗤ったレフは、両手を前方に翳した。翳した両手の真下の床から、どんどん海魔の触手にも似た魔神柱の腕が生えてくる。

「なるほど、これから新たな魔神柱に成ろうとしている建物全体に寄生しているからこそ出来る芸道だな。侵食部分をそのように利用するとは」

ブギーポップがレフが生やす腕のカラクリを見抜き、詰まらなさそうにタネを語る。

「貴様らには分かるまい。この魔術師の中では比較的凡人だった者の努力が。この建物は奪ったのではない。前の持ち主と私が一体化する事で生み出された新たな魔神柱の身体と成りうる貴重な素材だ。壊されては堪らん」

愉快そうに笑うレフはブギーポップの説明に更に説明を重ねた。

「私があの世界の法則と成り果てていた魔術師を取り込むことで、この元々死が集まりやすい特異点モドキを主人として支配出来るようになった。このマンションは私の真の身体にして傷付けることは不可能。例え神の権能であろうとも、この塔を壊す暁には一苦労するだろうな」

そして部屋を埋めつくした触手の切っ先を、より鋭く人体に容易く穴が開けられるように修正していく。

「来て早々で悪いのだが死んでくれ。何、死ぬとは言っても君たちは私によって死なず生きられずの状態で保存されるというだけだ。確かにカルデア側から見れば死んでいると言えなくもないが、脳以外の機能を停止させるなり精神だけを壊すなりすれば生きている扱いにはなるだろう。特に……そこの根源に繋がる少女は必要だ。少なくとも

脳髄だけでも保管しなくては」
　鋭くうねる穂先で満たされた空間に、ブギーポップと両儀式とレフだけが互いに見える状態だった。一歩でも動き出せば、周囲の腕は即死寸前まで体を突き刺すだろう……なんとも醜く耐え難い殺人だろうか。
「最後に、君と戦う前に聞きたいことがある。ぼくが君を殺すといった者は何処の誰なんだ？」
　自らに向けられた何百もの腕を無視してブギーポップが尋ねた。
「ああ、それならコイツだ。どうやら私の目の中に貴様の顔を見たらしいが、いつの時代も予言は裏切るものだ。少なくとも今回は結果を違えたらしい」
　レフが腕の群れを一部左右に分け、奥から磔のような格好の青年を出した。顔は俯き加減で、現代ではよく見かけるような単色のシャツにジーパンという質素な格好をしている。しかし服は血で染まり穴と裂け目だらけで、口の端からは血を垂れ流しており、影になった顔から覗く目は酷く虚ろで何を見ているかよくわからない。
「今は辛うじて生きているが、この後にでも研究対象として死の苦しみを味わってもらう予定だ」
　その言葉に反応したのか、青年は僅かに顔を上げた。その顔を見てブギーポップは息を呑んだ。

ユージン。

ブギーポップが周囲に聞こえるか聞こえないかという声で囁くと同時に、それを合図としてユージンと呼ばれた青年は突如喋り始めた。

いや――その声は声ではなかった。

何処か遠くで誰かが口笛を吹いているような、そんな音声を単なるスピーカーとして雑音混じりに流しているような、純粋に「音」の洪水だった。

突然の出来事にレフが驚き、目を見開く。

流れ出したメロディーを聴いて、ブギーポップは口の端を吊り上げて今までに見せた表情の中でも一番笑っているように見える奇妙な表情を作り出した。

ニュルンベルクのマイスタージンガー。

どこか荘厳で雄大で誰もが聞き覚えのあるようなクラシックは、そんなタイトルだった。

「一つ」

両儀式が呟く。

ブギーポップが足を踏み出す。

我に返ったレフは無数の腕を操作してブギーポップを串刺しにしようとするも、何かに割り込まれたかの様に尽くの腕が一瞬静止した後にバラバラと根元から切断されて

落ちる。

「『ニュルンベルクのマイスタージンガー』がその場において演奏された、またはされていること」

ブギーポップは左手から伸ばした鋼糸を回収し、次に右手の鋼糸を振るう。空を切りレフに迫った糸は、レフの数センチ手前で『静止』した。レフがある魔術師を取り込んだ際に受け継いだ根源を改良した絶対の防御だ。彼にどんな攻撃も届きはしない。

「二つ」

青年の声帯から流れ続けるメロディー。始めは激しかった曲調が次第に穏やかなものへと移り変わる。そのテンポに合わせてブギーポップが宙を舞う。人間の限界を越えた更にその先を思わせる速度で移動し、腕を躱す。

「敵がその生涯で最も美しい状態であること」

両儀式が唄うように台詞を口ずさむ。両手から伸びた糸は縦横無地にレフへと襲いかかり、その先端が頬を、腕を、足を掠めていく。『静止』するには対象を認識しなければならないが、あまりに速く繊細かつ多彩に振るわれる鋼糸に反応が追いつかない。しかしレフには再生の能力がある。いくら傷つけられても即座に回復する。レフが負けることは絶対に有り得ない。

「三つ」

レフにとって鋼糸は防がなくても良い、些細な攻撃であったはずだった。そもそも肉体が追いついていないだけで、あの時アサシン達から飛んできた短剣も防ぐ必要なぞ無かったのだ。しかし自分は防いでしまった。それは一体何故か。レフは考え始める。

……そう言えば、何故自分は死と生の境を求め始めたのだったか。

「敵の死によって世界が救われること」

レフは――いや、レフの身体を借りた集合体は段々思い出していた。自分たちが何故それを求め始めたのか。そうだ、自分たちは生きていても死んでいてもならなかった。死を認めず、生を拒み、自らに定められた生から死への道筋を踏みとどまろうとしたのだった。

ともすれば……なんと、愚かな存在だったのだろう、自分たちは。

ふと、ＢＧＭが終わる。流していた本人が意識を失う一歩手前で留めていた再生能力を、歌い始めた直後から再始動していたからだ。

ユージンと呼ばれた少年は、まだ血を失いすぎたせいで朦朧とする意識を保ったまま、一つの光景を見た。

無数の腕はその全てを切り払われ、舞い散る肉片の中、一人の男性が思い出した始まりの遺志に透明な泪を流し佇んでいる。正面には縦長い帽子をかぶった影が立ちはだかっている。

影の右手から伸びるただ一本の鋼鉄製ワイヤーが、男の首に絡みつく。一瞬『静止』した糸だったが、その『静止』を割り込んで糸が侵入し、男の首を一周した。

「――――」

ブギーポップがレフの耳元で小さく囁いた。その声はきっとレフにしか届いておらず、そして聞いた本人は獰猛な顔つきはそのままで無垢に微笑んでいた。ありのままをさらけ出したレフが見せたその表情は、きっと彼の主ですら見たことの無いもので、そして彼の障害の中でも最も美しいモノだった。

プツリ。

レフの首が切断され、地に時を止めた中で落ちていった。切断面は『静止』することも再生することもなく、ただ真っ直ぐに人ならざるモノが多量に混じった血を吹き上げ、首を遺した胴体はその場へ静かに倒れていった。

その光景を見届けた青年は、ある言葉を思い出した。彼らの世界では有名だったとある本にあった文章だ。とても印象的で、殆どの記憶が擦り切れた今でも彼はブギーポップの存在と共によく覚えていた。

結末――そこにはおそらく何も待ってはいない。

～・～・～・～

倒れたレフは暫く経っても起き上がる気配がなかった。それを見て安心したブギーポップは立ち上がり、そして振り返って両儀式を睨んだ。

「君、ぼくのステータスか何かを見たのか？随分と宝具だかなんだか知らないが、ぼくのソレについて知っているみたいじゃないか」

「あら、人をこき使っておいて覗き見の一つくらい許してくれないのかしら。私を透視能力防止のみならず、囮にも使うなんて酷いわ」

「あれは偶然だ」

両儀式を狙っていたレフは、根源へと至る道を利用してこの仮初の特異点を正式な一つの世界として成立させようと躍起になっていた。もし聖杯があれば、聖杯を上手く運用して魔力を集積させて世界を拡げるだろう。しかしレフは聖杯を持っておらず、また自分で作成することも出来なかった。だから魔術師の知識を元に根源へと至る肉体を持つ少女を頼りにしたのだろう。カウンター召喚の内容も予測していたに違いない。

「敵は様々な手段を手当り次第に用いていた。幻想種モドキを生み出しては殺害して死

を積み重ねることで神話の時代まで巻き戻そうとしたり、カルデアのサーヴァントを初めから分断することで個々に死を経験させその様子を観察しようとしたり、そして両儀式の肉体が持つ「　」を執拗に求めたりと一貫性が無い。という事は、敵の正体は何らかの集合体なのでは?という予想はあった」

ブギーポップは手をヒラヒラさせながら解説を続ける。

「しかしぼくの感知した〈世界の敵〉はどうも妙な反応を返していてね。この世界における敵とぼくのいた世界における敵が混じっている感覚がしたのさ。それで念を入れて監視の目を切って来てみれば案の定、彼がいた訳さ。まあ彼の方は前にも見逃しているし、今回も敵と言うより味方側についているらしいから放っておいたがね」

彼の名前を本人に尋ねると、本人は『パンドラ』と答えた。どうやら彼も複数人の能力と微細な意志が統合されて造られたサーヴァントらしく、今回のカウンター召喚は、元から扱き使われていたらしい抑止力から送られたこと、敵もまた複数から成る集合だったこと、そしてブギーポップという存在の縁がそれぞれ作用したらしい。

彼にも事情が有るらしいが、その件についてはブギーポップも黙っておいた。デリケートな話題だと察したからだ。そもそも贖罪の意識を失わないまま長年抑止力として動いてきた彼は記憶をすり減らしている。聞けたとしても明確な答えは期待できない。

その点はブギーポップにとって残念なことだったが、始末自体は上手く事が運んだようで概ね満足のいく結果となった。

〜・〜・〜・〜

あれからマンションを出て仲間と合流し、凡その顛末を全員に話したブギーポップは肉体の主導権を立香へ返した。そして同じく元の式へ帰った彼女はとても混乱していたのだが、ブギーポップを経由した伝言の伝言により事情を聞いていた立香のとりなしにより、三人目の両儀式のことは何とか誤魔化すことが出来た。

「こっちもあの後は大変だったんだけどなー」

疲れてぐったりベットに突っ伏した立香に、ヘリで座って足をプラプラさせたアストルフォが文句を言った。現在のカルデアは次の終局特異点に向けての準備でてんてこ舞いとなっており、職員が廊下を忙しなく動いているのだ。

「マンションから突如としてミニ魔神柱が溢れてくるし、みんな迎撃でてんてこ舞いだったんだよ？金ピカ賢王はまーた働き過ぎて過労死一歩手前まで行くし、静謐ちゃんが興奮しすぎて毒の汗まいたり、フランもフランで耐久が大変だったからそばでサポートしないとダメだったし。あの浅上だか深上だかはずーっと目を顰めてマンションを

眺めては『視力落ちたかしら』とか言い出すしさ……」

《その、頼むからマスターをゆっくり休ませてやってくれ。アストルフォとやら》

立香の腕時計からブギーポップの声が懇願した。

「いやまあ、それは分かっているんだけど。でもボクにだって許せないことがあと一つばかりあるんだよ!?」

そしてアストルフォは背後を指差した。

「女を引っ掛けてくるならともかく、こんなイケメンを召喚して連れてくるとは何事かーー!?」

アストルフォの背後には、困ったように笑顔を浮かべた一人の青年がいた。中性的な容貌に線の細い体付き。それでいて元は組織に造られた人形として暗殺等の任務を務めていた。

その名も、『パンドラ』である。

エピローグ／更なる脅威

「こんにちは。ブギーポップの世界から来ました『パンドラ』です。クラスはルーラー。以後お見知りおきを」

例の亜種特異点：克螺旋境界式　オガワハイムの核である未練の集合体を撃破した事で、五日経てば魔術王との決戦となるものの、今回働いた藤丸立香にマシュとその他同行したサーヴァント達は休息を取っていた。

勿論、毎回恒例の素材集めと聖晶石の回収は忘れずに行った。特殊な魔力の集積体である聖晶石はとても貴重で、こうして地道に敵を倒す他にリンゴマークやカラフル三角錐などが印刷された特殊なカードを使用するぐらいしか増やす方法はない。立香は謎電波を授受した。

今回の特異点で集まった聖晶石で召喚を行った立香は、まず初めにアサシンの両儀式を召喚することに成功した。しかも「こいつは何かポケットに入ってた」と言って聖晶石を召喚一回分返してくれた。立香は狂喜乱舞した。

そして返してもらった聖晶石を含めて十回連続で召喚を行ったところ、一体何の縁が出来たのか数えて十回目に『パンドラ』が出てきたのである。

「……ブギーポップを宿した君が召喚を行うことで、あちらの世界寄りの英霊が召喚されやすくなっているのだろう」
　ダヴィンチが目の前の新たなサーヴァントを眺めながら、ため息混じりに推測を述べる。
「これからブギーポップの世界の英霊に関われば、同じように召喚してしまう可能性も大きくなるだろう。全く……私も天才の端くれとしてこういうイレギュラーな事態はむしろ研究対象なんだが、人理修復を行っている今回のようなケースではあまり望めないと思うのだがね」
　やはり不満そうなダヴィンチに、パンドラは居心地が悪そうに肩を竦めた。
「あの、僕は要らなかったですかね。一応特異点での記録は残っていますし、僕の宝具はある程度役に立つと思うのですが」
《その通りだ、ダヴィンチ》
　立香の右腕からブギーポップが賛同する。
《彼の宝具は恐らく未来を予測することに特化している。カルデアには様々な英霊が居るが、直近の未来を正確に予測できる英霊は恐らく居ないだろう？彼はわざわざ抑止力が『未来を予測することで運命を回避出来る抑止の守護者』を求めた結果、造り上げられた英霊だ。その精度は折り紙付きだろう》

「そうか……ふむ」
ダヴィンチは少し考え込んでから、簡単な予言をしてもらう事を思い付いた。
「では、ついでだ。この場でその未来を予測する能力を使ってみてくれ給え」
「……あ、はい。分かりました」
どうせ要求されると思っていたのか、パンドラはあっさりと承諾した。紙と色鉛筆を要求して、近くにあった椅子に座り瞑想するような表情で目を瞑る。
色鉛筆のケースを開けて、ダヴィンチに「少しの間、僕と目を合わせていてください」と言った。そしてダヴィンチの目に映し出された何かを凝視しつつ、両手で紙に絵を描き始めた。
「青みがかった黒髪……パイプ……コート……ステッキ…」
ブツブツと呟きながら凡そ五分で絵を描き終えた。次に空気中の匂いを嗅ぐように部屋を一回りして、結論を下す。
「何だか感覚的に……煙たいです。何時ここに来るか分かりませんが、紙に描いた男がダヴィンチさんに会いに来ますね。しかもコーヒーを淹れるか何かします」
その言葉が言い終わるか終わらないかする内に、不意に一つしかない扉が開いて、そこから紫色の煙が侵入してきた。
煙が充満しているとなれば思い浮かぶのは火災だ。しかし警報は全く鳴っていない。

現代における火災報知器よりも更に高性能なセンサーがある筈なのに、煙に対して反応を返していない。

まだ机の上の絵をろくに見ていない状態での対面。その場にいた立香、マシュ、ダヴィンチ、ブギーポップ、そしてパンドラは警戒して煙から離れた。

紫色の煙の向こう側。そこから一人分の影が現れた。どうやら煙に対して咳き込んでいるようで、よろめきながら此方に接近してくる。

「ゲホッゲホッ、ゴホッ……済まない、ついパラケルスス君に乗せられて妙な草をパイプに詰めてしまった。『これなら副流煙も気にしなくても良くなります』とは言っていたが……ゲホッ、最新鋭のセンサーが反応しない程とは言え、これは吸えた物じゃないな」

扉の奥から現れた影は、紙に描かれた人物と瓜二つのサーヴァント。カルデアと何度か接触し、『人理焼却事件』をあるロンドンのキャスターに依頼され調査中のシャーロック・ホームズだった。

「ん？驚いた顔をしているな、諸君。そんなに私が現れたことが意外かね」

固まる部屋の空気をものともせず、済まし顔のままで中央のテーブルに歩み寄り、そこにある小さなサーバーで一人分のコーヒーを淹れ始める。

「大方、私の登場がいきなり過ぎて驚いているか、もしくは何かしらの予言的な物が当たって驚いているかどちらかだろう。違うかね？」

「……こ、後者の方です。ホームズさん」
　立香の答えにホームズは片眉をクイと上げた。
「成程。私のいきなりの登場に慣れたであろう君たちが新鮮に驚くようなもう一つの可能性を指摘してみたのだが、どうやら当たったらしい。いや、当たることは既に理解していたのだが。そこまで未来を正確に予測することの出来るサーヴァントが現れたのは、これからの君たちにとっても好都合ではないかね。何故警戒している」
　ポッドから注いだお湯が、芳ばしいコーヒーの香りを辺りに立ち登らせた。
「私の仕事は起きた事件の推理だ。真相こそ具体的に掴むことが可能だが、一方で対応が遅れて後手に回ってしまう。そして所謂予言的な手段はその逆だ。起こり得る事象を事前に観測する事で、対策を練ることが出来る。ミスター・リツカに分かりやすく説明すると、事後治療と事前予防の違いだろう」
　淹れ終えたコーヒーの香りをみて満足気に微笑んだホームズは、カップを口に付けて中身を口に含んだ。
「私達は人理修復の為にも手を尽くさなくてはならない。そうだろう？ダヴィンチ」
　その言葉には流石のダヴィンチも、口を噤むしかなかった。と言うよりも場の空気が名探偵の登場に呑まれていた。
「あの、この人は誰ですか？さっきから煙たいので換気したいのですが」

その中でもホームズを知らないパンドラとブギーポップは周囲の雰囲気に乗り遅れていた。
「おっと、これは済まない。初対面の相手もいるというのについ失礼をしてしまった。私はキャスター、シャーロック・ホームズ。訳あって直にカルデアに乗り込んできた全てを解き明かす者たる探偵を生業としている」
優雅にお辞儀をするホームズのコートは、裾から拡大鏡の付いた機会腕が幾つか覗いている。
「出自等がよく分からないミスター・ロマニには、特別に手を貸してもらったパラケルス氏によって眠ってもらった。もともと彼には働き過ぎるきらいがあるらしい。偶には熟睡するのも良いだろう」
シャーロック・ホームズ、どこかで聞いたことのある名前だな……とパンドラが考え込んでいる間に、立香は普段の自分を立て直してホームズに質問をした。
「何故ここに来たんですか？ホームズさんは確かレイシフトモドキは出来ても代償として霊基を損耗するはずです。ここまでレイシフトする必要があったのですか？僕らと会うのはもっと後でも良かったのでは」
その質問にホームズは親しげな微笑を浮かべる。
「初歩的なことだ、友よ。私の起源たる『解明（エレメンタリー・マイ・ディア）』は全てを解き明かす者としての性質を表

しており、そして私は突如として脈絡もなく現れた謎に対して大きな関心を持っている。私は先程、ここに邪魔するついでにカルデアの召喚記録を少々覗き見した」

その言葉にはダヴィンチは静かに驚いた。カルデアはその性質上、重大な情報に関しては凄まじいセキュリティを設定している。ダヴィンチ本人が監修しているので、もしそのセキュリティを破れるとすれば、それはダヴィンチと同じレベルの天才だけである。万能の人と呼ばれたダヴィンチの地頭と肩を並べる素晴らしい頭脳の持ち主、それがシャーロック・ホームズなのだろう。

「カルデアの召喚記録というのはトップレベルの機密情報だ。少々苦労はしたが、内容を閲覧させてもらった。聖晶石三個の原則を破り、聖晶石二個で召喚されたサーヴァントが居たという記録は特に注目すべき手掛かりだ。そして、この記録が私の来た理由に大きく関係している」

ホームズは部屋の壁沿いをゆっくりと練り歩き始める。柔らかなブーツの足音とまだうっすら残る煙、そしてコーヒーの香りだけが部屋に満ちている。

「諸君はこの世界を無限だと思うかね？もしそうならそれは大きな勘違いだ。陸に、海に、地球に、宇宙に限りがあるように、どれだけ世界を拡大解釈しても限界が存在する。例え無限にある平行世界を含めたとしても、無限は有限なくして存在できない。平行世界は数こそ無数だがその内容には限界がある」

ホームズは懐から聖晶石を三個取り出した。
「この世界におけるサーヴァントの召喚限界は、聖晶石で定義すると丁度三個分となる。例え微細に聖晶石を加工し、限りなく三個に近い状態に持って行っても召喚は不可能だ。この事実は私が世界その物の真実を一部暴いた際に明らかになった事で、裏付けも取れている……探偵は確証のない事を明かせないのだから」
ホームズはそこまで語ると突如として無表情となり、手元のステッキを持ち上げて先端を立香に――より正確には、立香の右腕にある魔術礼装に――向けた。
「聖晶石二個での召喚実験は必ず失敗するはずなのに成功した。これはつまり、無数にある平行世界も及ばないような別世界からやって来たサーヴァントということだ。それが君だ。たまたま構造が似通っているだけで……仮に世界という定義より大きな平行世界全てを纏めた一括りの次元があるとすれば、彼らは別次元からの未知なる来訪者とも言える」
鋭い目付きで魔術礼装を射抜くホームズは、そこで若干冷静さを欠いていた己を落ち着けるように、深く息を吐いた。
「彼らは私の築いていた真相への解明を全て無かったことにする存在だ。私の手に入れた情報では、別世界の住人というのは平行世界までなら身分を保証されるはずだ。しかし別次元の人間は世界のルールそのものが違う。サッカーのルールがベースボールに

通用しないことと同じようなものだ。そして……」

　そのタイミングで立香の礼装からブギーポップの立体映像が立ち上がった。冷たい表情で目を細め、映像越しのホームズに向けて殺気に似て非なる感情で胸を満たしている。

「そして、有り得ないサーヴァントが召喚された事によって、世界のシナリオは狂いつつある。既存の未来予測は別の次元から流入したルールによって役立たずの台本と化し、現時点で頼りになるのは最早魔術や科学の外側にある法則――辛うじて神性としての権能、強力な宝具、仕組みの不明な超能力、未知なる地球外生命体――と言ったところだ。いや、これらのモノですら『通用したら運がいい』レベルだろう」

《つまり、ぼくが召喚されたのは……》

　ブギーポップが口を開くと同時に、ホームズが結論を下した。

「ミスター・リツカに棲むサーヴァントは突然やって来た訳では無い。直前に来た脅威に対してのカウンターとしてやって来た存在だ。そしてそこの未来を予測するサーヴァントも同様だ。これまでの記録を鑑みるに、元の次元で世界を救う役割を担っていた彼の方が優先的に召喚されたのだろう。そしてこれから訪れる事件への対策として抑止力が準備した未来への道標が、もう一人の彼だった」

　ホームズが語る推理は必ず決定された事実であり、間違っている事は有り得ない。少

なくとも彼の持つ起源も、彼を原作とした小説も、彼の推理が間違っていた事が殆どない事を裏付けている。そもそも内容からして信じられないようなことばかりだが、ホームズは誇大妄想を口にするするタチではない。

だからこそ、内容に含まれた重みが場の全員にのしかかった。

中でも最と厳しく、険しい顔をしていたのはダヴィンチである。

「……何かしらの危険があればカルデアのシステムを通じて察知されたはずだが、根本から違う存在だったことが原因かい？」

ダヴィンチの発言にホームズはちらりと換気口の辺りに視線を向けた。残留していた紫色の煙がまだ吸い込まれている。

「その通りだ。そこの二体はこちらの次元から受け入れられたからこそカルデアの装置でも観測できるような霊基を保っているが、初めから敵として来たのであれば、その特性を利用しない手はない。敵はこれから先の未来のどこかで姿を現すだろう」

続いて、マシュが到底言葉に現せないであろう様々な衝撃に足元をふらつかせつつ、尋ねる。

「順序が……おかしくないですか？ブギーポップさんが来るまで次元と次元は繋がって無かったはずです」

「……君は体調が良くない筈だ。椅子に掛けるといい……。さて、ミス・キリエライトの

質問に関してだが、敵の侵入はもっとずっと昔から始まっていたということだ」

マシュの顔色がどんどん青ざめていき、立香が心配そうに近くに寄り肩を支えた。その間にホームズは中央のテーブルから椅子を引き摺り出し、立香と一緒に手助けしてマシュを座らせた。

マシュの状態を軽く確認し、ダヴィンチにこの後直ぐに医療室へ連れて行くように伝えると話を続けた。

「敵が侵入しようと足掻いていることを察知した此方の世界は、対抗策として侵入した瞬間に無理やりパスを繋げてカウンター召喚することにした。こちらから次元を乗り越えるのは不可能で、しかも向こうの次元はこちらとルールは違っても性質は一部似通っている。次元同士の戦争は望むべくもないことだ。侵入してきた敵のみを排除する為に、敵がやっとのことで侵入した直後に全ての事象を調節したのだろう」

その言葉に立香は雷に撃たれたような心地がした。確かに自分は日頃から貴重な聖晶石三個を消費してサーヴァントを召喚するシステムを改善したいと思っていたし、その事をダヴィンチやロマニに相談したこともある。だが、聖晶石二個で召喚しようなどという試みは無駄だと考えてもいた。あの日、突然思い付いてダヴィンチに打診しなければ実験なんて言い出すのも馬鹿らしいと考えていただろう。

「世界は絶えず変化している。そして敵は未だ姿を表していない。今回の件は直前に控

えた魔術王の脅威を遥かに上回っている。ゆめゆめ油断しない事だ」

手元のコーヒーを残さず飲み干したホームズが一息つくと、足元から薄らと身体が透け始めた。手元のコーヒーカップも指をすり抜け、床に落ちて粉々に割れてしまった。

「危急の事案だった為に、霊基を著しく消耗してしまった……この身体は最早使い物にならない。私は考えた事を予想で話すのは性にあわないのだが、これだけは言っておく。これから先に必ず再召喚されるであろう私自身に事情が伝わるように、出来る限り詳細な記録を作っておいて欲しい。過酷な旅路を往くには、未来を観測するだけではなく事件を推理する探偵も必要だ……それにドクター・バベッジからの依頼を完遂出来なかった。探偵はお膳立てをしたとしても、事件が解決するまで生きて見届けなくてはならない。だから君たちが魔術王を倒し世界を救う事を――」

願っている――。

ホームズは最期に探偵らしくない願い事をして、黄金色の輝きとともに消失してしまった。

砕け散ったコーヒーカップに、立香はこれから先に訪れる運命を重ねて身震いした。

～・～・～・～

彼らは魔術王に立ち向かい、残酷な真実と予想外の結末を迎えることとなる。
初めから存在していた運命とは違う道筋を辿った立香は、世界を救うと同時に「魔術王を遥かに凌ぐ脅威」に立ち向かう決意をする事となるだろう。

『人理再編』が間近に迫っていることも知らずに。

「もしも君が善良たろうとするなら、未来などにはかかわらぬことだ。　それはほとんどの場合、歪んだ方向にしか向いていない」
――霧間誠一「ＶＳイマジネーター」より引用

終局特異点・冠位時間神殿　パジュリー・オブ・ソロモン
夢現／イマジネーター

　突然だが、藤丸立香はとんでもない頻度で夢によって別の世界へ行っている。行先は大抵契約したサーヴァントの心象世界や思い出であり、そして英霊として昇華される程に過酷な人生を経たサーヴァントの道筋は敵に満ちている……要するにそれを再現した夢の世界もまた危険なのである。
「フンッ！セイッ！トオゥ!!……また逃げるつもり？フフン、根性だけは認めてあげるわよ根性だけは！でも私の拳を避けてばかりじゃ決着なんて永遠につかないわよ！かかってこいやァ!!」
「あの、マルタさん。タラスクはもう虫の息だと思うんだけど……」
「なーに言ってんのよ、マスター！いい？一度喧嘩を始めたら、どちらかが降参するまで闘うのが礼儀ってモンよ！根性ナシのタラスクを教育し直す為にも、ここでキッチリ拳を交わしておかないとダメ！」
　ギャオオオオオオオオオオオオオオオオーー……
「ほ、ほら！もうこれ降参してるってマルタさん！喧嘩ストップストップ！」

「まだまだまだまだァ！神からの教えを、喰らいなさいッ!!」
「ひたすら逃げろ、タラスクゥゥゥ!!」
「……何故、貴方がいるのですか。マスター」
「いや、僕も何でいるのか分からないよ……。どうせまた夢の世界に飛ばされたんだろうけど。ところでココは何処？」
「……成長し切った〝私〟が閉じこもっている神殿です」
「あー、はいはい成程……って。つまりここはゴルゴーンの!?」
「シーですよ、マスター。それに、マスターの味方は私だけではありません」
「……貴様、私を忘れているな？」
「あれ!?ゴルゴーンが封印されているのにゴルゴーン……何で？」
「詳しい説明は後で。今は目の前のアレに立ち向かわなければ」
「ウルクの時よりも更に強大な〝私〟だ。目を合わせるなよマスター。これまでとは比べ物にならないぞ」
「ペルセウス！ペルセウスは何処ー!!鏡の盾貸してーー!!」
「私の剣技は、英霊となった事で生前より格落ちしてしまっている。架空の存在に間に合わされた剣技とはいえ、マスターは伝説よりも弱く感じられる私に疑問を持ったのでは？」

「い、いや……初期の頃は最前線で活躍してくれたし、そんな事は考えていないけど……」
「やはりそうだろうな。かの宮本武蔵が遺した逸話に比べ、巌流・佐々木小次郎の如何に弱いことか――」
「やだこのサムライさん話聞いてない」
「だからこそ私は、より強くならなければならない！ここは私が毎日通っていた海岸。燕を何度も何度も追いかけ私が編み出した剣技、それが〝燕返し〟だ。つまりここでまた燕を斬れば――」
「……ん、ひょっとしてアレが燕？」
「その通りだ、マスター」
「……いや、どう見てもワイバーンというか、シルエットがデカすぎるというか」
「古代日本の神秘を甘く見すぎでゴザル」
　フシュウーーー……
「いやいや、アレとかドラゴンだって！何でドラゴン!?佐々木小次郎は竜殺しの英霊じゃないでしょ!?」
「行くでゴザル行くでゴザル！この苦難を乗り越えればレアリティも上がって☆1アサシンから☆5セイバーに成ることも夢ではない!!」

「立香は謎電波を受信した!!」

――上記のケースは、残念ながらマスターが忘れてしまった内容だ。しかしもし記憶に留めていた上で当該サーヴァントと意識を共有すれば、サーヴァントの意識が変化すると同時にこれまで様々な理由で封印されていたスキルや宝具が強化される場合がある。

無論、意識の改変自体は現実世界でも有り得る事で、立香はマスターとして人理を修復するためのみならず、度々サーヴァントの為にレイシフトしている。そうして偶に入手できる聖晶石や素材を回収し、サーヴァントとの絆を含めるその姿は勤勉そのものである。

だからだろう。立香は今見ている夢がよく分からなかった。

「……なんだこれ」

立香の目の前には、大量の花が咲いていた。何時ぞや垣間見た花の魔術師のそれではない。鮮やかでピンク色だった花々とは違って、花弁の一つ一つが清廉な白を保っていた。立香は植物に関して一般的な知識しか持っていないが、茎にトゲが付いている物があるので恐らく薔薇の仲間ではないだろうか。

（……それにしても）

それにしても、立香は先程から大きな違和感を持っていた。無論、自分だけで見る普

通の夢や、サーヴァントとの絆が深まる事で見る夢とは様子が違うこともある。

しかし、それだけではない。この花達は一輪一輪個性を持っているのだ。例えば立香の右足が触れている花は四輪あるが、ある一つは茎にトゲが無く、またある一つは花弁が他より大きい。そして残る一つは風に少し吹かれただけで大きく揺れるので、立香が不思議に思って少し引っ張るだけで土壌から根こそぎ抜けてしまった。どうやら根がしっかり張っていなかったらしい。

「君には植物を大切にしようという思いやりはないのか?」

不意に聞こえてきた声に、立香は慌てて花を土に埋め戻した。

「……それはそれで少々深く埋めすぎではないかね。先程根が張っていなかったことを考慮すれば、しっかり埋めたくなる気持ちもわかるがね。その花の持ち主は周囲に流されにくくなる代わりに、あらゆる物事に存在する流れについていけずに人間関係が軋んでしまうだろう」

そこで立香は、声だけが聞こえてきて声の主が見当たらないという奇妙な現象に気付いた。

「ああ、これは申し訳ない。今の君が居るのは私の世界だ。単なる心象世界ではなく、かといって花だけが意味もなく咲いている空間でもない。文字通り私が成功した世界だ」

ここまでは少し誇らしげになった声だったが、続く言葉は一転して沈んだ雰囲気を醸

し出していた。
「そうとも。私が成功した……成功した故に失敗してしまった世界。私を止めてくれる筈だった誰かを失った世界線だ。あの死神は、きっと周囲が思っていた以上に不安定な存在だったのだろう。ふとした枝分かれで人類が終わってしまう位にはね」
「……ここは、終点……世界が終わった場所という事ですか？」
　ここで立香は初めて声に話しかけた。
「ああ。世界を『人類が存在しているモノ』と定義すればそうなる。私は別に人類を終わらせるつもりは無かったのだが。むしろ逆――人類を次のステージへ進化させるつもりだった。しかし、結果がこれさ。みんな花になった上に、私の目的は果たされなかった」
　少なくとも、声の主の目的が人類を花に進化させることでは無かったらしい。そこで立香は考えた。この光景をより完成に近づけるとすれば、何が足りないのか。この世界は何処が歪なのか。単に花が満ちている空間であれば以前にも見た。だからこの世界は――
「――つまり、この花の一つ一つが人間だった。という事ですか？」
　立香が導いた結論に、声の主が息を呑む気配がした。
「成程……世界を救う一般人、という認識は正直眉唾だったが、やはり多くの人間や英霊

と関わることで人間に対する洞察力が上がっているのかもしれないな」
　立香は早く声の正体を知りたかったが、それを見透かしたのか声の主はおどけた口調に切り替えた。
「そうカリカリするな。君が現状に危機感を持っているのは分かる。私は正体不明の何某。現在のカルデアは正体不明の敵がいつ来るか怯えており、そして私は自称人類を終わらせたことがある前科者だ。警戒しない方がおかしい」
　立香が虚空を睨むように上を見上げた。世界は青空が果てしなく広がっていて、雲ひとつない上に清々しく不純物も一切含まない綺麗な風も吹いている。
　しかし、それは裏を返せば人間の生きていた痕跡が丸ごと消失しているという事だ。人の紡いだ物が折り重なった結果として出来上がった世界は無に帰っている。初めから人類など存在しなかったように。
「正確には、花それぞれに人としての意識が宿っている。とてもとても小さく、薄くはなっているが、それでも個性は失っていない。だから表面上の個性は保たれ、姿も花で統一されている」
　……立香はふと、あるサーヴァントに聞いたことを思い出した。そのサーヴァントの語るところによれば、数多の世界線で聖杯の使用により人類の救済を企てた者がいたという。実際、その計画に必要な魔力量を聖杯は有していて、もしその計画が成功してい

れば人類全体の不老不死化とも表現される『第三魔法』が実現していたらしい。
全ての人類が肉体を持たず、魂だけで存続していく状態――。
今、立香が見ている花畑のような世界になっていたのだろう。
「君も思うところがある様だね」
声は立香の表情を見て、かねてから考えていた事を提案した。
「私は失敗した。初めから世界に望まれていない変革を企て、試み、そして全てを失った。私を愛していた人も、私を尊敬してくれていた人も、私を受け入れてくれていた人も、全てだ。今では『あの時こうしていれば』と考えるばかりで、過ぎ去った日々を変えることなんて出来やしないのについ想像してしまっている」
だから。
「私にチャンスをくれ。ブギーポップ」
その言葉に、立香の隣から音もなくブギーポップが姿を表した。
「あの時のぼくは別に不安定でも何でもなかった。単に君を陰で操っていたもう一人が足止めしてきただけだ。お陰でその世界線におけるぼくは、役割を果たせなかった」
「――そうか。やはり今回の件には彼女が……」
二人の会話から置いてけぼりにされた立香は、内容からどうにか声の主が味方につく側だと予想した。しかし、予想とはまた違った展開も加わることとなる。

「彼女の過ちに私が加担したことは事実だ。だから、私がこの件に協力する代わりに一つ、頼み事をしたい」
「……それは?」
追求したブギーポップに、声の主が告げた。
「私を殺して、この無意味な世界を終わらせてくれ」

〜・〜・〜・〜

人は進化する生き物である。
そもそも生物は皆、進化を重ねることで環境に適応してきた。生物はその根源において生きることを目的としていて、それはつまり生存本能と置き換えることも出来る。
一方で、人は人として環境に適応するだけでなく運命に抗おうとして進化する。人としての性質を保ったままで、一人一人が考えるより良い世界の為に進化を試みる。
しかし、その人における進化は世界のバランスを根こそぎ崩してしまうことがある。地球として、あるいは人類全体として守るべきルールに抵触してしまうことがある。
ならば、世界は突然降って湧いた世界の危機に、〝世界の敵〟にどう対処するのか……当然、真っ向から否定し抹消するしかない。

二つの次元が用意した手段はそれぞれ異なる。
一方では人類の成す偉業をカタチにした英霊を召喚し、
一方では全ての世界を護る意思を一人の少女に宿した。

二つの次元が交差するとき、必然として彼らはそれぞれの敵に立ち向かう事となる。

悪は、誰か。正義は、何処か。

〜・〜・〜・〜

立香がここ数日でも格別に酷い悪夢から目を覚まし、清潔なベッドから身を起こすと、隣のベッドではマシュが仰向けになって荒い息をしながら苦しそうに眠っていた。
「やあ、よく眠れたかい？立香君」
マシュのベッドの隣では、ダヴィンチが頬杖をついてバイタルを表示したモニターを眺めていた。そこに表示されている数値は、マシュの寿命が残り少ないことを指し示していた。

「ごめん、ダヴィンチちゃん。いつの間にか寝てしまっていたみたいだ。交代までまだ時間があったのに…」

「気にする事でもないさ。それに君は人間である一方で私はサーヴァントだ。休養は取れる時に取るべきさ」

そう言って微笑むダヴィンチだが、立香はその顔に一種の疲労を見てとった気がした。恐らく、この医務室で立香が付き添うことを宣言するまでずっとマシュ専用の調整室に居たようなので、出来うる限りの手を尽くそうとしているのだろう。

マシュの寿命は残り少なく、そして本人は最期まで一緒に闘うことを希望している。本当なら限りある寿命を一分一秒でも伸ばす為にカルデアへ留まるべきかも知れないが、最終的には立香もマシュの希望を叶えたい旨を伝えた。

それからというものの、立香はずっと戦闘ルームか医務室にしか来ていない。三日後に迫った最終決戦に向けて、着用型の魔術礼装を少しでも身体にならそうとしているのだ。今の立香が着ている魔術礼装は、初期の頃からずっと愛用しているカルデア制服で、もし備わるスキルが身体に適応している割合をレベルに表すとすれば、まだ８といったところだ。

正直、寝る間も惜しいと思っていたのだが。

「ダヴィンチちゃん。さっき夢を見たんだけど、どうやら新しい次元からの来訪者が味

方になるらしい」
　立香の言葉に、マシュのベットを挟んだ反対側からダヴィンチが身を乗り出す。
「それは、本当に味方かい？ブギーポップが直接会話したのか？」
《その点は抜かりない。ちゃんと確認は取った》
　立香の礼装から声が聞こえた。
《どうやら、君達が立ち向かう人理焼却事件の犯人とやらにも何かしら思うことがあるらしい。その時にも手を貸してくれるそうだ》
「そうか……分かった。後で私に詳細を伝えてくれ。そろそろロマニと一緒に直接検診する時間だ」
　立香が検診の邪魔にならないように部屋から出ると、ブギーポップが囁きかけてきた。
《君は随分疲労しているように思える。無茶をしてもいい事は無いぞ》
「いや、それは分かっているんだけど……礼装を馴染ませるのだけは僕が純粋に努力するしかないんだ。何せ僕自身が使いこなせなければ意味が無いんだから……」
　そう言う立香の顔色は悪い。
　これはどうしたものかと思い悩んだブギーポップは、瞬間、立香の精神と入れ替わった。覚えのある危険な気配を察知したからだ。

目の前に立つのは男だ。背が高く、顔が整っており、見える範囲の肌は明るい緑色で、ピエロの服装をしている。微笑みを浮かべて片手にクーラーボックスを提げた青年は、一体何処から現れたというのか。

青年は首をかしげて、左手に抱え直したクーラーボックスから見るからに美味しそうなペパーミントのアイスを取り出した。

「やあ、そこの君。アイスはいかがかな?」

夢幻／〝イマジネーター〟

「あれ……？」

気づくと立香は廊下に立っていた。ぼんやりと空を見つめたまま、口の中に広がる爽快なペパーミントの風味とその爽やかさに隠れ潜みながらも優しく広がる甘味を味わっていた。

このようなアイスは全く食べたことがない。カルデアの職員や料理の得意な良妻系（あるいはキュケオーン系）サーヴァントが作ってくれるデザートのどれよりも美味しい。冷たい食感と味わいが企てた素敵な侵略は見事なまでに成功していた。

ただ、大きな難点がある。自分が何処からこのアイスを手に入れたのか分からないことだ。

（――ま、いっか）

この心の奥の奥まで届いてくるような素晴らしく美味しいアイスを放っておくことなど出来ない。このアイスがもし危険な物だったとしても、マシュの御蔭で対毒体質で

ある上に同じ体で同居しているブギーポップがいる。大事にはならないはずだ。
そして無心にアイスを頬張る立香の心から、現状に対する過大なストレスが溜まっていた疲労と共に抜けていった。まるで立香の口内で甘く溶けていくペパーミント味のアイスのように。
《……》
その様子を、心象世界の中に潜んでいたブギーポップが複雑そうな表情で眺めていた。

〜・〜・〜・〜

ペパーミント味のアイスを食べて大満足した立香は、一度自分の部屋に帰って寝た。最近の立香は無理のし過ぎで睡眠時間を極限まで削っており、目の下には薄らと隈が出来ていた。
一度しっかりとした睡眠を取るべきであることは、ブギーポップも承知の上で何度か声を掛けていた。ブギーポップからしてもマスターたる立香が無理をするのは見過ごせなかった。
（しかし……まさかアイツも来るとは思わなかったな）

恐らく今頃は、カルデアの全員が出自も不明なアイスを食べているのだろう。今の彼――軌川十助は、既に世界のシステムにも近い存在となっている。人の痛みと同化することで誰にも自分が居たことに気付かせず、自らの作ったアイスで人の持つ痛みを消す能力。

その本質は、彼の類まれなる能力〝人の痛みを知る〟ところにある。故に彼の『気配遮断』にも近いスキルは精神的なもので、このカルデアの場合、精神攻撃に絶対的な耐性を持つブギーポップ以外は彼の能力を無抵抗に受け入れてしまう。

危害を加えてくる存在では無いものの、もし敵に見つかり利用されてしまえば大惨事は避けられない。それこそカルデアに所属するサーヴァントを霊基ごと溶かしてくるようなアイスを提供されれば、カルデアは全滅する。魔術王を待つまでもなく人類の滅亡確定である。シュメル熱よりタチが悪い。

そもそもあのアイスに毒が含まれていないので、マシュのお陰で高い対毒体質を誇るはマスターですら全く抵抗出来ないだろう。味を経由した催眠術……超能力……何れとも断定し難い、とてつもない力だ。

（……どうする）

ブギーポップでも彼を捕まえるのは至難の業であり、故に放置しておくというのも一つの選択肢だ。ブギーポップでも手出し出来ないという事は、敵もまた手出しは出来な

い筈だから。

しかし味方という確証がないままで放置するのも如何なものか。ブギーポップですら藤丸立香の肉体に憑依しているので自由意志で行動できない。勝手に表出して追い詰めようとしても一人ではまず取り逃がすだろう。そういう手合いだ。

彼をこの『深陽学園』に連れ込めば一対一でもっと話せたに違いないのだが、残念ながら宝具を展開しようとした直後にアイスを押し付けて逃げられてしまった。恐らく軌川十助も、ブギーポップが藤丸立香に潜んでいたとは思わなかったのだろう。随分と慌てていた。

「あー、美味しかった。今まで食べた中で一番美味しいアイスだったよ……アレ?」

色々とブギーポップが考えている間に、ペパーミントアイスを食べ終わった立香が不思議そうな顔をした。

《どうした、マスター》

「これ、どうやら食べ終えてから初めて判るメッセージになってたみたいだけど……このアイスって本当に誰が作ったんだ?」

アイスのコーンには明るい緑色をメインとしたポップなデザインの包み紙が巻き付いていたのだが、表面からは見えなかった裏側にはこう書かれてあった。

カルデアのマスター殿
突然のアイスに驚かれているでしょうが、このアイスは最近疲れ気味のマスター殿への挨拶代わり兼、差し入れです。
僕は個人的に人間が好きな訳でも嫌いな訳でもありませんが、マスター殿の事は近くで見ていて気に入りました。
これからもアイスを陰ながら提供していきますので、よろしく。
ペパーミントの魔術師より

「……これ、ブギーポップは心当たりある？」
立香が文章をしばらく眺めてから聞くと、心做しか少々気の抜けたような調子でブギーポップは呟いた。
《まあ、誰だって構わないだろ。別に。味方ってことで良さそうだ》

〜・〜・〜・〜

その日のカルデア職員たちは、魔術王ソロモンとの決戦を前にして実に落ち着いた気分になっていた。全員が何者かに渡されたアイスを完食しており、あのダヴィンチすら

その味に一種の天才性を認めていた。曰く、「ミケランジェロの彫刻みたいな味わいだった」らしい。

一方のＤｒ．ロマンことロマニ・アーキマンも、何処か悲愴な決意を固めていた表情で様々な仕事に取り掛かっていた筈だったのだが、アイスを食べた後はどこか難しい顔で考え事をするようになった。その様子を見たカルデア職員曰く、手に嵌めた指輪を見つめながら物思いにふけっているらしい。

突然だが、仮にあなたがアイスを一口食べたとしよう。その一口に、人生を変える力はあっただろうか。当然のことながら、一般的なアイスにそのような効果は無い。口の中で淡く溶けて、それで終わりだ。

しかし、かの世界にはアイスで世界を変える力を持った男がいた。

彼を造り出した組織は、緑の肌と青色の血を見て〝失敗作〟と判断し、

彼を受け入れた老人は、自らの息子として受け入れて世間から匿い、

彼を引き入れた富豪は、その能力なら世界を支配できると断言した。

組織名、ノトーリアスＩ．Ｃ．Ｅ

戸籍名、軌川十助

通称、〝ペパーミントの魔術師〟
彼の力ははるか遠くの異なる世界においても、多くの人生に魔法を掛けようとしていた。

〜・〜・〜・〜

カルデアが徐々に接近していく中で、ただ一人カルデアを悠々と待つ存在が居た。
いや、コレを果たして一人と数えてもよい物だろうか。
七十二柱の魔神から成り、人類全てを焼却し時間遡航にて新たな世界の創造を図る獣。
その名を人類焼却式：ゲーティア。魔術王ソロモンの名を騙り、死後を辱めた者の名だ。
彼は自らの第二宝具たる大神殿の展開を終え、魔神柱の全てを監視塔などの役割を決めたうえで配備し、互いに引き合い近づいてくるカルデアを待っていた。
『――思えば、永き道のりだった』
王の姿を借りたまま玉座に腰かけた彼は微睡む。

王の下で多くの悲劇を、惨劇を、眺めて来た。
自分は人類を救済し、支えるために生み出された存在だった。
しかし愚かなる人間は、そして人間からかけ離れた立場に居た王は、どちらも己を顧みることなく存在し続けた。
どうあっても許せなかった。どうあっても変えられなかった。人類は歴史全てをたどっても悲劇を終わらせることは無く、人類を救済する力を持った王は、全てを知りながら何もしなかった。
だから私は、俺は、僕は、立ち上がったのだ。人類全てを焼却するために。
『――だというのに、無駄な足掻きをするものだ』
人類を滅ぼす際に、ほんの少しだけ手違いがあった。滅ぼした当時、人類の総数は約七十億。中には類まれなる能力を秘めた人材もおり、それらを含めた全てを丸ごと焼却した筈だった。
しかし、一つのミスが見苦しい悪あがきを許してしまった。たった一人のマスターによる特異点攻略。確かに七つある特異点の全てを修正すれば自らの膝元に辿り着くのは可能であり、現に彼らは途中で発生した微小な特異点も含めた全てを念入りに消去してきた。
その旅路を眺めるのは、実に滑稽だったと言わざるを得ない。勿論、不快感もあれば

無駄な足掻きに呆れる気持ちもあったが、やはり結末が決まっている上で諦めない彼らの綱渡りは、悲劇的な喜劇だった。
『これにて我が偉業は達成される――』
カルデア以外に進めていた準備は整った。後は人類最後のマスターを始末すれば終わりだ。

〝――――――――――。〟

『……本当に、そうか？』
本当に、カルデア最後のマスターを始末すれば終わりか？
自分は何か、大きな見落としをしてはいないだろうか。
仮にも人類最後のマスターだぞ？あのティアマトを退けたマスターだぞ？
自分は少々……油断しすぎているのではなかろうか。
『……念には念を入れるべきか』
彼が万が一の場合に思い当たった瞬間、何者かの気配を感じた気がした。
『……誰だ』
振り向くも、そこには誰もいない。感じたと思った気配も霧散している。

仮にも彼は魔術のほぼ全てを支配下に置く魔術王だ。勘違いという可能性はそれこそあり得ないのだが。

〝――――――――。〟

『――まあ、あの連中がここまで来るのだから、それ位の偶然もあり得るか』

簡単に奥の手を整え、再び彼は目を閉じた。

背後には、今にも足が地面についてしまいそうな少女が微笑んで――。

～・～・～・～

カルデアという組織は、正式名称を『人理継続保証機関　フィニス・カルデア』という。元々は１００年後の未来を観測することによって、世界に向けて人類の未来を保証する為の機関だった。

しかし、魔術王及びその手先による人理焼却が発生。特異点の修正を行うことにより、人類の未来を取り戻すことが目的となった。

度重なる不運。

類まれなる幸運。
繰り返される惨劇。
立ち止まらない決意。
それらを経て藤丸立香は成長していき、気付けば数々の特異点を修正していた。傍らに立つのは始めこそマシュだけだったが、特異点を巡り縁を繋げることで数多くの英霊が立香を支えてくれるようになった。
その旅路も、これで終わり。
「どうせなら、この結末を笑って迎えよう」
そう言って顔を上げた立香とマシュの後ろに、カルデアに待機していたサーヴァントの全員が並んだ。全員が立香と共に数々の戦場を戦い抜き、絆を深めた者達だ。出し惜しみはしない。
『防衛の為に最低限の戦力は残してある――が、恐らく魔術王はカルデアに意識を割かないだろう。向こうの出方を確認したら、残りの戦力も出発する』
ダヴィンチの声が響く。これ程までに戦場が近いとなれば、全体に向けての連絡となれば通信よりも拡声器の方が効率が良いからだ。
『最終的な敵たる魔術王は心臓部に、そして心臓部を護る敵のルートが合計七本だ。その全てを全体的に潰し、玉座への道を拓く。じゃあ、みんな。頑張ろう！』

その合図と共に、カルデアの一団は一斉に足を踏み出す。最期の戦いへ向けて。
盾を構えたマシュは、ふと昨夜に見た夢を思い出した。魔術王ソロモンは短命でありながら閉鎖的な施設で一生を過ごす事となったマシュを、貴重な観察対象として捉えていた。
魔術王は〝遍く人類が永遠の幸福を手に入れた世界〟を提示した。
全ての人が争いを知らず、死ぬことに怯えず、誰もが隣人を愛している世界。笑顔がデフォルトとなり、悲しみや怒りの表情が消えた世界。
その世界に対して、マシュは一つの答えを出した。望むなら短命だった人生からこの〝幸せな世界〟に導いてあげよう。そう言う魔術王の誘いを真正面から跳ね除けてみせた。
曰く、「死は駆け抜けていくもの」だから。
マシュの決意に満ちた顔を見た魔術王は、ため息を吐いた後でふと無言で何かに聴き入っているような表情になった。

〝――――――。〟

『……短命なる者よ、もう一つの可能性を見せてやろう』

魔術王が次に見せた、第三の選択肢。

それは〝幸福な世界〟とはひと味違う、もしもの可能性。

〝平凡な世界〟だった。

平凡／マシュ・キリエライト

マシュ・キリエライト。

人理保証継続機関カルデアにて、西暦２０００年にデザインベビーとして生まれる。英霊と人間を融合するデミ・サーヴァント実験において必要とされた魔術回路と無垢な魂を備えており、実施された召喚実験においては英霊ギャラハッドとの融合に成功。エクストラクラス：シールダーとなるも、元からデザインされた命ゆえに３０年しかなかった寿命が、長く見積っても１８年となってしまう。

カルデア最後のマスターである藤丸立香と共に特異点を巡る戦いの中で、寿命を更に損耗させてしまう。第六特異点を修正した時点で、彼女の肉体はほぼ限界に達していた。変異特異点であるオガワハイムに乗り込む際も、Ｄｒ．ロマンからの進言を丁寧に退けて同行していた。

彼女の人生は、半ば空白で満たされている。生まれてから１４年ほどは一人きりの無菌室で寝たり起きたりを繰り返すだけだったから。

その空白を埋めてくれたのが、特異点を巡る旅路だった。

――ある日、彼女は人生における先輩でもある立香に、日本での生活を聞いたことが

あった。

立香によれば、日本人のうち魔術を知らない一般人は、戦いを一切知らず、戦争を疎み、平和を享受して生きるのだという。

小さい頃から学校に通って、色んな人と交流して、学びたい事を学び、世界の裏側に満ちる恐怖から守られて生きていく。

ああ、それは――――

生まれた時から短命で、特異点を通じることでしか外の世界を知りえなかった私に比べて――――

なんとも――――

『羨ましい』

～・～・～・～

ジリリリリン……

ジリリリリン……

「う、うーーん…」

マシュは目覚まし時計の音で目を覚ました。いつも通りの朝だ。早朝の空気は少し肌寒くて、衣替え前の薄いパジャマでいると布団から出たくなくなってしまう。

「……マシュ。マシューー!もう朝よ。学校に遅れても母さん知らないわよ!?」

「えー……かあさん、まってー……」

「フォウ、フォウフォウ（てしてし）」

柔らかな毛並みがついた肉球に頬を押される。

「あれ、フォウさん……起こしに来てくれたんですね……」

まだ寝ぼけなまこの頭で時計を見ると、午前6時半だった。いまから身支度して、朝食を食べて…となれば、結構ギリギリの時間だ。

「しまったー!フォウさん、メガネ何処ですか!?」

わたわたと準備をして、髪を整えて。階段を掛け下りるとそこには銀髪を振り乱しながら慌てて準備をする母親の姿があった。

「えーっと、卵焼きは何とか出来たから次はおにぎりしないと。アレ!?でも今チンしているキャベツ出さないとサラダが間に合わない!?」

エプロン姿で危なっかしく包丁を握る若奥様（？）のオルガマリー・キリエライトで

ある。

「ああ、もう！味噌汁作るのに手間が掛かりすぎよ私！でも料理教室のエミヤさんは確かこうやってワカメを……しまった！まだ入れるタイミングじゃなかった！」

キッチンにたつ姿はいかにも手伝わなければならないような雰囲気だ。しかし娘であるマシュは、誰かが手を出さなくともキチンとした料理を最後に仕上げてくれることを知っている。

「マシュ、もう着替えた？着替えたならコタツあっためといて。あと髪を梳いておきなさい。寝癖つきっぱなしじゃない」

的確な指示をくれる母親は、さながら我が家の司令官である。マシュは電気で温まる仕組みのコタツの電源を入れて、洗面所で髪を梳いた。片目を隠すボブヘアーというヘアスタイルは、あるゲームのキャラクターを見てからお気に入りの髪型となった。

「ん？マシュはやっぱりその髪型かい？可愛いけど視界が遮られて苦労しないのかい？」

髪型を整え終えると、今起きましたと言わんばかりに髪の毛を爆発させた父親――ロマニ・キリエライトが入ってきた。栗色に近い髪色はよく珍しがられるのだが、せっかくの髪も整えなければ見た目台無しである。

「父さん……その、髪型直すよね？」

「ん？ああ、今日は時間が無いからこのまま行こうかなーと」
「ダメ！ちゃんと直していかないと」
マシュはため息を吐いてブラシを取り出すと、父親の髪型を直して何時ものふわりとしたポニーテールに整えてあげた。
「おお！流石我が娘。とっても綺麗な仕上がりじゃないか！」
喜ぶ父親に微笑みかけたところで、
「コラァ！マシュにロマン！早く朝ご飯食べないと遅刻するわよ！」
母親が雷を落としてきた。

～・～・～・～

マシュが家から向かったのは、私立カルデア学園である。とても個性的なメンバーばかりの学園で、生徒はみんな曰く付きのプロフィールしか持っていない。もっともカルデア学園は元々海外からの留学生を中心に集めている学び舎なので、国内外から変人が集まるのも無理はないような気もする。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
マシュは通学路を走っていた。時間的には歩いてもギリギリ間に合うのだが、マシュ

にとっては朝のランニング替わりでもある。朝方にひと汗かいておくと、その日一日を気持ちよく過ごせるのだ。
「あれ？マシュじゃーん！おひさ～」
「あ、鈴鹿先輩！おはようございます！」
　マシュの後ろから声を掛けてきたのは、学園の中でも一番女子高生らしいと良く話題になる鈴鹿である。最先端のファッションを常にアンテナで捕捉し、学園内では同じ女子高生からあこがれの目で見られる存在だ。
「こーんな朝っぱらからよく走れるよねーマシュたんは」
「ま、マシュたん!?」
「マシュたんは頑張り屋さんだねぇー。そうだ！よかったらウチと競争してみる？」
　今にも狐の尾でも飛び出てきそうな程にやんちゃな笑みを浮かべて鈴鹿は誘う。
「あ、いえ。これは日課の運動であって競争とかそういうのではありませんので…」
「ちぇ、つまんないのー。私に買ったらイチゴミルクでも奢ってあげたのに～」
　鈴鹿は心底残念そうに呟くと、マシュを抜いて塀の上を駆けて行った。気まぐれな狐っぽい言動である。その彼女も実は学内で優秀な成績を収めているという噂があり、実は頭が良いのでは？とよく話題に登っている。
「…私も先輩に追いつけるように頑張らないと」

小さく呟いたマシュは、虎の着ぐるみに竹刀で武装した体育教師の服装検査を乗り切り（片目を隠すヘアスタイルについては『カワイイからアリ！』らしい）、一階にある1年月組の教室に入った。

「あら、マシュさんじゃないですか。おはようございます」

マシュが息を整えてから開けた教室の入り口脇、そこには淡い緑のロングヘアーを靡かせた少女が立っていた。マシュの学友の一人であり、能楽研究会を入学してすぐに設立した清姫である。彼女の能楽に傾ける情熱は本物で、特にある寺にまつわる内容を演じるときは、本物さながらの舞を見せるので何かしらの大会に出て好成績を収めることを期待されている。

「あ、おはようございます。きよひー、と呼んでもいいんですよね？」

「ええ、昨日私が言ったとおりですわ。私と貴女はいわば恋敵の関係……呼び名で油断を誘うのは定石ですのよ？」

「……？」

清姫の後半部分のセリフが良く聞こえなかったのだが、マシュは最終的に自分と仲よくなりたいのだろうと結論付けた。

「能楽研究会には先輩も所属しているとお聞きしました。私も今度見学してみていいですか？」

「(うっ…!?何という純粋な笑み…!恋敵である筈なのに一方的に攻めている私の方が罪悪感を抱いてしまうほどに無垢な笑顔…!やはり後輩属性は侮れませんわ…)」

純粋無垢なマシュによる後輩属性の発露に、ストーカーかつヤンデレ気質と色々黒い清姫は明確なダメージを負っていた。

「そこのお二人さん。早く席についてはくれないかね。そろそろホームルームを始めるぞ」

教卓のケイローン先生が呼びかけると、タイミングを計ったかのように始業のチャイムが鳴り響く。残響が消えないうちに、二人は慌てて自分の席に着くのだった。

〜・〜・〜・〜

一時間目の体育はスカサハ先生とジャガーマン先生主導で行われるが、一方はケルト式スパルタランニング、もう一方は密林のジャガー王国秘伝の剣術指導と、比類なき過酷な運動もしくは比類なき迷走の果ての二択を迫られる。因みにマシュはスカサハ先生の元で体力づくりに励んでいる。

二時間目の道徳は架空のキャラクターである「不幸なランサー君」が遭遇する様々な状況に対して、果たしてランサー君を不幸から救うためにはどうすればいいか話し合い

をする事となった。結果、教室全体の意見として「ランサー君が不幸で死ぬのは運命である」という結論が出て担任のケイローン先生を困らせた。

三時間目は数学……のはずなのだが、担当のエレナ先生の教える数学は高等数学というよりも数秘術に近く、途中で先生の話がオカルト方面に大きくずれてしまった為に生徒たちは自習を余儀なくされた。

四時間目、物理。時間割を間違え鉢合わせた二コラ先生とエジソン先生が大ゲンカした時点で察して欲しい。

そうこうする内に迎えた昼休み。マシュは母親が作ってくれた弁当を小脇に抱えて階段を駆け上っていた。目指すは屋上、彼女にとって大切な先輩が待っている場所だ。

「先輩！今日もお疲れ様です！」

「やあ、マシュ。今日もお疲れ」

ニコリと笑ってかじり後の付いたサンドイッチを振る少年、その名を藤丸立香という。当カルデア学園所属の二年生にして、平凡なスペックでありながら巧みなコミュニケーション能力と篤い人望で生徒会長（マスター）を務めている。

「今日は少し時間に遅れてしまいました……。すみません、昼休みの時間は限られてい

るのに」
「いいよいいよ。弁当食べる時間はまだ残っているし、僕としてはマシュと一緒にお昼を食べる事が一番だからね。多少遅れても気にしないさ」
　のんびりとした動作で牛乳パックを持ち上げた立香は、あらかじめ敷いてあったレジャーシートの隅によって、傍らのスペースをポンポンと叩いた。
「ほら、早く食べよう」
「は、はい」
　マシュは少し緊張しながら隣に座った。カルデアでのランチタイム。マシュにとって先輩と晴れた日に太陽の光を浴びながら食べるランチは、学園生活の中でも特にお気に入りの時間である。
「「じーーーーーーー」」
　しかし、本日に限って平穏を破りに来た三人娘の姿があった。学園内でもモテると話題の藤丸立香。その立香を常に狙い家の位置まで特定しているという質の悪い事で有名な三人である。
　一人目は言わずもがな、無理やり能楽研究会に立香を連れ込んだ清姫。
　二人目はカルデア学園の不遜な輩を裏で退治している組織の一員、コードネーム〝静謐〟。

三人目は母性溢れる三年生の元生徒会長かつ現陰の風紀委員長、頼光。

人呼んで「生徒会長の寝床に侵入しそうな女生徒三人衆」、またの名を（詳しい由来は不明だが）「溶岩水泳部」である。

「あらあら、私も先代生徒会長として混ざりたいわー」

「弁当…私の作った弁当でも、会長なら美味しく食べてくれる筈…」

「やはりマシュさんに先手を取られっぱなしでは勝ち目が無くなってしまいますわ……」

マシュという最大の恋敵に対抗するために休戦協定を結んだ三人だったのだが、残念ながら三人とも正面から立香に愛を受け止めさせる手段を保有していなかったが為に、日々様子見で終わってしまっているのだ。おかげで日々焦る思いだけ募るわ、目の前で関係がどんどん進展していくわ散々である。

この後、しびれを切らした三人がとびかかる寸前に金髪バイク乗り（坂田金時）、狐のチャット仲間（玉藻の前）、やたら長い腕を持つコードネーム〝呪腕〟の先生というメンツが陰から止めに入っていった。

五時間目の美術（ダヴィンチ先生が担当、内容は自称イケメン猪八戒（ダビデ像）のデッサン）、六

時間目の家庭科（テレビでおなじみ！赤いエプロンの贋作料理人がゲストで登場）、七時間目の世界史（テーマによって先生が一人一人交代する。本日のインド史はアルジュナ先生が講師を務めた）を乗り切ったマシュは、放課後部活に向かった。

「やあ、ギャラハッド。今日は円卓会議のない日だけど、どうしたんだい？」

校舎の隅にある風変わりな部活「円卓会議」。偶然にもそろったアーサー王の円卓にいたとされる人物たちと同名の生徒たちによって組まれたサークルである。活動内容は主に学園での生活を向上させる為の話し合い、地域におけるボランティアへの参加、そして部室の拡張である。

メンバーのうちマシュだけは本名と役職名が一致していないのだが、ランスロットの熱心な勧誘によりギャラハッドとして加入することになった。

「あれ？本日は確か、アルトリア部長がボランティアに参加しようと仰っていたのでは」

「ああ、アレね。その話はいつものモードレットの反逆で立ち消えになったよ。あの子にも困ったものだねえ」

やれやれと円形の机の縁に腰かけ首を振るのは、「円卓会議」相談役のマーリン。見事な白髪でありながら円卓メンバーのナンパ四天王の一人として数えられている優男である。

「今日はフォウを連れてきていないのかい？あーあ、僕としてはアイツを弄るだけでも

楽しいのにさ」

マーリンは着崩した制服からネクタイを引っこ抜くと、宙に向けてブンブンと回した。

「それにしても、僕としては単に助言に来ただけなんだけど。一応聞いとく？」

マーリンの口調に、マシュは少し不安な感情を覚えた。

そもそも今日のボランティア活動が無いという知らせは、恐らくマシュしか知らなかった情報だ。マシュは未だに自分の携帯端末を持っていないので、こういう突然の連絡は遅れて知らされることが多い。そして過去に同じことが起こった際には扉脇のホワイトボードに伝言が書かれていることが常なのだ。

しかし、ホワイトボードを先程確認した時は何も書かれていなかった。部室の中には明らかに待ち伏せしていたマーリン。話す内容に不安を感じない方が可笑しい状況だろう。

「…はい、助言と言うのであれば」

しかし、マシュは知っている。このマーリンという人物は基本的に危険な人物ではないことを。聡い彼の言葉であれば、助言と言うのも何らかの大きな価値があるかも知れない。

「ほう、これはこの世界での意識の上での判断なのか。それとも内面にいるキミ自身の

感情が無意識に選ばせた選択肢なのか。興味深い話だが、ここはサックリ言わせてもらおう」

花の魔術師はニコリと笑って言った。

「今のキミはね、敵に見せられた夢の中に囚われているのさ」

胡蝶／マシュ・キリエライト

英霊という存在は、必ずしも純粋な人間のみなれる訳ではない。人類史に名を残す存在と言うものは、時に人間の枠を超える。

代表的な例としては、神性スキルが挙げられるだろう。

神の血を受け継いだ者は得てして人々に救いを与える英雄、或いは災いを齎す悪となることが多い。

神性スキルというのは召喚されたサーヴァントがどれ程神に近いかを表しており、例えば英雄王として有名なギルガメッシュはCランクで保有している。本来ならば身体の三分の二に神の血が流れているため、ランクはもっと高い。

にも拘わらすCランクの抑えられているのは、当人が神という存在を嫌っているためだ。

人間以外の英霊、となれば他にも様々な例がある。動物にして英霊の座に登録された者、概念上の存在から英霊に昇華した者、人工的に神話エッセンスを配合して作られたサーヴァントｅｔｃ…

しかして、アーサー王伝説で有名となった魔術師マーリンもまた、純粋な人ではない。

最高峰の魔術師として名高いマーリンは、人の夢に侵入する力を持っているのだから。
彼は保有する千里眼で、人類の幸福を眺め続ける混血の夢魔である。
故に人類としての価値観を持たず、人らしい感情を本当の意味で発露したことは無い。あったとしても、それは完全な見せかけであり思考形態は人間よりむしろ昆虫に近いとまで言われた。
しかし、彼は魔術師として人間と関わる中で〝彼女〟を見出すこととなる。
類まれなる運命を生まれながらに秘め、円卓の騎士を纏めあげるカリスマを持ち、その人生を全て祖国に捧げた騎士王。
後の世では、「アーサー・ペンドラゴン」と呼ばれる聖剣の担い手である。

〜・〜・〜・〜

「これは僕が手を出す問題ではなかったのかもしれない。何せ既に世界の法則は明後日の方角に乱れているからね。千里眼でも見通すことが出来ない未来ともなれば、僕も何処まで手を出せばいいのか分からない」
ここは夢の中である。そう告げられて戸惑うマシュを眺めながら、花の魔術師は独りごちる。

「でも、既に敵の攻撃は始まっている。僕もまた魔術師である以上、ソロモンの魔術を超えることは出来ないはずだ。その証拠に1度目の夢には割り込めなかった。でも、2度目には僅かな隙があった……」

マーリンの手に握られていたネクタイは、いつの間にか七色の石が嵌め込まれた杖となっていた。右手にもったその杖で部室の床をコンコンとノックすると、マーリンとマシュを取り囲む床、天井、壁が全て理想郷に咲き乱れる花で覆われた。

「さて、これで信じてくれるかな」

マシュに向かって声を掛けるも、当人はひたすら困惑した表情でただ首を降るばかり。それもまた当然と言えよう、彼女にはまだこの世界が全て夢であったと認識出来ていないのだ。

「この世界はつまるところ、君の夢だ。だから僕という存在が君の意志に反して気ままに喋りかけている時点で、君は違和感をどこかで抱いているはずだ。こんなはずがない、と。私が望んだ光景じゃないと思い始めているはずだ」

マーリンが一歩、マシュに近づく。

こうして自らの正体を明かしながらも、夢の中であることを自覚させる方法は、諸刃の剣である。何故なら夢を見ている本人に気づかれたその瞬間からマーリンは夢の登場人物にして部外者である。必然的に、夢を見ている本人がその気になるだけでマーリ

ンはいとも容易く潰されてしまうのだ。
よって、マーリンからしても綱渡りの状況下での会話なのだが――一歩、マシュに向かって歩を進めると、マシュの方が魔術師に怯えたように1歩下がった。
「アレ、僕が怖いのかい？それは心外だな」
優しい微笑みを浮かべるマーリンに対して、マシュは。
「だって……!!」
恐怖を抑えきれずに、叫んだ。
「だって……今まで全部が夢だなんて、そんな訳がない!!生まれてからずっと私でいる記憶があるのに、ここが夢だなんて有り得ない!!」
……そう、マシュが夢の中で過ごした時間というのは、現実世界と大きく乖離している。具体的に言えば、オルガマリー＝マシュとして産まれた瞬間から、現実世界のマシュ自身に近い年齢に至るまでの十六年間の人生を丸ごと体験したのだ。
彼女にとって、ここが現実だった。
花の魔術師がタネ明かしをするまでは、ずっと平穏そのものの人生を送ってきたのだ。
「なるほど、いままでの自分の人生を否定されてしまったという事か。自分がいつか願った通り、何もかも『先輩』と同じ境遇で、普通の生活を送っている気になれたのだ

から、無理もない……」

マーリンの周囲から静かに光が立ち上り始める。英霊が現世から退去する際に発生するそれとそっくりな輝き。辿ってきた道程が違うとはいえ、やはり純真無垢なマシュがマーリンを夢から出来る限り優しく、強制的に追い出そうとしているのだ。

「……君にとってもしこの世界が現実であるというのなら、魔術王はその世界を作ってくれるだろう。誰もが幸福で、死への恐怖を忘れて、ひたすら理想を求めることの出来る、平和な世界。悲鳴もなく絶望もなく闇が一切存在しない、悪を恐れる必要のない世界……正しく理想郷、だろうね」

それでも、とマーリンは言葉を継ぐ。

「それでも君は一度、自分の力で結論を出したはずだ。影からこっそり見てはいたけど、あれは実に素晴らしい主張だった。だから僕には惜しくて堪らないのさ」

今回は、どうも妙だよね。

マーリンはポツリと呟いた。

今までの魔術王のやり方を見れば、手段そのものはさておき、人の手によって産み出されたホムンクルスであるマシュに対する態度が一貫して真摯であることは確かである。

何度も何度も自らの仕組んだ特異点を乗り越えてきた立香達をいよいよ計画の大き

な障害だと認めた。だからこそ、正面から乗り込んできたカルデアを正面から潰してしまおうという算段であったはずだ。

しかし、今回のマシュに対する行動は妙に逸れていた。

「僕はできれば後の戦いに余力を残しておきたかったんだけどね。だけど、立香君の決意と君の意思を無下にするわけにはいかない。どうだい？思い出せないかい？」

マーリンが、既に3分の2ほど消えている身体を捻り杖で床を突いた。すると、マーリンの周囲に幾つもの風景が流れては消えていく。

第七特異点：絶対魔獣戦線　バビロニア
第六特異点：神聖円卓領域　キャメロット
第五特異点：北米神話大戦　イ・プルーリバス・ウナム
第四特異点：死界魔霧都市　ロンドン
第三特異点：封鎖終局四海　オケアノス
第二特異点：永続狂気帝国　セプテム
第一特異点：邪龍百年戦争　オルレアン
特異点F：炎上汚染都市　冬木

「――貴様に向ける憎しみはない。ウルクの民も貴様に向ける怒りはあれ、憎しみは持たぬ。あるのは分かり合えぬ摂理だけだ」

「――良かった。ではマシュ殿、お供をお願いしたい。どうか、至らぬ私を支えて頂ければ」
「――この時代を潰すということは、私の流した血が、私の同胞が流した血が、無為になるということだ」
「――オレでない癖にブリテンを蹂躙するお前を、オレは決して許さない。お前が人間であろうとな」
「――こいつはアンタのための大一番だ！不敵に笑ってこう返してやんな！化け物なんかに用はありません！いいから素敵な王冠を渡してちょうだい！ってな！」
「――ローマとは浪漫であり神代より卒業し、人として人を愛す心を得た、人間的なるもの、その全ての象徴である」
「――君は世界によって作られ、君は世界を拡張し、成長させる。人間になる、とはそういうコトだ」
「――やだ、やめて、いやいやいやいやいやいやいや……！　だってまだ何もしていない！生まれてからずっと、ただの一度も、誰にも認めてもらえなかったのに――――！」

「先輩、手を」

手を差し伸べた先、彼女が見たのは。
焼け落ちていくカルデアを背にして、絶望的な状況の中で自分を安心させようと微笑む立香の――
「ではでは、彼を頼んだよ。マシュ・キリエライト。ギャラハッドを宿す憑依英霊にして、藤丸立香の最初のサーヴァントよ」

～・～・～・～

「失敗、か」
魔術を用いてマシュの夢に干渉した魔術王だったが、一度目ならず二度目の誘いも実らないとなれば、やはり正面からカルデアを迎え撃つ他なかった。
全ての魔術においてあらゆる魔術師を上回る魔術王だが、夢に関しては本家である夢魔を超えられるとは思っていない。故に夢での接触を行う時は最大限の注意を払っていたのだが――。
（……。）
まあいいだろう。
魔術王は決心を固めていた。自分が今如何なる存在に侵食されていたとしても、全て

を侵食される訳があるまいし、ましてや己の計画を根本から崩すような事態にはならないだろうと見越したのだ。

その証拠に、千里眼で見える未来に揺らぎはない。

「魔神柱よ、起動せよ」

溶鉱炉ナベリウス、情報室フラウロス、観測所フォルネウス、管制塔バルバトス、兵装舎ハルファス、覗覚星アモン、生命院サブナック、廃棄孔アンドロマリウス

ここに、全ての魔神柱が連立する。互いに補い合い、無限に存在を証明する、無数の歯車。

カルデアよ、人類の救済を阻んだことを、ここに後悔するがいい。

「――――マシュ、か」

貴様もまた、敵の一人なれば。

焼き尽くすしか無かろう。

～・～・～・～

永い夢を見た。

とてもとても永い夢を見た。それこそ、第２の人生であると錯覚しそうな程の、何も

かもが平和でほのぼのとしていて、人類がみな救われた世界だった。

「君が望めば、この世界は夢から現実になる」

誰かにそう告げられて、だからマシュは何もかも投げ出そうと思ってしまった。

何を投げ出そうとしているのか、気が付かぬままに。

「ソロモン王……私に何故この夢を見せてくれたのか、今なら理解できます。きっと私を哀れんでくれたんですよね？残り少ない寿命に怯えて過ごさなくてはならない私に、二つの未来を提示してくれた」

確かにそれは救済だ。永遠の命、または人並みの平穏。前者の世界はともかくとして、後者の世界はカルデアの人々が望んで止まない「世界が亡びる前の平穏」だった。

「それでも私が、あの未来を選ぶことは卑怯です。先輩と、ドクターと、ダ・ヴィンチちゃんと、カルデアの職員の方々と、それから……今まで出会った英霊の皆さんや、現地の方々。全ての人との出会いを無かったことにしてしまう」

貴女にとって一番の宝物は、何ですか？

そう聞かれたなら、マシュは1番にこう答えるだろう。

今まで経験した出逢い、その全てであると。

「魔術王よ！私に他の未来を示してくれたことには感謝します。ですが、私にとって一番の恩返しが、まだ出来ていないんです!!」

マシュの意志により、夢の世界は砕け散った。正面のマーリンは辛うじて消滅から回復し、マシュの夢から退去した。

あの選択肢を選べば、人類を救済するゲーティアの計画は滞りなく進んだに違いない。カルデアのファーストサーヴァントにして人類最後のマスターの盾を崩してしまえば、それだけでカルデア側に綻びが生じたからである。

だが、ここに魔術王並びに「――――」の目論見は成立しなかった。

よって、終局特異点での決戦は不可避となり、ここに壮大な運命（Fate）が結集する。

番外編
藤泡対談／クラスについて

藤「また夢でここに来たのか……でも本文と雰囲気が違うような？」
泡「こちらで会うのは久しぶりだね、マスター」
藤「ああ、ブギーポップか。今日は何の用で引き込んだんだ？」
泡「――強いて言うなら退屈しのぎさ」
藤「――退屈しのぎ？」
泡「そう、退屈しのぎ。より深い理由を語るなら本作者が原作における〝竹泡対談〟を知って『じゃあ二次創作でも似たような事をやってみよう』と思い立ったという、分かりやすく言い換えるとパクｒ――」
藤「よしてくれ。今さっき画面外から殺気を感じた」
泡「……まあいいだろう。人を弄るのはやりすぎると良くない」
泡「話を変えよう。今回ぼくが君と話そうと思っていたのは『サーヴァントのクラスについて』だ」
藤「ああ、セイバーとかアーチャーとかのアレね」

泡「ぼくがこの度召喚されるに当たってアルターエゴというクラスが宛がわれたのだが、まず一旦ぼくが何故このクラスになったのか整理してみよう」
藤「アルターエゴってクラスは、ざっと言うと〝二重人格〟を表していたんだっけ」
泡「その通り。僕は存在そのものが〝他者の人格〟だ。人格そのものであるサーヴァントなんてイレギュラーにも程があったと思うけど、確かに無理やり当てはめるとすれば妥当なクラスだね」
藤「でもカルデアには二重人格のサーヴァントが居るよね？一番の代表としてはジキルさんとか。あれはアルターエゴじゃないの？」
泡「ふむ……これはぼくの勝手な想像だけど、『オリジナルとは全く別の、他人としての霊基を獲得した存在』がアルターエゴに相当するのではないかな」
藤「なるほど。じゃあ手始めにメルトリリスとパッションリップの場合はどうなるか聞いてもいいかい？」

【ネタバレ要注意！ブラウザバックＯＫです】

藤「……ああ、そういう警告ね…本文でも一々表示しておけばいいのに……」
泡「警告表示もバッチリだから説明しよう。あの二人の事はダヴィンチから聞かせて

もらったけど、大本の存在であるＢＢから切り離されて独自の霊基を持ち、なおかつオリジナルに反抗したからアルターエゴの条件を満たしたのではないかとみている。個人の考えではあるけどね」

藤「じゃあ玉藻の前とその分身タマモナインは？」

泡「あれはそもそも根本が大妖怪だ。途轍もない妖力を持つとはいえ、九つの尾を切り離して分割してもそれぞれがサーヴァントに成り得るというのは実に恐ろしいことだ……。もちろん、この場合もアルターエゴとしての条件を満たしていると言えるだろう。ただ分割した尾の人格が実に個性的らしいね。そのせいもあってか全員がバラバラのクラスとして召喚される可能性を持っている。アルターエゴ適性があるサーヴァントの中でも不可思議な存在だろう」

泡「アルターエゴについて話がまとまったところで、改めてマスターに聞きたいことがある」

藤「なんだい、それは？」

泡「ぼくがアルターエゴでなければどんなクラスとして召喚されていたと思う？純粋な意見が聞きたいのだが、どうだろう」

藤「え？ブギーポップが？ちょっと待てよ」

藤「……」

藤「……ありそうな順にルーラー、アサシン、アーチャーかな」
泡「その理由は？」
藤「まず基本クラスの中でセイバー・ランサー・ライダー・キャスター・バーサーカーは除外していいと思う。これは戦い方とか所有する武器を見ての判断だね。これらのクラスは名前の通りの戦い方だったり宝具を持っていたりすることが多いからね」
泡「なるほど」
藤「次にエクストラクラスだけど、こっちは武器と言うより本人の在り方とか役割に依るかな？」
泡「在り方？」
藤「そう。ルーラーだと場を保つための公平無私な裁定者。アベンジャーは誰かに対する怨讐を抱える復讐者。ムーンキャンサーは……正直よくわからないけど、感覚としては月みたいに地球全体を側で見守る外部からの監視者ってところかな。で、アルターエゴはさっき説明してくれた通り。フォーリナーは地球外生命体だね」
泡「……」
藤「これを踏まえて考察すると、『世界の悪』を自動的に狩ってきた君の在り方はルーラーに近いと思う。アサシンは暗器を使って暗殺を行うサーヴァントが多いから、これも結構近そうだと思う。まあ、たまに誰かに見られながら敵を排除していた君だと少し

薄いかな？」

泡「…じゃあアーチャーを候補に入れたのはどうしてだい？この鋼糸はどう見ても弓に見えないが……」

藤「あー、アーチャーは別」

泡「別？」

藤「アーチャーってクラスは何故か弓を使わないサーヴァントが多くいるんだよ。飛び道具っぽい銃とか大砲ならまだしも、剣を量産して飛ばしたり自分の財宝を撒き散らしたりする行為も〝飛び道具〟に入るからね」

泡「それはまた随分とアバウトだな」

藤「最近だとイルカショーとフラフープを組み合わせた戦闘スタイルの聖女がアーチャーになっていたよ」

泡「それでいいのか本人は」

藤「……まあ、クラスに拘ると英霊としての人生（？）を棒に振るってことかな。本人が満足できる、あるいは楽しめるクラスならそれで良し！それがグランドオーダーさ」

泡「無理やり締めてくれて非常に助かったよ」

藤「またこの変な考察詰め込んだコーナーする際は君が締めてくれよ」

泡「それが狙いか……あ、読者の皆さん。ここまで読んでいただいてありがとうございました」

藤泡対談／宝具について

泡「やあ、また会ったねマスター」

藤「……作者はいつの間に味をしめてしまったのか。なんか憐れだね」

泡「作者が憐れなのはいつもの事さ。そもそも二次創作を書く人間の殆どは『ＵＡ』とか『お気に入り』に代表される〝読者からの評価〟に囚われているのさ。自分の書いた小説を読んで欲しいという気持ちが作者を暴走させる。その暴走がいい方向に向かうか悪い方向に向かうか、それは作者の技量次第だけどね」

藤「そんな事言って読者から反感買っても知らないぞ、僕は」

泡「その時はその時。この『藤泡対談』そのものが泡のように消えるだけさ」

藤「変な風にカッコつけるんじゃない」

泡「いつもの事さ」

泡「さて今回は『宝具について』が議題だね。しかし宝具には多種多様な種類がある訳だが……一つ一つについて論じていくのかい？」

藤「いやいやまさか。作者は宝具の分類とか定義とかそこら辺を一部だけ論じたいだけらしいよ。ということでまず話す内容は『そもそも宝具とは何ぞや？』ってこと。

じゃあブギーポップは宝具ってどんな存在だと思う」
泡「ぼくは宝具を今現在明確に所有している訳じゃないけど、他のサーヴァントの宝具なら飽きるほど見たからね。しかしぼくの主観で良いとはいえ宝具の定義を聞かれても困るな……。パッと考えつくのは『必殺技』という感じだが」
藤「うーん、当たらずも遠からずって所かな」
藤「宝具とは人の幻想によって生み出された、サーヴァントのそれぞれが持つ固有の所有物のことだ。少なくともこの作品ではそういう認識になっている」
泡「人の幻想……って何だい？」
藤「サーヴァントという存在は後世の人間のイメージによって在り方が変化する場合があるだろう？史実とは異なるサーヴァントが誕生するのはそのせい。つまり英霊は座に登録されることで召喚可能になるけど、その英霊も強い願いや思い込みによって変質する場合がある。それが強力なイメージ、即ち人の幻想ってこと」
泡「分かったような分からないような説明だな」
藤「じゃあ具体例を出してみよう」
藤「まず前提として、サーヴァント達は伝説を持っている。この伝説というのは英霊の座に上り詰められる位の伝承や神話、物語や概念って意味だね」
泡「ふむふむ」

藤「だからサーヴァントはそういう伝説あって初めて成り立つ存在――逆に言うと伝説なければサーヴァント足りえないってことだね。そして伝説というのは人のイメージによって幾らでも変化するものさ」

泡「なるほど」

藤「そして宝具というのは、伝説の内容を象徴するモノのこと。宝具はそのサーヴァントに備わっている伝説を代表する代物なんだ。だから真名バレを防ぐ為に有名なサーヴァントは自らの宝具を隠そうとする」

泡「例えば例のセイバー、アルトリアは世界で最も有名かもしれない宝具『約束された勝利の剣』を持っているが確かにいつも空気で覆って隠してはいるな」

藤「その通り。でも宝具ってものはその英霊にとって自らを象徴するモノであることもある」

藤「世間一般のイメージだけではなく、本当のサーヴァントそのものから生み出させる宝具もある。何事もイメージだけでは構成出来ないんだよ。身近な所で言うとフランケンシュタインとかそうだね。電気を操るとか、魔力を電気に変換するとか、実は男性ではなく女性だったとか、色々違うだろう？」

泡「言われてみればそうだな」

藤「つまるところ、史実の内容と後の伝説が入り交じって生まれたサーヴァントを象

徴するモノが宝具。そういう認識で構わないよ」

泡「しかし宝具ってものは『宝具』という字を見る限り、道具のような印象を受けるが中には道具に見えない宝具があったりするだろう?アレらはどうなんだ」

藤「それは勿論、宝具は道具に限るようなモノじゃない。佐々木小次郎が『燕返し』を、ナーサリーライムが自分自身を宝具とするように宝具そのものが概念だったり技だったりすることがある。そもそも宝具は道具を介在する事でイメージしやすいから道具の形を取りやすいのであって、イメージが形のないモノに及んでも宝具になる事もあるのさ」

泡「じゃあ続いての質問。宝具の種類には『レンジ』『ランク』『最大補足』『対○宝具』があるけど、これらについて教えて欲しいね」

藤「めんどい」

泡「一言目からそれはどうなんだよ」

藤「ごめんごめん。だって本当に面倒なんだよ……まあ知りたいと言うなら教えるけどさ。でも長くなるよ?」

藤「まず『レンジ』について。これは宝具の射程とか効果範囲を表している数字だけど、具体的な単位が全く無いんだよ。もはや感覚の世界だね」

泡「普通に単位としてメートルとかヘクタールとか色々あると思うが」

藤「そういう具体的な単位では表せない世界なんだよ、宝具というのは。例えば人々の精神に影響する宝具をどうやって表せばいい？世界の滅びを再現する宝具は？月まで斬撃を飛ばす宝具とか、距離の上では規格外だけど傷をつけられる範囲が1センチとかだったらどう表現したらいい？」

泡「う……確かに難しいな」

藤「でしょ？他の項目についても曖昧な感じだから、概要だけ説明しよう」

藤「『ランク』は宝具の総合的な威力についての値だね。中でも魔力消費とか神秘の程度とかが割合として多い。でも宝具の脅威度は『ランク』だけでは測れないのが現状だ。例としてビリー・ザ・キッドの宝具はダメージこそサーヴァント全体では見劣りするけど、発動速度が異常に速い。多分不意打ちならギルガメッシュに勝てるね（個人の見解です）。」

藤「次に最大補足。こちらは『レンジ』よりもより効果範囲を示した値だけど、概念としては〝宝具の効果にどれほど人を巻き込めるか〟が焦点になっている。多ければ多いほどより多くの対象を攻撃できるという指標だね」

藤「そして『対〇宝具』に感じてだけど……その……一番説明が難しいんだよ……個別で議題にしたいんだけど、ダメかな？」

泡「さくしゃはこの一遍で宝具について纏めたいらしいよ（棒読み）」

藤「作者ェ……」

藤「『対○宝具』の○には幾つも種類がある。じゃあ折角だから○に当てはまる単語を列挙していこう」

泡「無茶な要求に対してヤケになってるな」

※この先、とても長いスクロールがあります。「いちいち宝具の種別とか見てらんねぇ！」という方は是非宝具の種別の多さに呆れながら読み飛ばしてください※

泡「おいおい、作者は『ｅｔｃ』とか知らないのか!!」

【対○宝具】

対界宝具

対魔術宝具

対陣宝具

対門宝具

対己宝具

対心宝具

対衆宝具
対都市宝具
対星宝具
対神宝具
対国宝具
対粛正宝具
対理宝具
対宝宝具
対人理宝具
対民宝具
対宴宝具
対悪宝具
対竜宝具
対魔宝具
対波宝具
対山宝具
対冠宝具

対籠城宝具
対王宝具
対獣宝具
対軍個人宝具
対結界宝具
対惑星宝具
【例外その一】
結界宝具
特攻宝具
概念宝具
城塞宝具
神性宝具
迷宮宝具
魔術宝具
契約宝具
記別宝具
疾走宝具

精霊宝具
開戦宝具
【例外その二】
対人魔剣
対人奥義
対軍奥義
対人絶技
対軍絶技

藤「とまあこんな感じ。もはやフィーリングだね。考えるな感じろ。説明しなくても見たら分かる!!それがこの書き表し方さ」

泡「よくもまあこんな暴挙を働いたものだ」

藤「作者もヤケなんだよ。なんてったって無駄としか思えないネタ宝具もこの中にあるからね。ほら、そこの『対波宝具』ってあるだろう？」

泡「……これだけあると探すのも一苦労だが、確かにあるな」

藤「それは夏のサーフィンにノリノリなサーヴァントが霊基を夏用に変化させた時に着いてきた宝具の種別だよ。ちなみに『対波宝具』に該当する宝具はこれだけ」

泡「えー」

藤「まあ字面でイメージしやすいのは良いと思うけどね。その宝具に対するイメージは六割方『対〇宝具』の表記で決まると僕は思う。【例外その一】は具体的な対象を示すよりも宝具の在り方を示した方がイメージしやすい宝具。【例外その二】は宝具が技である場合の表記だね」

泡「やはり種類として一番多いのは『対人宝具』かい？」

藤「その通り。竜とか幽霊とか神とか色々な敵が居るけど、やっぱり人間の一番の敵は人間だね」

泡「さて、最後にぼくの宝具についてなんだけど」

藤「……」

泡「……ぼくの、宝具について、なんだけど」

藤「……」

泡「……ひょっとして作者はぼくの宝具について見送る予定!?マジか!?」

藤「『ブギーポップ・ステータス』を番外編として時期が来たら公開します！時期が来たら！公開します!!」

泡「……宝具仮装展開」

泡「その鋼糸は理不尽なマスター、不合理な設定、怠惰な作者を裂き殺す！

『約束されたオチの宝具(ネタポッカリバー)』!!」

藤「流石にネタが過ぎたけど、今回はこれでお開きとさせていただきます」

泡「作者は少しくらい自粛するべきだと思うよ、ホント。では読者の皆さん、ここまで読んでいただきありがとうございました」

ステータス：ブギーポップ

【元ネタ】ブギーポップシリーズ
【ＣＬＡＳＳ】アルターエゴ
【マスター】藤丸立香
【真名】ブギーポップ
【性別】不明
【身長・体重】マスターに依存
【属性】秩序・善
【ステータス】
筋力　ＥＸ（Ｃ＋＋＋＋）
耐久　??
敏捷　ＥＸ（Ｃ＋＋＋＋）
魔力　なし
幸運　??
宝具　Ｂ＋＋

【クラス別スキル】

不気味の泡：ＥＸ

ブギーポップの本質を表したスキル。彼は自動的に人類の誰かの〝人格〟として体を借りて世界の敵を倒してきた。その精神は人に似て人では無い為、あらゆる精神異常性スキルに対して完全耐性を獲得する。また「人から外れたヒト」に対して特攻を有する。

【固有スキル】

インターセプト：Ａ

ブギーポップの有するスキルの中でも特に驚異的なスキル。相手の精神や攻撃に割り込む技術で、Ａランクともなれば物理的、魔術的、精神的なものまであらゆる物事に割り込むことが出来る。これによりブギーポップは元の世界において「死神」とも呼ばれる絶対的な力を持っていた。なお割り込む際、魔術など彼の世界に無かったものに対して衝撃波のようなもので反応する場合がある。

可能性の光（己）：Ａ

ブギーポップの戦闘力が高い理由を示すスキル。彼は元の世界において殆ど最強とも言える戦闘力を発揮していた。元々の「可能性の光」というスキルは人々の願望・期待を反映するスキルであるが、このスキルは「体を借りた相手の可能性を剪定事象を含

む平行世界から一時的に引き出し、掛け合わせる」という名称だけ借りて全く別のスキルと化している。在り方としては第二魔法に近いが、スキルとして定義されている為か魔力の消費が全くない上にデメリットが無い。

このスキルにより、パラメータ値のうち二つを瞬間的に増加させる事が出来る。

啓示（泡）：C

ブギーポップは世界の敵であるかどうか、また世界の敵が何処に居るかを詳細不明の基準で判断している。その判断基準はサーヴァントとなるにあたりスキル「啓示（泡）」として便宜的に表記された。

このスキルはブギーポップにとって最適な行動を指し示してくれる。

人間観察：D

人々を観察し、理解する技術。

ただ観察するだけでなく、名前も知らない人々の生活や好み、人生までを想定し、これを忘れない記憶力が重要とされる。

ブギーポップはかの著名な童話作家程の観察眼では無いにせよ、彼自身の精神を様々な人間との対話によって成長させてきた。それを示すスキルである。

【宝具】

『結末』

ランク：Ｂ＋＋＋　種別：対悪絶技　レンジ：1～10　最大捕捉：1人

ブギーポップが〈世界の敵〉に振るう絶対絶命の一撃。普段はあくまでも単なる武器の域を出ない鋼糸は、この瞬間だけ触れた相手を即座に殺す即死の属性を帯びている。即死自体は元の世界において様々な敵を殺しているので、精神を持つ生命体であれば必ず通用する。

この宝具を発動するには三つの条件が必要となる。

条件1：「ニュルンベルクのマイスタージンガー」がその場において演奏された、またはされていること。

条件2：敵がその生涯で最も美しい状態であること。

条件3：敵の死によって世界が救われること。

この内、条件2は〝結果的にそうなった〟とも見なせるので条件として意識的に満たす必要は無い。しかし条件3はこの世界における人類悪または人類悪に並ぶ邪悪でないと満たせないので使用できる場面が非常に限られる。

これらの条件が付加されているのは、ひとえにブギーポップが〈世界の敵〉を殺す際の状況そのものが宝具として昇華された為。そしてこの宝具の特筆すべき点は「魔力消費が無いこと」である。また、この宝具は便宜上宝具として扱われているもののその本質は技に近い。本人はこの技を宝具扱いこそしているものの、名前を付けていない。

この技を見たある青年は、とある人物の著作物より『結末』と命名した。

「結末――そこにはおそらく何も待ってはいない」

『深陽学園（あるゆうぐれのおくじょう）』

ランク：E　種別：対人会話宝具　レンジ：――　最大捕捉：2人

相手と落ち着いた場所で話すための心象世界を展開する。この宝具そのものに戦闘関係の能力は備わっておらず、本人曰く持っている意味がない宝具。

この宝具はブギーポップが話し相手を選ぶと発動する。選ばれた相手は発動と共に精神のみ時の流れから取り残されたブギーポップの心象世界である『深陽学園』に取り込まれ、武装解除した状態で強制的にブギーポップと話すことになる。取り込まれた相手とブギーポップは話す内容がどう転んだとしても互いを一切傷付けられず、また一方が話し合いを止めたいと心の底から願えば現実世界に帰還できる。

この心象世界の実態は、ブギーポップのいた世界の光景を、ブギーポップがこの世界に来た時に出来たパスを通じて本人の心象世界に映し出しているだけである。よって魔力消費は四六時中展開していても大丈夫な範囲に収まっている。

【Ｗｅａｐｏｎ】

極細ワイヤー：出自不明の武器。あらゆる敵を断絶してきたブギーポップ愛用の品。非常に丈夫で斬れ味が鋭く、驚く程自由自在な動きをするので応用力が高い。

ロングコート：とある男から受け継いだファッションの一部。武器とは言い難く宝具とするには神秘が足りないものの、原理不明の収納機能がついているので結構なんでも入る。

【解説】

聖晶石を三個から二個に変更し召喚実験を行った結果、マスターの体に霊基を融合した状態で召喚された特殊擬似サーヴァント。彼の本来属している世界はカルデアのある世界とは全く接点がない（平行世界へシフトする機械があっても辿り着けない程にかけ離れた世界）ために、召喚が成功したこと自体が奇跡のようなもの。恐らく何らかの因果が働いていると思われるが、現時点では不明。またブギーポップが召喚された事により、ブギーポップの世界との繋がりが出来た可能性がある。

元の世界では〈世界の敵〉と呼ばれた存在を狩ることで世界を維持していた。二重人格のように現れる形式は元からのもので、それ故に変身ヒーローのような扱いを受けていた。また絶対的な強さで敵の悉くを殺す噂は「死神」とも扱われた。しかし当時本体としていた人物は高校生程度の少女。ブギーポップと本体の繋がりを知っていた人物は、本体が付き合っていた彼氏を含めて極数人しか居なかった。

そもそも人間であるかどうかすらあやふやな精神体。一部では「抑止力そのものが一人の人格として具現化したものではないか」と言われているが、証拠はない。基本的に

無表情だが時々奇妙な表情を浮かべることがあり、本人に関わった者曰く笑う事はないらしい。掴み所のない性格だが、長い間培ってきた人間観察により一定の人物観、死生観を持っている。一度〈世界の敵〉と認定した相手には容赦しないが、認定を免れた者は見逃す場合がある。

ステータス：『パンドラ』

【元ネタ】ブギーポップシリーズ
【ＣＬＡＳＳ】ルーラー
【マスター】
【真名】『パンドラ』
【性別】男
【身長・体重】１７４ｃｍ・５６ｋｇ
【属性】混沌・善
【ステータス】
筋力　Ｃ
耐久　Ｅ
敏捷　Ｃ
魔力　Ｃ
幸運　Ｄ＋＋
宝具　Ｂ

【クラス別スキル】

真名看破：D

視界に入ったサーヴァントの真名を看破するスキル。しかしDランクである為成功率はかなり低い。抑止力によってルーラークラスである事を正当化するため無理やり後付けされたもの。よってランクは低いものの、本人は後述する宝具の能力と併用することで利便性を上げている。

【固有スキル】

直感：D＋

戦闘時、つねに自身にとって有利な展開を〝感じ取る〟能力。攻撃をある程度は予見することができる。『パンドラ』が生前積んだ数々の経験が元になったもの。

【宝具】

『未来紡ぎし六人の手（リリーシング・パンドラ）』

ランク：B　種別：対人宝具　レンジ：??　最大捕捉：??

『パンドラ』が抑止の守護者として形成される際、『パンドラ』の持つ特異な能力全てが一つの神秘として形を成したもの。

将来鏡面に映し出されるであろう人物を見出す両眼。直近で起きる未来を再現する

声帯。スキル「啓示」にも似た曖昧かつ的確な予言。自らが行動する先にあるものを匂いとして感知する鼻。予知された未来を正確に模写し描き出す両手。そして敵対する者を排除する為に創り出された、生物を絶命させる液を分泌させる体全体。全てが一つの宝具として連動している。

『パンドラ』はこの宝具を使うことによって、自分が召喚された場所でどのような事件が発生するのか、誰を救い誰を殺せば良いのかを予知する。六つの能力一つ一つは決定的な宝具としての能力に欠けるが全てを総括して使用する『パンドラ』は、どのような敵に対しても行動パターンや情報を知る事が可能である為、敵より必ず有利な立場に立ち、生物の体を溶かす液で大ダメージを与えられる。

【Ｗｅａｐｏｎ】

なし。強いて言うなら徒手空拳が武器。

【解説】

世界のバランスを保つ為に、直近の未来を的確に予知する英霊が必要となった抑止力が無理やり造りあげた存在。その正体は、ブギーポップの世界における改造人間――ユージンが仲間を守る為の戦いで命を落としてしまったイフの存在を核として抑止力に作り上げられた、とある六人の少年少女集団全員の能力を持つ抑止の守護者。

メインとなっている体は合成人間ユージンのものとなっており、人格も同様に本人が

メイン。稀に宝具を使用する時や感情が昂った際に別の人格が表出することがある。
イフの世界における少年少女たちは、自分達の能力で見た潜在する悪意をキッカケとして〈世界の敵〉に立ち向かった。その過程で仲間内の二人が命を落とし、彼はボロボロになりながら他の仲間を守るため戦った結果、史実とは異なり再生能力でも再生し切れずに死亡した。
ブギーポップと最期の時に出逢い、会話を交わすことで自らの行動が決して無駄ではなかったと認識する一方、予め定められた運命には抗えないと悟った。そして己に刻まれたダメージが深刻である事を知っていたため、「もし死んでしまえば仲間への贖罪の旅をしたい」と誰にともなく願ってしまった。
その時、未来で繋がったブギーポップの世界とカルデアのある世界で抑止力のチカラが働き、ユージンは抑止の守護者として契約を交わすことになる。
彼は今も世界の何処かで、己の宝具に棲むかつての仲間たちの温もりに微笑みながら、救えなかった全てを救う道のために人を殺める。